

學  
習  
院  
輔  
仁  
會  
雜  
誌

GAKUSHUIN  
HOJINKAI  
MAGAZINE  
2024  
vol.247

5%から、  
最大10%のご優待。

※松屋カードのご優待には、食料品・セール品・修理代・  
送料・一部の特定ブランドなどの除外品がございます。

松屋カード会員募集中。

- 松屋（銀座店・浅草店および銀座インズ内プチプチマルシェ）での年間お買い上げ額によって、翌年のご優待率が決まります。
- 松屋での年間お買い上げ額20万円未満→5%ご優待 20万円以上→7%ご優待 50万円以上→10%ご優待 ●初年度年会費無料（2年目以降年間税込1,100円）ご入会はカードセンター（銀座店7階）もしくはオンラインでも承ります。●松屋カードについて詳しくはこちら→<http://www.matsuya.com/corp/card/credit/>



# MATSUYA GINZA

MATSUYA GINZA : 3-6-1 GINZA, CHUO-KU, TOKYO 104-8130 PHONE 03-3567-1211 [www.matsuya.com](http://www.matsuya.com)

ガクシュウインシンシンカイ  
株式会社 学習院蓼々会

Tel. 03-5979-7767

Fax. 03-3985-3709

学習院 100%子会社として、輔仁会館 2 階大学売店（03-3985-1920）での学習院グッズ・文具類販売・自動車教習所・専門学校ご紹介、住まいのご紹介、学生保険窓口・海外旅行保険窓口、就職用証明写真、卒業式用貸衣装、電子辞書・パソコン販売等様々な分野で学



習院コミュニティへのお役立ちを目的に設立されました。最新情報をご入手頂く為には、ウェブサイトをご覧頂ければ幸いです。



<http://www.g-shinshinkai.co.jp>  
[info-kabu@g-shinshinkai.co.jp](mailto:info-kabu@g-shinshinkai.co.jp)

contents

長所を生かした「私」らしさを表現したコーデ	4
インタビュー	10
日本の魅力を再発見 in 東京	18
華麗なるヌン活～お嬢様の暮らし、したくない？～	22
ひとりで行けるもん！～ソロ活のすすめ～	24
朝活のすすめ	26
涙であなたもリフレッシュ！涙活	28
こんなカフェ知ってた？変わり種カフェ特集！	30
学生に聞いた！あなたの推しマンガ！！	32
タイトル：行ってきました！スヌーピーミュージアム	34
知りたいお仕事の裏側	36
食べて健康に！？マクロビオティックの魅力	38
花贈り～日々の暮らしに花を添えて～	40
学習院生にアンケート！こんなとき、何聴いてる??	42
本と言葉の贈りもの～大学生のあなたへ～	44
推しがいっぱい！ユニバーサル・スタジオ・ジャパン	46
My favorites of Gakushuin	50
作文集	51
エッセイ 学習院大学文学部教授中野貴文	76
雑誌賞	77
ゲームひろば	111
エッセイ 学習院大学イタリア語講師 押場靖志	115
デスク通信	116
奥付・編集後記	118

GAKUSHUIN  
HOJINKAI  
MAGAZINE  
2024  
vol.247

長所を生かした

# 「私」らしさを表現したコーデ

ミス、ミスターファイナリストのデートコーデを紹介。印象を大きく左右するファッションにおいて、自分自身の魅力を引き出すポイントをお聞きしました。

01

MS. GAKUSHUIN



肌の白さを生かしつつ、

ジャケットワンピースを取り入れた綺麗なコーデ

02

MS. GAKUSHUIN



綺麗な鎖骨を活かして、

首元の開いた服をチョイス

取材：文／佐藤暎、菅原美里、鈴木ひかり、藤原優花、  
横山大貴、小崎有彩、高柳信之介、福田さくら  
撮影／宮本レナ、季欣如、窪田一陽、松原正樹  
取材協力／広告学研究会、大学祭実行委員会、  
学習院女子大学 大学祭実行委員会

TANAKA NAO



## 田中 菜緒さん

法学部法学科3年

- ①肌が白いところです。
- ②ジャケットワンピースで少し綺麗なコーデにしたところですが髪が長いので、少し太ぶりな、存在感のあるピアスをつけてみました
- ③コスメでコレデのファンデーションと、イブサンローランのリップを最近愛用しています！

ITO MISAKI



## 伊藤 美咲さん

経済学部経営学科4年

- ①鎖骨が出ているところ
- ②鎖骨が綺麗と言っていたことが多いため、トップスの首元が開いていて、鎖骨が見える点がポイントです。また、自分ウケ抜群なガーリーなコーデである点もポイントです。
- ③milk touchのマスカラ(ブラウン)

Q

- ①長所だと感じる点
- ②ファッションのポイント
- ③おすすめ愛用コスメは？

05

MS. GAKUSHUIN

肩開きのデザインがポイント  
ウエストのリボンでさらにスタイルUP!



ITO YURIKA

伊藤 百合香さん

理学部生命科学科 3年

- ①地道に努力し、最後まで頑張り抜くことです!
- ②肩が少し開いてるデザインがポイントのシャツワンピースです!ウエストのリボンによってスタイルアップでき、真っ白で夏らしいデザインです。
- ③DIOR アディクトリップ グロウ

04

MS. GAKUSHUIN

明るい性格と髪色に合わせてコーデも明るく!  
肌見せをすることで夏らしさと明るさをプラス



KIMURACHIKYO

木村 千代さん

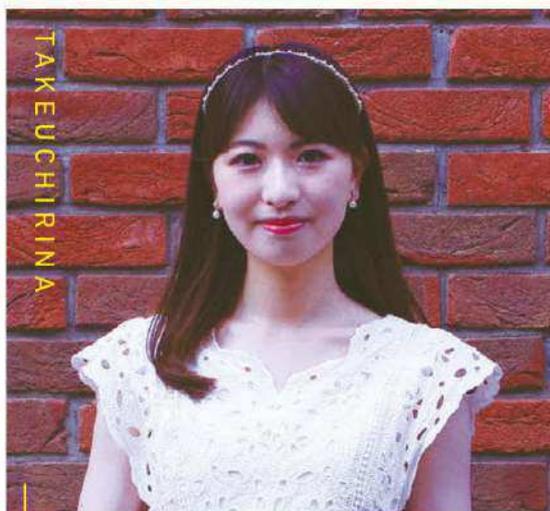
法学部政治学科 3年

- ①髪色と性格の明るさです!人に覚えてもらいやすいです。
- ②身長やスタイルが平均的なので、アクセサリなどのアイテムで個性を出すようにしています。また、黒が好きで、服が暗くなりがちなのですが、夏らしさを演出するために適度な肌見せも心掛けました!
- ③ロムアンドの4色アイパレットです。顔の統一感を出すために、チークとして代用したりもします。

03

MS. GAKUSHUIN

好きな色である白をチョイス!  
コットン素材で夏らしく涼しげなイメージ



TAKEUCHIRINA

竹内 里奈さん

文学部フランス語圏文化学科 2年

- ①挑戦することを恐れないこと
- ②私は白が好きなので、白いワンピースを着用しました!夏らしく涼しげなコットンで出来ているものを選んでいきます。靴はシアー素材のミュールで、バンド部分にビジュアが散りばめられているところがお気に入りです。
- ③SK2 アトモスフィア CC クリーム/ディオール アディクトリップ グロウ 012 ローズウッド

MR. GAKUSHUIN 01



お気に入りのスニーカーがワンポイント

ダボっと古着コーデ

ARAI TOMOKI



荒井 智貴さん  
文学部英語英米文化学科 4年

- ①とてもポジティブです。
- ②靴はお気に入りのNIKEのジョーダン1です。狙ってるスニーカーが出たらいつも抽選に参加してます！まだ当たったことないですが笑古着屋さんによく行くので、こちらも上下古着屋さんで揃えたものです！
- ③今回のカーゴパンツのような少しダボっとしたファッションが好きです！
- ④@mr\_gu23no1

MR. GAKUSHUIN 02



色白を際立たせるブラックコーデ×

スラックと足長タックインコーデ

WAKABAYASHI TATSUKI



若林 龍貴さん  
経済学部経済学科 4年

- ①身長割には足が長い肌が白め
- ②この時着てる服も全身黒で、自分の肌がより白く見えるのと黒には銀のアクセサリが合うのと自分自身が金より銀が合うのでネックレスもピアスも銀にしています。あとスニーカーが好きなので全体的に細く見えるように上のノースリーブもタックインしています。
- ③ピアスと腕時計 あとこの日はしてないけど指輪です。ピアスはシンプルなのが好きだけど指輪は多少儼つものが好きです
- ④@mr\_gu23no2

Q

- ①長所だと感じる点
- ②ファッションのポイント
- ③好きなファッションアイテムは？
- ④Instagramアカウント

05

MR.GAKUSHUIN

統一感ある印象に

シルバーアクセサリーで



04

MR.GAKUSHUIN

小物をアクセントとした3色コーデ

フットワーク軽やかに



03

MR.GAKUSHUIN

脚のラインが映えるデニムで涼しげに

軽やかなトップスと



YOSHIOKA ISSEI



## 吉岡 壱晟さん

法学部法学科 3年

- ① スラッとしてるところ
- ② ネックレス、ブレスレット、ピアスをシルバーで統一したところ
- ③ ネックレス、ピアス
- ④ @mr\_gu23no5



## 山下 昂希さん

文学部ドイツ語圏文化学科 2年

- ① 足と手の可動域が割と広い
- ② なるべくシンプルに3色に収める。リーズナブルな服でもちょっとお高めの小物で相殺。
- ③ 6.8cm 盛れる靴
- ④ @mr\_gu23no4



## 山岡 道成さん

法学部法学科 2年

- ① 股下の長さや細さ
- ② 撮影が暑い日だったのでThe 夏!なコーデ。タンクトップにシャツを羽織って涼しく軽い雰囲気を出し、体のラインに沿ったデニムを合わせ、ピーサンはメンノンの成田凌さんのスタイルを取り入れました。
- ③ アクセサリー類(ネックレス、バングル、リング、イヤークフ)
- ④ @mr\_gu23no3

MS. GAKUSHUIN  
Woman's College

03



シンプルなものにも個性が光る。  
アクセサリーからデザイン性とオトナ感も顔を出す。

MS. GAKUSHUIN  
Woman's College

02



白シャツやお団子ヘアで夏を表現。  
オトナっぽさの中にもスポーティーな雰囲気

MS. GAKUSHUIN  
Woman's College

01



やわらかく、それでいて大人な雰囲気  
で魅力アップ。  
靴とバッグで可愛さもアピール。



KAWAZU SAKI

### 川津佐葵さん

国際文化交流学部  
国際コミュニケーション学科 3年

- ①協調性があるところ。ミスコンでもチームワークを大切にしたいです。
- ②大学生らしく上品で大人っぽさのあるコーディネートを組みました。シンプルで綺麗な洋服が好きなので、シンプルになりすぎないように小物を使用したり、デザイン性のあるものを選ぶようにしています。
- ③Ackaの北風明日香さん



KITANI KOKO

### 木谷心さん

国際文化交流学部  
国際コミュニケーション学科 2年

- ①計画性があり、負けず嫌いなところです！
- ②私の今回のコーデは、スポーティーな感じです！白Tシャツと高めのお団子ヘアで夏らしさ、タイトのスカートで大人っぽくしてみました。全体的に白と黒で統一して、ビックリ感のあるコーデです！
- ③Hailey Bieber



SAKATA NOA

### 坂田野愛さん

国際文化交流学部英語  
コミュニケーション学科 4年

- ①物腰がやわらかく誰とでもすぐに仲良くなれるところ
- ②Her lip toのワンピースは一枚で上品にみせてくれるのでお気に入りです。(ミスコンの面接でも同じワンピースを着ました)靴とバッグも大人可愛い印象をあたえてくれます。
- ③モデルの古畑夏夏さん

06

MS. GAKUSHUIN  
Woman's College



チャームポイントの笑顔で季節を飾る。  
身に纏うは夏とお気に入りのワンピース。



MASUDA MOMOKA

### 増田 百花さん

国際文化交流学部  
国際コミュニケーション学科3年

- ①常に笑顔と心がけているところです!
- ②夏といえばデニム!というイメージがあるので、夏らしい色使いでデニムに白を合わせて季節感を出しました。お気に入りのデニムワンピースは、一部分がプリーツスカートになっていてヒラヒラするのが可愛いです♪
- ③姉です!

05

MS. GAKUSHUIN  
Woman's College



笑顔と清潔感がチャームポイント。  
夏の暑さに負けない明るさ、自由と、爽やかさ。



FUKUYAMA RIO

### 福山 莉央さん

国際文化交流学部 日本文化学科1年

- ①明るいところです!人とお話しすることが大好きです!
- ②夏の暑さに負けない、爽やかさを表現しました! 清楚なファッションが好きなので、自分らしさが出ていると思います! 全体は白で統一し、ネイルとワンピースの柄を水色で揃えたり、細かい部分にもこだわりました。
- ③特にいません!
- ④自分が着たい!と思った服を着るようにしています。

04

MS. GAKUSHUIN  
Woman's College



まさに歴史ある学習院女子生。  
明るい服で気持ちも飾る、昭和の女子大生を思わせる。



MATSUYAMA YUI

### 松山 結生さん

日本文化学科4年

- ①色々な人と積極的にコミュニケーションを取るのが好きな所
- ②明るい色の服を着ると気持ちも明るくなる気がして好きです。他にもリボンやフリルというお気に入り要素を詰め込んで、昭和の正統派女子大生をイメージしたコーディネートを組みました♪
- ③幅広い系統の服を着ることで特定の人を見るわけではなく、その日の主役になりたいアイテムをInstagramで検索して参考にしています。



初山悠太（もみやま・ゆうた）／『少年ジャンプ+（プラス）』副編集長  
1983年生まれ。2005年に学習院大学法学部政治学科を卒業後、集英社に入社。週刊少年ジャンプ編集部、デジタル事業部を経て2014年に漫画雑誌アプリ『少年ジャンプ+』の立ち上げに参画。2019年より同誌の副編集長を務める。漫画編集と並行し、『ジャンプルーキー!』『MANGA Plus by SHUEISHA』『コミコパ』などのデジタルサービス立ち上げに携わる。

実は元々漫画編集者志望ではなくて、新聞記者やNHKの報道の仕事で第一志望にして就職活動をしていました。社会的な内容の雑誌もあるので出版社もいくつか受けました。集英社は大手の出版社の一つということで受けました。

——大学時代に経験されたことが今に活かされていることはありますか。

野中ゼミを取っていなかったら、マスコミ業界を受けていなかった気がします。それはゼミの先輩に通信社に入った方が居たから背中を押された、ということが大きいです。また、野中先生の紹介で朝日新聞社にも行きました。そういうところではマスコミ業界が身近でしたね。だから色々経験する中で自分の進みたい道を発見していたのは一つあります。今に活かしていることというと、何か分析して考えることは今ものすごく仕事で重要だと思っのですが、ゼミを

通してそういうものを学んだような気がします。

——集英社入社後に嬉しかったことは何でしょうか。

自分が企画したことが、多くの人に楽しんでもらっていると実感できたときです。そういう場面はたくさんありますが、一番大きいのは二〇一四年に少年ジャンプ+という漫画雑誌アプリを立ち上げたことです。もちろん僕一人ではなく色々な人と一緒に始めたんですけども。少年ジャンプ+を立ち上げたことは今までの社会人生活の中で一番力を入れたことでもあります。当初逆風の中、周囲の協力もなかなか得られず大変だったのですが、今は非常に多くの人に読んでもらえ、そこで描きたいと言ってくれる漫画家さんも増え、多くの人に楽しんでもらっていると実感することが多いので、それが一番嬉しかったことですかね。

——紙媒体とデジタル版の漫画の

——学習院大学ではどのような学生生活を送られていたのでしょうか。

熱心に授業に出席していたタイプではありませんでしたが、授業に出たり、サークル活動をしたり、塾の先生のアルバイトをしたりしていました。三年生からはゼミに入って、ゼミの活動では結構一生懸命勉強していたと思います。そんな学生でした。

——どういったゼミに入られていたのでしょうか。

政治学科の野中尚人先生のゼミで、当時は政治家研究をするゼミでした。人数は少なかったので、三年生の時は当時長野県知事だった田中康夫氏、四年生の時は小沢一郎氏の研究をしていました。

——集英社に入社された経緯を教えてください。

読者と一緒に連載を紡いでいく

それぞれの良さは何でしょうか。

紙媒体の方は掲載できる作品数に制限があります。制限されているからこそ、そこに載るために競争が働きます。だからこそ読者も信頼をもって面白い漫画だけを読むことができるという部分があります。一方デジタルの方だと、枠の制限はないですね。フィルターがかかっていたために紙媒体だったら埋もれていた作品が、デジタルではちゃんと読者に届いて、楽しんでもらうことができるようになります。あと僕がデジタルの方で好きなのは、みんなが話題にしやすいということですね。連載を通じて話題が広がり、読者と一緒に連載を紡いでいくのが週刊少年ジャンプや少年ジャンプ+なんです。少年ジャンプ+だと0時に更新されるとみんな0時に読みに来てそれがコメント欄やSNSで話題になる。その読んだ興奮、読んだ感想をたくさん

日本中、世界中の人と共有できる。それもデジタル版の漫画連載の面白い体験だと思います。

——海外向けの漫画雑誌アプリ、MANGA Pius by SHUEISHAを始めたくっかけを教えてください。

リアルタイムで連載を多くの読者に追ってもらい、読者の反応を得ながら連載の内容をチューニングしていく。それが漫画を生み出すときに非常に重要で、さらに読者にも楽しんでもらえる、とてもいい部分だと思っています。ですが、最新話に関して、多くの国で正規で読める手段が無かったんですね。海賊版でしか読めない国が非常に多い状態でした。でも、海賊版の状況を調べると世界中の人が最新話をとっても楽しみにして読んでいます。インターネットの時代だと、翻訳さえすれば手軽に最新話を世界中の読者に届けることができますよね。なので、日本で

も少年ジャンプ+が始まって、順調に成長して新しい漫画が生まれていたので、次はそれを海外も対象にやりたいなと思ったことがきっかけです。

——紙媒体の週刊少年ジャンプへのライバル意識のようなものはありますか。

週刊少年ジャンプはいつも意識しています。どちらかというとジャンプとして紙でもデジタルでもナンバーワンであり続けたいという気持ちがあります。少年ジャンプ+をどうしていくべきかを考えるとき、頭の中には常に週刊少年ジャンプがあります。週刊少年ジャンプがなんでこんなに面白いのか、数十年間ずっとトップを走り続けてきているのかを分析して、それを僕はいつも少年ジャンプ+に反映しているつもりです。多少のライバル意識はありますが、ジャンプ全体として盛り上げていきたいという気持ちが強いんです。

——今後の展望を教えてください。

僕が最近思うのは、いかに自分

のやったことが社会に貢献できているか。例えば読者が、僕がいなかったら生まれていなかったかもしれない作品を読んで、その人が人生の中で少しでも感動したり興奮したり面白い時間を過ごしてくれれば、それはとても価値があると思います。また、才能があるけれどもまだ世には出ていない作家さんが、僕がやってきたことがあったからこそ、その才能が開いて面白い漫画が世に生まれるとしたら、その作家さんに対して僕がやってきたことの意義があったと思えます。何かしら漫画を通じて世の中に貢献できることをやっていきたいです。

——学生に向けてメッセージをお願いいたします。

学生時代、色々なチャレンジをしておくことが将来活きると思います。積極的にどんなことにもチャレンジして、楽しい充実した学生生活、その後の人生を過ごしてもらいたいです。

紙でもデジタルでもナンバーワンであり続けたい



海老原優香（えびはら・ゆか）／アナウンサー

1994年、東京都出身。2017年に学習院大学文学部英語英米文化学科を卒業後、フジテレビに入社。『とくダネ!』のMCアシスタント、『プライムニュースイブニング』のキャスター等を務め、現在『FNN Live News α』のスポーツキャスター、同番組の全曜の報道メインキャスター等を担当。趣味は旅行、ヨガ、ゴルフ。全米ヨガアライアンスRYT200・RYT500等の資格を持つ。

### 「言葉のプロ」として生きる

「学び」と「習う」なんです。私は学習院の大学祭実行委員会と慶應のインカレサークルの模擬国連の二つを掛け持ちしていました。ここで多くのことを「学び」、「習う」ことで自分の引き出しを増やすことが出来ました。

——海老原さんは文学部英語英米文化学科ご出身ですが、アナウンサーになってからそこの学びが役に立った出来事がありますか。

主語述語の並びが日本語と英語で違うように、地域や言語、人種などバックグラウンドが異なれば、常識や物事の捉え方が違うこともあるということ、講義で学びました。そして、その学びは本や映画を通して、深いものになったように思います。

いま、アナウンサーとしてインタビューをする際に、どんなバックグラウンドがある方なのかを考えるようにしています。これは英米学科で学んだ歴史背景について

理解を深める学びのお陰だと思っています。

——ミス学習院でグランプリを受賞されていますが、アナウンサーを目指す際にそこの経験はどのように活きましたか。

言葉を大事にするアナウンサーという職業への憧れがある一方、全然人前に立つようなタイプではないため、私なんておこがましい、という気持ちが強かったのですが、「ミス学習院」という経験に背中を押されてこうしてアナウンサーになれたのではないかと思います。ミスコンに出始めたときに、周りに「アナウンサーになるんですよ?」と言ってもらえたことで、アナウンサーは他の職業と変わらない、就活で内定をもらってなる職業の一つなんだと気づかされました。

そして「テレビで海老ちゃんを見たい」や「映っていたらすごく元気になるのに」と声をかけてく

——学習院でどのような学生生活を送られていましたか。

お昼休みには大学の中庭で友達とランチを食べたり、バイト先の

友達と海外ボランティアに行ったりしたのは良い思い出です。

ただ、自分にとっての学習院での四年間を表す言葉は、文字通り

## 学びの姿勢と先を見据える眼差し

れる方々が幸いにもいてくださり、応援してくれる人に勇気もらった事は、今でも感謝しています。

——アナウンサーになった理由がミス学習院になったこととお伺いしたのですが、それ以前になりました職業はありましたか。

もともと「言葉で人を感動させる仕事をしたい」という思いがあり広告代理店への就職を考えていました。言葉を大切にするというのが、根本的な部分は同じなのですが、アナウンサーは直接自分の言葉で物事を伝えることが出来る。それは誰かの役に立つ仕事だと思うようになりました。アナウンサーを志望しました。

——就活の時など、アナウンサーになるまでに一番大変だったことはなんですか。

嫌な感じで受け取ってほしくないのですが、苦勞したという感じはなくて、むしろ、入りたい会社の方が自分に興味を持って話を

聞いてくれる。そんな機会はなかなか得られないと思うようになったら、就活が楽しくなりました。

元々報道にとっても興味があったんです。アナウンサーになって自分の言葉で今起きていることを伝えた際に、海老原が伝えているから「聞いてみよう」とか「興味を持った」と思ってくれる方がいたら、それは自分の人生で大きな「やりがい」や「嬉しさ」になると、就活時にも思っていました。

——社会人になった今、特に重きを置いていることはなんですか。

今、Live News aという報道番組のMCを勤めていて、この番組はニュースを伝えた後にコメントーターの方と掛け合いをして、その後に自分の意見を述べる時間があるんです。そのための勉強として、ノートを作ってその日のニュースを書き出すようにしています。

ある出来事に対して、色々な見

方や考え方があるので、それを自分の中にインプットし整理してから、私なりの考えを表す際には、視聴者の方に寄り添うようなコメントが出来ればと思います。それが今の私が一番大切にしている事です。

——今後、達成したい目標はありますか。

今プロ野球ニュースやスポーツコーナーを担当しているので、パリオリンピックの現地取材に行けたら良いと思っています。

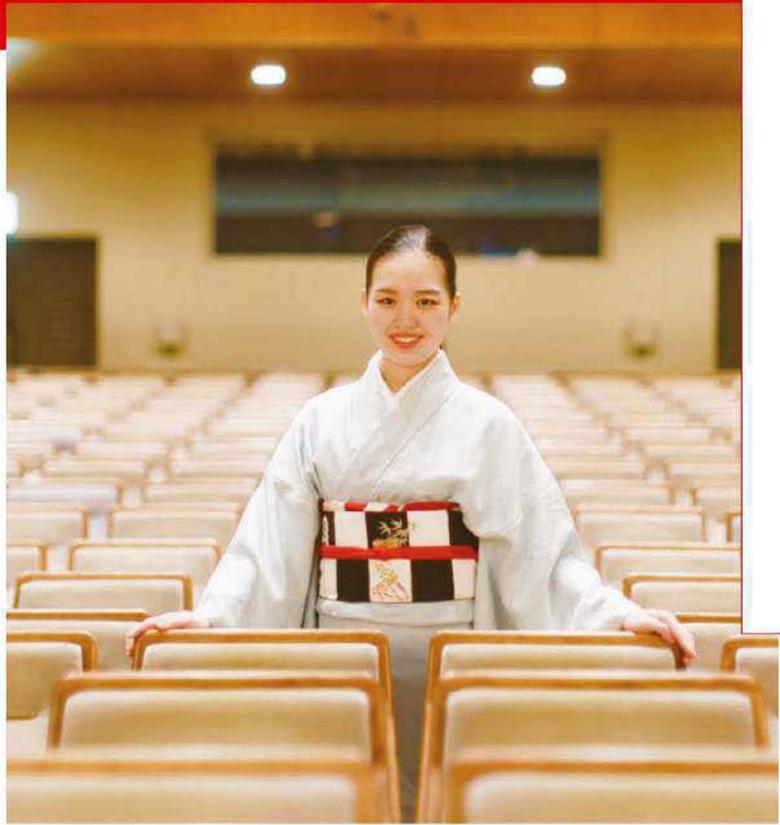
また、Live News aのメインキャスターはいつか担当できたらいいなと思っていた仕事でした。今その思いが叶った訳ですが、自分なりに誰よりも視聴者に近いキャスターになれたらと思っています。

——最後に学生に向けてメッセージをお願いします。

コロナ禍は、人との繋がりを作りにくい環境でしたが、ようやく動きやすい環境に変わってきたと思います。今まで出来なかったこ



とや我慢していたことがあれば、すぐにでも是非動き出してほしいです。学習院で大学時代にしかできないことがたくさんあると思うので、悔いのない時間を過ごしてほしいです。大学生の貴重な時間を少しでもやりたいと思ったことを突き詰めてみたり、チャレンジしたりしてほしいと思います。



有馬和歌子（ありま・わかこ）／日本舞踊家  
1998年、東京都出身。学習院初等科、学習院女子中・高等科を経て、2021年に学習院大学文学部哲学科を卒業。日本舞踊家の坂東寛二郎を父に持ち、18歳で坂東流師範資格を取得。19歳より『子供舞踊塾』代表を引き継ぎ、舞台プログラムを企画。「人から喜ばれる伝統」をコンセプトに、日本舞踊の魅力を発信する。舞台演出、メディア取材、講演、解説の出演、教育事業、海外研修事業など幅広い仕事に携わる。

——学習院大学での思い出を教えてくださいいただけますか。

学業と仕事の両立を頑張りました。一年生の春、月曜限の講義を受けるために抽選があったのですが、前日の日曜日の夜に、奈良の東大寺でコンサートに出演していました。日付が変わった頃、ホテルに戻り、仮眠を取って、始発

の奈良線と新幹線でそのまま目白に急いで、抽選に向かった思い出があります。

——学業とお仕事の両立で濃密な時間を過ごされたと思いますが、そのなかで印象的な講義はありましたか。

私は、文学部哲学科の美術史専攻で、美術史に関する演習があり

ました。その演習で、古典的な絵を見て、徹底的に言語化するデスクリプションが面白かったです。当たり前のことですが、絵にはたくさんの面白いものが詰まっています。それを言葉にして、他者に伝えることは、絵を楽しむ新しい発見でした。また、三年生では経営学特殊講義を受講しました。大学は将来に直結する学びをたくさん吸収する場所だと思っていたので、学部の枠にとられずに、自分が習得したら人生が楽しくなるだろうなというものを学んでみました。

——ここから、現在の活動である日本舞踊についてお聞きしたいと思います。幼いころから日本舞踊に親しまれてきた有馬さんから見ると、日本舞踊の魅力とは何でしょうか。

長く日本舞踊と向き合ってきたなかで、同じ舞台は二度とありません。仮に同じ演目の作品であ

ったとしても、その劇場、お客様、自分の表現方法によって、全く作品が変わります。その世界に一つだけの舞台に向かって、練習を重ね、その成果を発揮することが、自分にとっての一番の魅力です。また、お客様も生の舞台をご覧になって、拍手をするタイミングが合うなど、共鳴し合うような雰囲気も日本舞踊の良い所だと感じています。日本舞踊は突き詰めると、人間が客観的に見て美しいと思える動きや、しぐさが踊りになっていきます。自分の腕の長さや体形に合った比率の動きを研究することも楽しみの一つで、お客様が美しいと思ってくれたら嬉し

——日本舞踊を志したきっかけは何でしょうか。

私の初舞台が二歳の頃だったので、自分がやりたいと思う以前から、日本舞踊に触れていました。また、父が日本舞踊家の仕事を

**お客様と共に作り上げる一度きりの舞台**

## 伝統の枠を超えた日本舞踊を考える

していたため、生まれたときから国立劇場の楽屋やその舞台裏を見ていました。一つの舞台をつくるために多くの方々が携わっており、パワーのある現場だと実感しました。これらの経験から、自分が舞台に出る側に憧れたことがきっかけです。学生になると「日本舞踊」で色々な人の役に立つにはどうしたらよいかと課題を感じるようになりました。憧れから課題を見つけ、学生時代からはその課題の解決に向けて行動に移しています。

父が子供舞踊塾を創設して、企画舞台で二十人程の舞台を行った後、しばらく少人数制のお稽古が続いていました。稽古場に小さい靴がたくさん並んでいる稽古風景を復活させたいと思っていて、子供たちのために役に立てるなら、子供舞踊塾の新しい企画を立ち上げたいと思い、大学二年生で子供舞踊塾の代表を引き継がせてもらいました。まだ結果も出ていない先のことに對して、上手くできるかの不安は少なからずありましたが、目標を達成したいという強い想いを、結果が出るまで持ち続けようと思っていました。そう思っているれば、ある程度は現実的に考えることができ、不安に駆られていない場合ではないという気持ちになります。そのような強い気持ちで向き合っていました。

父が子供舞踊塾の他にも、舞台のプロデュースもされていましたが、魅せ方や内面的なこと意識され

たことはありましたか。

依頼をいただいて、日本の伝統を発信するときが一番重要なのは、いかに私たち伝統継承者が頭を柔らかくできるかどうかだと考えています。つまり、伝統の枠として捉えられる範囲が人それぞれだということなんです。私がより良い舞台をつくるために気を付けていることは二つあります。まず、相手が好きんでいるかということ。それから、伝統芸能として美しいかどうかを判断することです。伝統芸能という基準を設けてアドバイスするのも我々専門家の仕事のひとつだと考えています。ただ、この基準があまりにも伝統に縛られてしまうと、舞台の可能性の幅が狭まってしまう、相手に喜んでもらえることとは違う方向に向かう可能性があります。そのため、相手や時代が求める形が何かということ、それがこれまで受け継がれてきた伝統として納得がいくものなのかということが、一致するところま

で持っていく作業が大切だと感じています。伝統芸能は過去の価値の積み重ねや振り返るものではなく、今の私たちと向き合うためのアート体験だと思っています。

最後に学生に向けたメッセージを一言お願いします。

自分のための時間を心から楽しんでほしいと思っています。社会人になると、日々細かく目標を設定して、そのことに一生懸命になりがちだと感じています。私にとって、本を少し手に取ってみたい、窓の外の自然に目を向けてみたいと自分をリフレッシュしたりできる時間が大学時代の自分の大切な時間だったかもしれせん。自分のための時間を上手に使い、自分なりの良い時間にできると、社会人になってからも生きてくるのではないかと思います。



日常

一度壊されてしまえば

決して取り戻せないもの

推し

当たり前が揺らぐ中で

そこに変わらずあったもの

諸行無常の世の中で  
私たちを支えてくれた推し  
変わらない永遠がなくても  
揺るがない好きがここにあるから

好きに貪欲になって  
日々アップデートして  
大好きな自分でいよう

日本の魅力を再発見in東京

## 47都道府県

# あなたの推し地域はどこ？

好きな場所が増えること。それは、心の居場所やしあわせのアンテナが増えるということ。

今回は、地元愛やローカル色あふれる「人」と「食」をご紹介します。

好きだと思える地域を探し、見つけるきっかけになりますように。

取材・文／村上理穂、播磨未智、横山大貴、高柳信之介、福田さくら

撮影／村上理穂、播磨未智、横山大貴、高柳信之介、福田さくら

取材協力／IBARAKI sense、株式会社沖縄県物産公社、本村製菓株式会社、株式会社北海道百科・札幌丸井三越、株式会社オオモリ・諸国ご当地プラザ、株式会社池田屋、株式会社ブランド総合研究所、株式会社joyn

長野県飯田市産業親善大使としての活動について教えてください。

主に、イベント出演をしています。最近だと、飯田駅の100周年記念イベントや、地元の中学校での講演会に参加させていただきました。

地元である飯田市の魅力はどこにあるとお考えですか？

空気のおいしさと人のあたたかさですね。人のあたたかさって、接する中で自然と感じるものなので、言葉で説明するのが難しいですが、実際に来てもらえば分かってもらえると思います。だからこそ、まずは行きたくなるきっかけを作ることが何より大切だと思っています。自分が下北沢でやっている焼肉店「SUZURO」も、そのきっかけの一つになれば嬉しいです。

南信州生まれの「すずり焼肉」を楽しめる「SUZURO」ですね。どんな想いで、このお店をオープンされたのですか？



焼肉大使として地元に貢献するためというより、自分のためという気持ちの方が大きいです。芸人になる前はずっと飲食店で働いていたので、「いつかまた飲食に関わりたいな」という想いを持っていました。そんな中、かつて同じお店で働いていた友人と偶然再会したんです。今から10年くらい前かな。彼は自分のお店をオープンしたばかりで、僕も芸人を始めたばかりで、お互いお金がなかったのですが、「いつか一緒に何かできたらいいよね」と夜な夜な話していました。その想いを10年越しに形にしたのが「SUZURO」です。自分たちが楽しみながらや

っていることが結果として、少しでも南信州のためになったら嬉しいなと思っています。

——**フライベートでもよく、焼肉をされると伺いました。焼肉へのこだわりがあれば教えてください。**

みんなで焼肉をするときはひたすら焼いています。美味しい状態で食べてもらいたいので、ちょうどいい焼き具合を見極めるために真剣です。南信州の牛肉は、脂切れが良くて本当に美味しいのですが、特に好きなのはサガリです。

脂肪燃焼効果があってヘルシーで美味しいラム、マトンも好きですね。飯田には「出前焼肉」という文化があつて、精肉店がコンロも鉄板も肉もセットで届けてくれるんです。河原や、自宅の駐車場で食べる焼肉は最高です。

——**競争が激しい芸能や飲食の世界で、活躍し続けるために意識していることはありますか？**

数字ではなく、自分の心を大切にすることです。自分は、誰よりも面白いギャグを言えるわけでも、

上手いMCができるわけでもないけれど、自分が楽しいと思えることをしていく中で、それを見た人が笑顔になつてくれたらいいなと思

っています。飯田から東京に向かう高速バスの窓から、富士山が見えるんです。あれを見るたびに「よし頑張ろう」とやる気が入りますね。自分の芸人としての武器は、「出オチの最大風力」だと思っています。この自分のストロングポイントを活かして、ブレずに、挑戦を続けていきたいと思っています。

——**最後に、学生に向けたメッセージをお願いします。**

自分と仲間を大切にしてほしいなと思います。夢中になれる何かがあれば、なりふり構わず、まっすぐ突き進んでください。もし今、「これだ!」と思えるものが、見つけられていなくても大丈夫です。僕の芸人人生も、30歳を過ぎたから、「イチロー選手に似ている」と周りに言われて始まりました。今しかできないことを全力で楽しんでください。

## ニッチロー NICCHIRO

モノマネ芸人/長野県飯田市産業親善大使  
長野県飯田市川路地区出身。メジャーリーガーのイチロー選手のモノマネを得意とし、イベント・バラエティ番組・CMなど広い分野で活躍中。イチロー選手に似せるため、体幹トレーニング、ランニング、素振りなど、日々のトレーニングに励んでいる。

日本一の焼肉の街！長野県飯田市生まれ「すずり焼肉」店

# SUZURO



「すずり型の鉄板」で「タレを育てる」

長野県飯田市で開発された「すずり型の鉄板」の、深さ3cmのくぼみに、特製の醤油だれと特製スパイスを投入。弱火でじっくりと焼いた豚肉の脂と混ざり合い、焼けば焼くほどタレが美味しく育っていきます。



おたぐり

「おたぐり」馬の腸を味噌味で煮込んだ長野県伊那谷の郷土料理。温めずにいただくのが飯田スタイル。馬モツ特有のクセも少なく、やみつきになる味わい。ネギだれとの相性も抜群です。



♫のSUZURO流まぜそば

「♫のSUZURO流まぜそば」育てたタレを麺に絡めていただく、締めピッタリの一品。お腹いっぱい焼肉を食べた後でも、つるつる食べられてしまいます。



運が良ければ！  
「プロ焼肉選手」  
ニッチローさんに  
会えるかも！？

ニッチローさん監修の焼肉店。食材は、南信州の地場産品を中心に使用。店内では南信州のプロモーションビデオを常時放映し、地域の魅力を発信しています。ニッチローさんご本人が店頭に立っている日も。

都道府県  
魅力度  
ランキング

1. 北海道
2. 京都府
3. 沖縄県
4. 東京都
5. 大阪府
6. 神奈川県
7. 福岡県
8. 奈良県
9. 長崎県
10. 石川県
11. 兵庫県
12. 長野県
13. 千葉県
14. 静岡県
15. 宮城県
16. 鹿児島県
17. 熊本県
18. 広島県
19. 青森県
20. 愛知県
21. 宮崎県
22. 三重県
23. 富山県
24. 秋田県
25. 新潟県
26. 和歌山県
27. 山梨県
28. 山形県
29. 大分県
30. 高知県
31. 岩手県
32. 香川県
33. 岡山県
34. 福島県
35. 岐阜県
36. 愛媛県
37. 福井県
38. 滋賀県
39. 島根県
40. 栃木県
41. 徳島県
42. 鳥取県
43. 山口県
44. 群馬県
45. 埼玉県
46. 茨城県
47. 佐賀県

# アンテナショップで手に入る全国の逸品!



半世紀以上愛される、  
おいしさの贈り物

**北海道**  
小樽サブレ マロンコロン アーモンド

北海道産のバターと卵を使用したサクッと食感のサブレをチョコレートでコーティング。パッケージを開けた瞬間に芳醇なバターと香ばしいアーモンドの香りが広がります。北海道どさんこプラザ 東京都千代田区有楽町 2-10-1 東京交通会館 1 階



国産素材、伝統の  
製法がこの「一枚」に

**埼玉県**  
いけだ屋 草加せんべい

創業・慶應元年、歴史ある「いけだ屋」の定番商品。日本のうるち米を代表するブランドの一つ「あきたこまち」を100%使用。醤油の豊かな香り、味、食感が楽しめます。埼玉アンテナショップ 東京都新宿区西新宿 1 丁目 13-12 西新宿昭和ビル



京都の文化に季節を  
詰め込む生ハッ橋

**京都府**  
旬菓くり詰合せ

聖護院ハッ橋総本店による栗と抹茶の二種の味を楽しめる餡入り生ハッ橋「聖」。特に栗の粒を感じられる餡を包んだ生ハッ橋はもっちりとした皮の中から季節と上品な甘さを感じました。諸国ご当地プラザ 東京都 東京都千代田区丸の内 1-9-1 東京駅一番街地下 1 階



しっとり、もっちり、  
ふんわり新食感!

**沖縄県**  
幻の味ブルース

きめ細やかながら、ずっしりとした生地は、台湾カステラとパウンドケーキの良いとこ取りをしたような贅沢な食感。バターと卵のやさしい味わいがどこかつかしい一品です。銀座わしたショップ本店 東京都千代田区有楽町 2-10-1 東京交通会館 1 階



見た目も味も抜群!  
黄金ほしも

**茨城県**  
西野さんのほしも

「紅はるか」を改良した「金上黄金」を使用した干し芋は、さっぱりとした甘みと高級感のある黄金色が特徴。全て職人さんの手作業で製造されており、添加物は一切不使用。お芋本来の味を生かした逸品です。IBARAKI sense 東京都中央区銀座 1-2-1 紺屋ビル 1F



昔ながらの  
深い味わい

**佐賀県**  
佐賀ぼうろ

代々受け継がれた製法によって作られた、素朴な味わいで見た目もシンプルな焼き菓子。ふんわりとした食感と、はちみつほどのよい甘みがクセになります。諸国ご当地プラザ東京店 東京都千代田区丸の内 1-9-1 東京駅一番街地下 1 階

〇活  
#1

# いざ、ヌン活 お嬢様の暮らし、したいわよね

アフタヌーンティーが、最近特に二十代~四十代の女性客の間で話題になっている。題して「ヌン活」。自分へのご褒美、映え、話題づくりなど目的は様々。我々編集部も、先日果たした重労働による疲れを癒やすべく、取材した次第である。



桜と抹茶のアフタヌーンティー

色とりどりのスイーツが織りなす非日常空間。めまぐるしい日常を忘れ、まるで貴族のようなひとときを体験できるアフタヌーンティーが、最近特に二十代~四十代の女性客の間で話題になっている。題して「ヌン活」。

自分へのご褒美、映え、話題づくりなど目的は様々。我々編集部も、先日果たした重労働による疲れを癒やすべく、取材した次第である。決して女子会ではない。これは「お嬢様会」なのだ。

自分へのご褒美、映え、話題づくりなど目的は様々。我々編集部も、先日果たした重労働による疲れを癒やすべく、取材した次第である。決して女子会ではない。これは「お嬢様会」なのだ。

## ★ ヌン活の心得三箇条 ★

### Ⅰ フード類は

三段目からいただくべし



### Ⅱ ソーサーは

持ち上げるべからず



### Ⅲ カップの

向こう側に置くべし



アフタヌーンティーのフードは通常、下から上へ行くほど甘くなるように並べられている。例えば

三段のケーキスタンドであったら三段目にサンドイッチ、二段目はスコーン、一段目はフルーツやデザートといった具合である。とはいえ、焼きたてのスコーンや、溶けてしまうような冷たいアイスの場合は早めに食べるのが善い。フードをいちばん美味しい状態で楽しむのが目的である。

## ★ お嬢様会、開会 ★

今回お世話になったのはANAクラウンプラザホテル成田様。アフタヌーンティーといえばホテルに併設されているカフェレストランでのもが主流だが、今回はそうではない。なんとここでは“インルーム・アフタヌーンティー”が楽しめるのだ。さらに宿泊プラン付きなので、お腹を満たした後はそのまま爆睡できるのである。成田空港からシャトルバスでホテルまでの送迎がある。この時点で総員大盛り上がり。いえ、当

然ですわ、だって私たちお嬢様ですし。平然を装ってチエックインを済ませ、十四時半のアフタヌーンティーまで待機。アフタヌーンティーはイギリス貴族の喫茶習慣が起源とされている。そんな“選ばれし者”の習慣を一大学生が堪能していいものだろうか。いや、よろしくってよ、私たちお嬢様ですものね。

## ★ いざ、ヌン活 ★

十四時半、部屋のインターフォンが鳴りドアを開けると、そこには夢がぎゅっしり詰まったスイーツの数々。ウエルカムドリンクと軽食、事前に頼んでいたフレイバーの紅茶も並び、設置してもらっている間は開いた口が塞がらなかった。お嬢様という自認はもはや消え、その場に立ち尽くす大学生四人。これが貴族の見ていた景色だというのか……。アフタヌーンティーは喫茶習慣

が基とはいえ、現代のそれは見た目だけでなく量も大満足なものが多い。しかも今回はフリードリンク（おかわり自由）。桜と抹茶をテーマにした食事を楽しみながら、優雅なひとときを過ごした。そしてお腹も心も満たした我々は、案の定爆睡。自分たちだけの特別な空間で、人目も時間も気にすることなく、思う存分お嬢様気分を堪能した。

## ★ お嬢様会、閉会 ★

季節を意識したメニュー、細部までこだわった盛り付け、そしてホテルならではの最高峰のおもてなし。そこに広がっているのは完全なる別世界。高貴なる者しか足を踏み入れることのない、お嬢様空間であった。

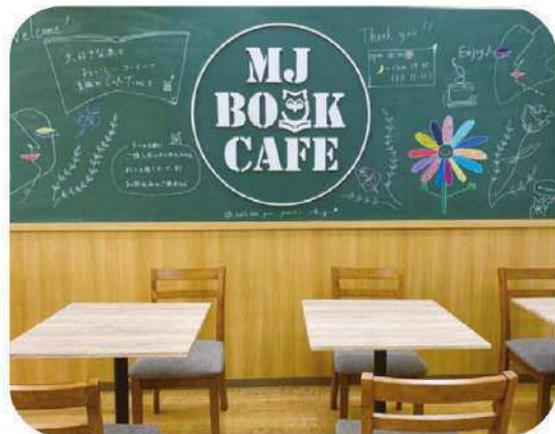


### スイーツ

- 桜のレアチーズケーキ
- 桜のタルト
- 桜のティラミス
- パンナコッタ 桜ゼリー
- 桜のテリーヌ
- 抹茶のシヨートケーキ
- 桜マドレーヌ
- 抹茶スコーン
- 抹茶マカロン
- セイボリー
- タコとわかめのサラダ（バジルソース）
- ヴィシソワーズ
- スパムサンドイッチ
- 枝豆と桜エビのキッシュ
- 新玉ねぎとカマンベールチーズのせ

# ソロ活の ススメ

毎日たくさんの方が  
行き交う学習院大学。  
その中の学生の大半は  
大勢の友人やパートナーと  
大学での時間を共有している。  
しかし、たまには  
キャンパスライフの  
貴重な1日を  
独り占めしてみるのはいかがでしょうか？



## 01 MJブックカフェ池袋店



池袋駅東口から徒歩5分、ジュンク堂書店4階のかわいらしいチョークアートが目印のMJ BOOK CAFE。陽が差し込む窓辺に木目調の柔らかな椅子と机が立ち並び、日常の喧騒を忘れさせてくれる温かな空間が広がるこのカフェには、学生から子供連れまで様々な人が訪れるという。店内の本棚の上に置かれた自由帳、MJノートには、お客様の愛書や創作詩、絵などが自由に連ねられ、カフェを通じた交流が垣間見られる。また、一人で来店されるお客さんも多いというこのカフェは、ソロ活にうってつけだ。平日には静かな落ち着いた雰囲気の中で、テスト期間に利用する学生もいるという。今回いただいたアップルポテトパイのほかにも、お客さんから好評だというモンブランやロールケーキなど多様なメニューがある。本に囲まれた空間で軽食とともに心安らぐひと時を過ごしてみてもいいだろうか。

池袋駅東口から  
徒歩5分  
ジュンク堂書店4階

営業時間  
(短縮営業除く)  
10:00 ~ 19:45



MJ\_BOOKCAFE

信州産の素材がふんだんに使われたアップルポテトパイ(620円)。クリームが滑らかさとシナモンの風味が、りんごのジュシーさを引き立てる。抹茶ラテ(580円)の香りは、このカフェで安らぎを得るための最高の選択肢の一つと言えるだろう。また、今回のようにデザートと飲み物を注文する形であるデザートセットは100円引きになるためおすすめである。



## キャンパス内おすすめスポット

このコーナーでは大学での「ソロ活」を  
 持ちこたえる事柄や場所を3つご紹介！



### 西5号館横の 広場

席数：5人掛けの  
ベンチが10個ほど。  
Wi-Fi：なし。  
用途：読書、弁当、  
居眠り。  
自然がたくさんで  
落ち着いている。

人通りが多い西5号館付近でも、雑司ヶ谷駅方面なのでほかのベンチより比較的静かに過ごすことが出来る。1席が広いので気兼ねなく占領でき、秘密基地にしている人が多いイメージ。晴れている日には、鳥のさえずりがとても綺麗で人通りも少なく一人でも落ち着いて過ごせる環境だ。ほかに過ごしていた人も読書やお昼ご飯を食べている人、昼寝をしている人、おしゃべりしている人など、1人〜少人数で過ごしている人が目立つ。この広場のベンチに使われている木材は、長野県産の栗の木を材料に制作しているそう。栗の木は、重硬で弾力に富むことから加工がしやすいこと、そして耐久性があり、優れた原料である。国産の木材を使うことで、環境にも配慮した広場といえる。



### 個人学習室

席数：1つ。  
Wi-Fi：学内 Wi-Fi が  
通じている。  
LANを挿す穴もあり、  
合計で4つのコンセント  
もある。  
用途：勉強に集中した  
いとき。



東一号館の七階にある個人学習室は、食事は不可能だが完全個室なので勉強をするのにも集中できる。机も広く教科書も広げやすい。テスト勉強やレポート執筆の際はぜひ利用したい。

雰囲気は完全個室のため落ち着く。背もたれも十分にあり、リラククスできる。しかし、周りがガラス張りになってるのでリラククスしすぎた顔を見られてしまうことだけは注意。建物も新しくガラス張りのおしゃれなスポットであるため、何日前から予約をしなければ埋まってしまう。そのため空きコマがある時などの予定を見越して予約を入れるのがおすすめだ。そこで勉強しても良いし、イヤホンをつけて動画を見てもよい。とにかく集中出来るため1人の時間を有効活用できる空間でおすすめ。

### 学生ホール

席数：約72席。  
周りとの距離が  
離れているため  
落ち着いて過ごすこ  
とが出来た。  
Wi-Fi：学内 Wi-Fi  
が通っており、  
席の最後列近くに  
充電コーナーがある。  
用途：食事、おしゃべ  
りなど様々。

「学生ホール通称「学ホ」。目白駅から学習院大学の門をくぐり、最初に見える西二号館の一階に現れるのが学生ホールだ。一日を通して学生でにぎわっているこの場所。昼食時にはお弁当を持ち込んで食べる人もみられる。空きコマ時には勉強している人、ミーティングを開催している人、寝ている人がいたりといろんな各々の過ごし方をしている自由な様子が見受けられる。学ホ内には「カフェ・ラ・スリゼ」という売店があつて、飲み物やスナックなども変えて手軽。目白駅からのアクセスも良く、だいたいのが済ませられるこの場所は学習院生なら絶対に抑えておきたい。



Good Morning!!

〇活  
#3

## 朝活のすすめ

朝活とは、その名の通り、朝の時間に活動することを指します。

読書や勉強、運動といった自己研磨に費やすもよし。

映画や喫茶でお茶をするといった趣味に費やすもよし。

「朝に行く」ことが、生活のリズムを整え、心に余裕を持たすことを可能にします。さらに、朝は集中力が高まる時間帯であり、自身のスキルアップにもうってつけです。

そのような良いこと尽くしの「朝活」を目白でやってみませんか？

ここでは、ごはん・運動・趣味の分野でおすすめの3店を紹介いたします。

さあ、充実した1日を始めましょう。

取材・文／吉村咲保、村上理穂、安達駿、宮本レン、飯塚瀬里、小崎有彩

撮影／吉村咲保、村上理穂、安達駿、宮本レン、飯塚瀬里、小崎有彩

取材協力／新宿区立おとめ山公園、伴茶夢、学習院大学



OPEN 7:30

落ち着ける非日常がある純喫茶

### 伴茶夢

珈琲伴茶夢とは、1977年創業の老舗喫茶です。JR目白駅から徒歩1分の場所にあります。店内の雰囲気は、レトロで落ち着いており、居心地の良い店内で、フレンチプレスで淹れるスペシャルティ珈琲や水出しアイスコーヒー、各種軽食や名物チーズ焼きパンカレーなどのボリュームある食事、各種デザートを楽しむことができます。

今回の取材で頂いたのは、モーニングセットです。モーニングセットは7時半から11時まで提供しており、飲み物を注文すると、無料でトーストセットを付けることができます。Aセットではトーストに茹で卵、Bセットにはトーストに餡子、Cセットはチーズトーストが提供されます。伴茶夢では新聞・雑誌を常備しており、朝食を召し上がりながら最新情報をアップデートして出勤・登校する方もいらっしゃいます。また power breakfast として、ゼミのディスカッションやサークルの打ち合わせ・商談により1日を始動させるような利用方法も可能です。学生の方には自家製ロールケーキ等の学割サービスがあり、朝からご利用出来ますので、朝食代わりのお茶会と言った使い方も出来るのではないのでしょうか。





正門  
OPEN 6:00

勉強ならば我が学び舎へ

## 学習院大学

読書や勉強によるスキルアップも朝活の醍醐味の一つ。読書や勉強のベストスポットはやはり学問の場である学習院大学。朝の学生ホール（OPEN 7:55）は人も少なく、広々とした開放的な空間で自主学習に最適。学生ホールでは学生が自由に会話できるため、仲間と一緒に朝活を楽しめます。一人静かな場所で読書や勉強に集中したいなら大学図書館（OPEN 8:50）がおすすめ。2023年4月にオープンした東1号館の大学図書館は、専門書から文庫本、雑誌まで多様な本が揃っていて読書好きにはたまりません。図書館内に設置された自習スペースや広大な自習室では、綺麗でオープンな空間で快適に勉強ができます。勉強の息抜きに1階のタリーズコーヒー（OPEN 8:30）で、窓の外の緑を眺めながらゆったりとコーヒーブレイクするのも良いかも。



OPEN 7:00

運動不足を解消する都会のオアシス

## 新宿区立おとめ山公園

目白駅から10分ほど歩くと、そこには緑の広がる公園があります。公園の真ん中を流れる小川には鯉が泳いでおり、周りは鮮麗な草花に囲まれています。それらを優雅に楽しめる散歩道が3つほどありますが、それだけではありません。ジョギングやウォーキングに専念したい方向けに舗装された道も用意されています。緑豊かなため、アスファルトに覆われた道と違って涼しさを感じられ、夏でも無理せず運動できましょう。また、おとめ山公園は坂の上に存在しており、頂上には運動器具が設置されており、他にも滑り台などの遊具も設置されており、小さなお子さんを持つご家族でも楽しむことができます。もし、夏の暑さから逃れたい方がおりましたら、是非足を運んでみてください。涼しさを味わえる「オアシス」がそこには存在します。



# 涙であなともリフレッシュ!

巷で話題の「涙活」を知っていますか？

泣いた後にすっきりしたり、気持ちが落ち着いたりしたという  
経験がある人もいます。

泣くことで心と体の健康を図る「涙活」をあなたも体験してみませんか？

## 涙活とは？

能動的に涙を流すことによって心のデトックスを図る活動のこと。泣くことで脳をリラックスさせ、ストレスを解消することができます。悲しいときや感動したときに出る涙には、心の混乱や怒りを鎮める効果があるそうです。しかし、成長するにつれ泣く機会が減ってしまったり、泣けなくなってしまったり、泣くこと自体が恥ずかしく感じる人もいます。あなたが感動し、涙を流しやすい「泣けるツボ」を探して、あなたも涙活で心と体をスッキリさせてみませんか？



## 涙活のやり方

まず涙活を始めるにあたって、あなたの泣けるツボを探してみてください。涙活は、能動的に感動して涙を流すことで体験できます。好きな食べ物や趣味が人によって違うように、泣けるポイントも人それぞれです。それには自身の経験や憧れなどが関係しており、自分が今までどんな映画や本などの作品を見て感動したのかも参考になります。部活やスポーツで高い目標に挑み続けるお話や、病気で恋人やペットを亡くしてしまうお話など、思い当たる作品がある人もいないのでしょうか？



## 涙活体験談

月に一度涙ソムリエの方によって開催されているオンライン涙活に参加させていただきました。涙活のレクチャーの後、ファゴットというヨーロッパの木管楽器でコブクロの『蕾』を拝聴し、優しい音色に自然と惹き込まれました。演奏者の方の感情が乗って耳にまで届いてくるようで、原曲の良さにより一層磨きがかかっていたように思えます。

六月にある父の日にちなんで、読み聞かせや動画はどれも「お父さん」にスポットをあてたお話で構成されていました。お話の中に伺える父親の愛情深さに一家の大黒柱としていつも支えてくれていた自身の父親の姿を重ねてしまい、ついつい涙が零れてしまいました。他の参加者の方が体験を通して感じたことをお話くださる様子からも、一人ひとりの心に確かに響いたものがあつたことがわかり「涙活」の持つパワーを感じます。なにかとストレスに晒されることの多い現代人の新たなリフレッシュの方法として、生活に取り入れていきたいと思いました。

## 部活系



『ちはやふる』 末次由紀  
(講談社)

主人公・綾瀬千早と幼馴染みの新、太一が競技かるたを通して成長していく3人の物語。クイーンを目指す千早は、競技かるた部でも団体戦優勝を目指し、日々貪欲に成長していきます。部活や勉強、何かに全力で取り組んだことのある人は刺さること間違いなしです。

3年間、そして人生全部を懸ける競技かるたの青春がアツすぎる！

## ファンタジー系



『ツナグ』 辻村深月  
(新潮文庫刊)

死んだ人間と現世の人間を会わせることのできる使者の見習いをしている主人公の歩美。戻らない時間と後悔、ひとときの逢瀬、再会と別れに涙なしには見られない一冊です！ 依頼者1人ひとりで章が分かれているので、サクッと読めて感動できる読みやすい作品です。

人生で一度だけ、死んでしまった人に出会えるのなら。あなたは、誰に会いたいですか？

## おすすめ！ 泣ける作品

ここでは編集部の涙活おすすめ作品を紹介します！  
様々な分野の泣ける作品で、あなたの泣けるツボが見つかったらかも……！？

## 家族系



『そして、バトンは渡された』 瀬尾まいこ  
(文藝春秋)

主人公の森宮優子は実母を生まれてすぐに亡くしてから、4度も苗字が変わり、父親が3人、母親が2人いる。それでも彼女はいつも幸せであった。家族とは何なのか、愛することの大切さを考えられる、家族の絆の物語です。

私たちが過ごしている何気ない一日が、家族の存在に支えられている特別な一日だと教えてくれる、愛に溢れた一冊です。

## 恋愛系



『君の臍臓をたべたい』 住野よる  
(双葉社)

主人公はとあるクラスメイトが臍臓の病気を患っており、その余命が残り少ないことを知ってしまう。そこから始まる2人の関係と、その衝撃の結末に、思わず涙が溢れます。生きることの尊さ、その奇跡を感じられる素敵な作品です。

あなたの大切な人に今すぐ会いたくなる、涙なしには読みきれないイチオシ恋愛小説！

／こんなカフェ知ってた??／

# 変わり種カフェ 特集

カフェ——それは、憩いの場。最近では、猫カフェやボードゲームカフェなど、一味違った体験をできるカフェが多く存在します。そこで今回は、選りすぐりの个性的なカフェたちを取材しました。私達と一緒に、あなたのお気に入りのカフェを見つけましょう！

取材・文／李欣如、木村友香、高橋由唯璃、田中亚実、播磨未智、今野有季乃、中村綾萌 撮影／李欣如  
取材協力／mipig cafe原宿店、探偵カフェプロGRESS、推し活専門店オシアド

## cafe 01 子ブタカフェ

Mipigさんでは「With pig」を掲げ、ブタさんと人が幸せに共生できる未来の実現に向けて事業を展開しています。飼育放棄等の社会課題解決も視野に入れ、より良いサービスを提供することでブタさんを通して人々に豊かな暮らしをもたらしたいという想いを胸にカフェを営業中。

海外のお客様も多く、非言語でブタさんやカフェの魅力を伝えられるよう、「三匹の子ブタ」など各店舗の内装は一つひとつコンセプトをもって設計していることも大きな特徴です。

国内にファームは3拠点！子ブタの保育園的な場所として人慣れや各トレーニングを行ない、実際にペットとして飼育を始めようと考えている人へのサブスクリプションもあり、飼い始めてからのアフターサポートも充実！人とブタさんをつなぎ、双方に幸せを提供する架け橋のような場所として注目されています！！



マイクロブタさんとは、イギリス生まれの大きさが40kg以内のブタさんの総称です。大きさを基にした名称のため、マイクロブタさんは特定の品種に指した名称ではありません。Mipigさんでは、その中でも、成長後20kg前後になるマイクロブタさんと触れ合うことができます。取材させていただいた原宿店では、白色、黒色、フチ、ウリ柄など様々な色柄のマイクロブタさんを見ることができました。

マイクロブタさんは、とても人懐っこいため人の膝の上でリラックスした可愛い姿を見せてくれます！ブタさんは集団で生活するため、ひとりぼっちを嫌がります。仲良さそうなマイクロブタさんたちはとても可愛らしかったです！また、トイレや簡単な芸を覚えることができるくらい賢くもあります。一方で、ご飯を食べることが最上欲求であるため、人が管理しないと食べすぎてしまう一面もあります。

## cafe 02 探偵カフェ

「探偵のいるカフェ」でお馴染み、探偵カフェ・プログレス。創業10年目を迎える、総合探偵社「プログレス」が直営・プロデュースするこのお店は、なんと従業員が全員本物の探偵なんです。「探偵」と聞けば、ちょっと怪しくて身近ではないイメージですが、このマスターをはじめとする店員の皆さんはとってフレンドリー。「実際の探偵と話したくても探偵事務所に行きづらい」、「怪しいところには依頼を頼みづらい」といったようなお客様のお応えして、行きやすい＆話しやすいを叶えたのがこのお店です。店内は事件現場のような装飾やナイトスコープ、小型無線機、手錠といった探偵道具で溢れていて、ワクワクが止まりません。

マスターによると、人探しや浮気調査といった一生かかった問題にも関わらず、警察も弁護士も相手にしてくれないために探偵しか頼る術がないという人たちの力になれることがやりがいを感じるそうです。

「お仕事は？って聞かれた時探偵って言ったら面白いから！」という理由で30歳の時に探偵を志したマスターのお話を聞きながら、束の間の非日常を楽しんでみてはいかがでしょうか。



←このカフェには変わったメニューがいっぱい。中でも大人気なのは画像の2点、ワニのタンの炙りとサボテンのナムル。どちらも聞き馴染みのない珍しい食材ですが、これが絶品なんです。探偵に興味が無い方にも楽しんで貰えるように、といったマスターの粋な計らいから生まれたメニュー、ぜひ試してみてくださいいかが？



←お次はこちら。探偵カフェの目玉メニュー、「キャラクターイメージカクテル」です。自分の好きなキャラクターや人物の基本的な情報と特徴、好きなどころを伝えるとイメージカクテルを作ってもらえるこのメニューは、アニメファンからアイドルのファンまで、色々なジャンルのオタクに人気。使用するガラスからお酒の種類や色、さらにはそれを彩るマドラーやチャームまで存分にこだわって作って頂けます。カクテルに込められた意味は別紙で用意され、持ち帰ることができます。

## cafe 03 推し活カフェ

推し活専門店「オシアド」。そのメインメニュー・“推しドリンク”をご紹介します。

まずなんととっても特徴的なのはその二色のカラーリングです。上層は8色、下層はなんと16色から選ぶことができます。確実にあなたの推しの色、“推し色”を表現することができるでしょう。簡単には混ざらないよう考え尽くされているため長時間撮影していても色が変わってしまうことはありません。さらに、このドリンクは上の層がソーダで下の層がハーブティーになっており、推し色だけでなく推しをイメージした香りまで表現できます。

この奇抜な色合いから味の想像がつかないと感じる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。推しとの撮影後、ドリンク全体を混ぜて飲んでみると、爽やかな甘みと炭酸の刺激がちょうどよく、あっという間に飲み干してしまいました。

カップには「推しです。」という文字が堂々と印字されており、まさに推しを推すためのドリンクとなっております。

全体的に明るい色で統一された店内はどこでも撮影しても推しが映えること間違いなし。撮影専用のスペースにはテーブルライトやスポットライトがあり、あなたの推しをより一層輝かせてくれます。夜18時からハーフとして営業しており、ドリンクはカクテルに変わります。もちろんカクテルも推し色にカスタマイズでき、ノンアルコールに変更することも可能です。昼とは一味違う推し活、いかがでしょうか。



↑ドリンクを作るにあたって必要となるのが、オーダーシートの記入です。これはドリンクのレシピとなる他、推しについて簡潔にまとめて書き出す作業を通して、推しと真正面から向き合う時間をくれます。ドリンク以上に、このカフェで過ごす意味であるかもしれません。推しカラーのペンを選んで、推しの簡単な紹介文、6つの項目に分かれた推しの性格グラフ、ドリンクにしたいカラーを記入します。完成した愛たっぷりのオーダーシートは、思い出に持ち帰る事が出来ます。取材班のオーダーシートもそれぞれ素敵に仕上がりました。



←こちらのカフェでは、推し活をより充実させるグッズの販売も行っています。通販で購入可能な「推し活戦闘服」は、カフェの店員さん達が実際に着て接客をしてくれます。推しへの愛を全身で表現できるアイテムとなっております。さらに人気なのが、「推し文字アクセスタ」です。推しのアクリルススタンドなどに添えることで、推しを想う気持ちを代弁してくれる優れものです。全部で4シリーズ、購入時はシリーズそれぞれの20種の中からどれが出るかお楽しみ。種類によって出る確率が異なり、お買い物もガチャガチャのように楽しめます。

# の裏側



大学生になると、いよいよ社会人へのカウントダウンが始まっていきますね……そんな中で普段私たちの目に触れる会社はどのようになっているのでしょうか。業種のバラバラな2社に勤める各社員の1日に迫ります。

お話を聞いたのは…

Calbee



カルビー株式会社は、1949年4月30日に会社を設立。現在国内におけるスナック菓子市場で50%以上のシェアを有する。主として、ポテト系、小麦系、コーン・豆系のスナック菓子及びシリアル食品の製造・販売等を事業内容としている。連結子会社は国内だけにとどまらず、海外にも約14社存在する。また、グループ全体で持続的成長と持続可能な社会を実現することを目標とした「サステナブル経営」を実践。食の安全・安心の確保だけでなく、地球環境への配慮や人・地域社会・コミュニティとのつながりの深化、多様な人材への尊重に働きかけている。

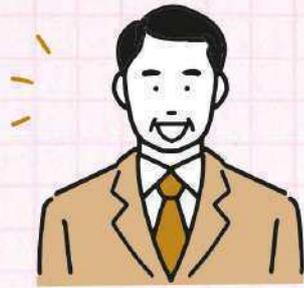
- 9:00 出社、メールチェック
- 9:30 チームミーティング
- 11:00 社外でデザイナーとパッケージについての打合わせ
- 12:00 昼休憩
- 13:00 社内で調査についての打合せ
- 14:00 社内で新商品についての打合せ
- 15:00 社内でプロモーションについての打合せ
- 16:00 資料作成
- 18:30 退勤



## 深掘りポイント!!

- 全カルビー商品の企画立案を担うマーケティング本部に所属。人気商品「Jagabee」のブランドマーケティングに携わる。「Jagabeeを知らない」お客様への効果的なアプローチと「どうしたら好きでい続けてもらえるか」を両面で考えながらの仕事のやりがいはお客様に「おいしい」と言ってもらえること。
- アイデアを実現させるためには部署の垣根を超えた連携が不可欠。他部署のメンバーとの協働で新たな視点が得られる。  
挑戦を認められる環境がモチベーションにつながり、チャレンジの原動力に。挑戦への一歩を後押ししてくれる環境はとても心強く感じる。
- 商品のアイデアを生み出すには、それまでに吸収した多くの経験をもとに想像力を働かせることが大事。

参考：カルビー採用ウェブサイト



# 知りたいお仕事

お話を聞いたのは…

## サンシャインシティ



株式会社サンシャインシティは、1966年に設立した、「なんか面白いこと、ある。」をスローガンに掲げる、池袋地域開発の先駆けとなった企業。施設の中にとどまらず、「なんか面白いこと」を地域と社会に提供することをミッションとしている。

事業内容としては、オフィス、ショッピングセンター、劇場などの賃貸事業、まちづくり・エリアマネジメント事業ならびに展望台、水族館、コンベンションセンター、駐車場などの運営がある。

11:00	出社、デスクワーク
12:00	企画書等の資料作成
13:00	昼食
14:00	社外で開催予定のイベントについて打合せ
15:00	社内でミーティング
16:00	取引先と現場確認
17:00	オンライン配信イベントに参加（出演）
18:30	噴水広場でのイベント視察
19:30	退勤



### 深掘りポイント!!



主に宣伝、広報、イベントの企画・運営、CX(顧客体験価値)向上に携わるコミュニケーション部に所属。イベントでは展望台・水族館・商業施設など、全館を連動させるような企画をするのもこの部署の大切な役割。



テレビCMやチラシ・ポスターなどの宣伝物の制作や有名キャラクターを使ったイベントの企画・運営等を担当している。



サンシャインシティではイベントを企画・運営する際に、広告代理店を使わないことが多い。自分たちが考えた企画を自分たちの手でカタチにできるやりがいを感じる一方、ダイレクトに要望を受けるため、それを上手く処理しなければならない大変さもある。

来場者が昨年より大幅に増えたり、会場にくるお客さまから「楽しい」という声をいただいたり、あるいは他部署から「またこのイベントをやりたい」と言ってもらえる瞬間は本当にうれしい。



社内のみならず社外の人々とも数多く連携する中で、新しい人との出会いがあり、新鮮な刺激を得たり、知見が広がったりなど新しい仕事につながるものがたくさんある。個人としても、組織としても、このような人々との出会いやつながりをたくさんもてることは、自分にとって仕事の大きなモチベーションになっている。

# マクロビの魅力

日本発祥の食事法の特徴と  
意外な魅力

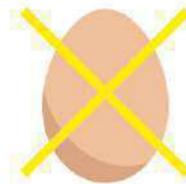
マクロビオティックをご存じでしょうか。日本発祥の食事法の一つであり、  
肉製品や卵などの動物性の食材を使わない料理です。

この食事法についてとその魅力をCHAYAマクロビへの取材を通して紹介したいと思います。

## マクロビオティックとは

マクロビオティックとは、自然の食材をバランスよく摂取することで体と心の健康を促す食生活の一つです。動物愛護を目的とした思想からではなく、健康や長寿といった目的から導かれるのがヴィーガンとの大きな違いです。マクロビの食事は、環境にも優しく、持続可能な方法で食事を楽しむことができます。また、豊富な栄養によって消化器系の働きを改善し、体のエネルギーや免疫力を高めることもできます。昨今、健康と持続可能性を追求する人が増えてきており、そのような人々に注目されているのです。

卵不使用



肉不使用



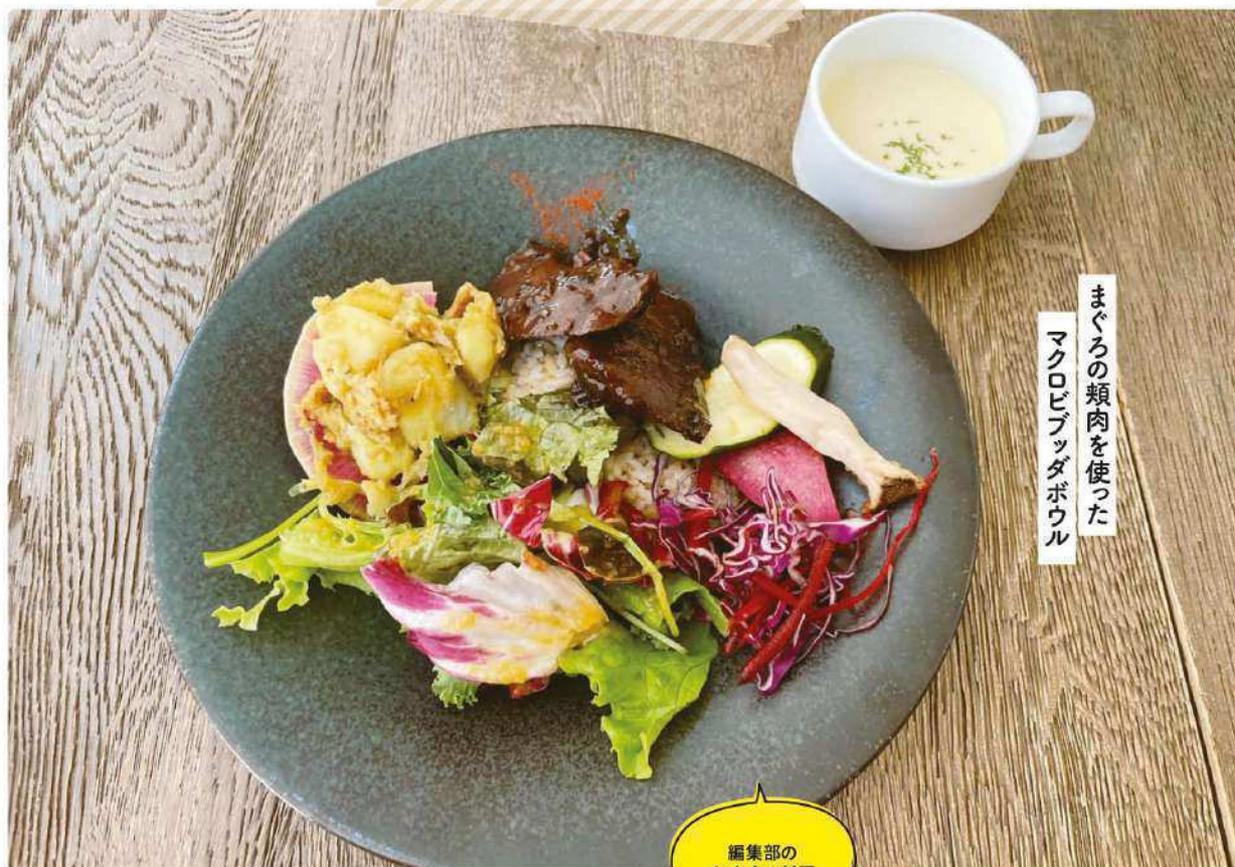
CHAYAマクロビの  
ダブルケーキセット  
(卵不使用)



いちごのショートケーキと  
ハイカカオクラッシュショコラ

## 調理の難しさ

マクロビに基づく料理を作るうえで、旨味出汁の取り方が複雑な点の一つです。普通は、生姜やニンニク、香味野菜などによる香り出しや風味によって味を補います。しかしマクロビ料理では原材料に限りがあるため、それを一から作り出すことが難しいです。また、マクロビには五葷抜きという概念があります。これは動物性食品に加え、ニラ、ニンニク、ネギ、ラッキョウ、アサツキの五葷を食べないことを指します。マクロビ料理は、そもそも一般料理と旨さや香りの考え方が違うため、味があっさりしがちな中で、いかに満足させる味を作り出せるか日々検討しています。



まぐろの頬肉を使った  
マクロビブックボウル

編集部のおすすめ料理



人気No.1  
マクロビプレート

CHAYAマクロビの  
ランチメニュー

## 意外な需要

マクロビोटニックの食事では原則、卵や乳製品は使用されていません。食物アレルギーのある方は外食時には自分の食べたい料理にアレルギーが入っているかの確認が必要になります。しかしマクロビोटニックでは、卵や乳製品にアレルギーがある方でも、外食の際にアレルギーにとらわれずに食事ができるため安心です。他の人達と同じ食事がとれることも嬉しいポイントです！卵、乳製品、小麦を使用していないホールケーキもあり誕生日も安心して楽しめます。またマクロビの食事では大豆や豆乳など栄養面で卵や乳製品の代替となる食材や調味料を使うことで栄養バランスを保つことができます。

## CHAYA マクロビ

CHAYA マクロビोटックスは、「食べてきれいになる、オーガニックな生き方」をコンセプトに、汐留店、新宿店など6店でこだわりの食事を提供。厳選した産地の食材を用いたマクロビの食事は、老若男女に楽しまれています。社員さんおすすめ「贅沢プレート」は季節の食材を取り入れた逸品です！編集部は「マクロビブックボウル」をお薦めします。マグロのホホ肉を贅沢に使用した色彩豊かなプレートに仕上がっています。ぜひご賞味ください！



CHAYAマクロビ汐留店

# 何聴いてる??

友達が普段どんな音楽を聴いているか、気になったことはありませんか？  
この企画では、学習院生が聴いている曲と、そのおすすめポイントを紹介します。  
気になる曲があったら、ぜひ聴いてみてください！

## 1 元気を出したいときに♪

### YOASOBI 「群青」

YOASOBI の曲は独特のリズムなので、耳に残りやすい音楽が多いと思います！  
ペンネーム：つぶ

### 緑黄色社会 「sabotage」

アップテンポの曲が多く、元気になれます！  
ペンネーム：まる

### テイラー・スウィフト 「22」

バラードもアップテンポな曲も良いです！  
ペンネーム：み

### SixTONES 「こっから」

かっこいい曲もバラードも、どんな歌も歌いこなす素敵な歌声を持つ6人です！  
ペンネーム：虹

## 2 「かわいい！」「かっこいい！」に魅了されたいときに♪

### 超ときめき♡宣伝部 「すきっ！」

個性豊かなメンバーが集まるアイドルユニット、超ときめき♡宣伝部、超オススメです！メンバー全員可愛くて聞いているだけで幸せな気持ちになれます！  
ペンネーム：あっきー

### Tomorrow X Together 「Happy Fools」

かっこいい。かわいい。良い子達。一回でいいから見てください。かっこよすぎてとびます。  
ペンネーム：ぴび

### 超ときめき♡宣伝部 「トゥモロー最強説!!」

超ときめき♡宣伝部は歌唱力がとても高く、とにかく可愛いアイドルグループです！  
ペンネーム：いたや

### BEYOOOOONDS

かわいい！歌がうますぎる！やさしい世界！  
ペンネーム：新月

### なにわ男子「NANDE?!」 SixTONES「NEW WORLD」

なにわ男子も SixTONES も、歌っているときはかっこよく、話しているときは面白いというギャップがとても良いです。  
ペンネーム：りんご

# 3

## 歌詞を味わいたいときに♪

### 乃木坂 46 「人は夢を二度見る」

乃木坂はいい歌詞の曲が  
たくさんあります！  
ペンネーム：みと

### あいみょん 「3636」

迫力があって、  
どの歌も素晴らしい詩です。  
ペンネーム：も

### 秋山黄色「SKETCH」 傘村トータ 「明けない夜のリリース」

秋山黄色：歌詞がいい。  
疾走感がある曲が多い。  
傘村トータ：つらいことが  
あったときに寄り添ってくれる曲。  
ペンネーム：メープル

# 4

## 他にもたくさん！♪

### 松任谷由実 「満月のフォーチュン」

愛知万博でも歌われた  
隠れた名曲。  
ゆーみんは今年で50周年！  
ペンネーム：きっしー

### JO1 「SuperCali」

歌だけではなく、ダンスも  
とても魅力的です！  
JO1はメンバー数が11人と  
多いので、シンクロダンスの  
綺麗さがより際立ちます。  
ペンネーム：小舎人童

### Earth, Wind & Fire 「September」

昔のかっこよさの集合体。  
ペンネーム：やなぎ

### 日向坂 46 「僕なんか」

曲調やタイトルからは  
想像できないラスサビの速い  
ダンス、メンバー同士のかかわりが  
これまで以上に強いMVも  
見どころです！是非……！  
ペンネーム：なーたん

### RADWIMPS 「夢灯笼」

「君の名は。」を思い出します。  
ペンネーム：ゆう

### ENHYPEN 「Bite Me」

ラップパートとサビのギャップ  
がかっこいいです！  
ペンネーム：ふりーたー

### King Gnu 「Vinyl」

常田さんの創作の才能、  
それに調和するメンバーの  
神技が本当に好き。  
ペンネーム：だーれだ

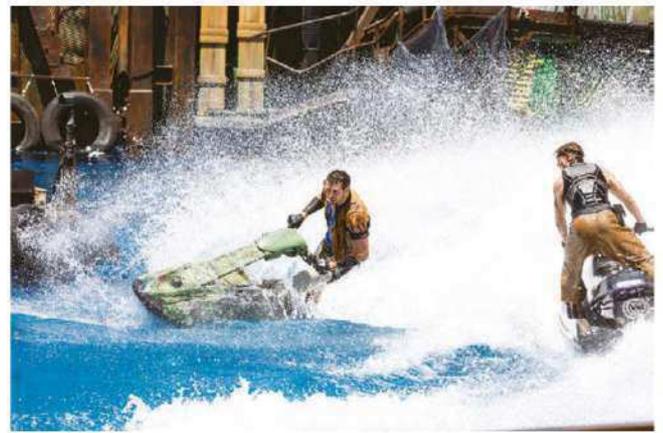
### カンザキオリ

生きていることに罪悪感を  
覚えてくる点がおすすめ。  
ペンネーム：くらげ

## モッピーのバルーン・トリップ



気球に乗って  
空の旅へ!



ウォーターワールド

近未来×水  
=迫力満点でショー!

# がいっぱい!

## ユニバーサル・スタジオ・ジャパン

沢山のキャラクターに会える夢のような場所を知っていますか?

そう、それはユニバーサル・スタジオ・ジャパンです。

ここでは、おすすめのショー&アトラクションを2ページ、おすすめの「NO LIMIT! パレード」と関連グッズの特集を2ページ、計4ページにわたってパークの魅力を紹介いたします。

もしかしたらあなたの推しに会えるかも?

ファンキーで  
クレイジーな本格ライブ  
エンターテイメント!

死してもなお現世に未練たらたら  
のモンスターたちが何をしでかすのか、一瞬たりとて目が離せないでしょう。ユニバーサル・スタジオ・ジャパン開業当初からあるアトラクションの一つであり、映画で活躍したユニバーサル・モンスターたちが大集合! 「ビートルジュース」という映画はご存じですか? ファンにはたまらないでしょうが、まだ見ていない! という方もご来場前に一度視聴してみると良いかもしれません。ステージで歌い踊る曲はおなじみのナンバーばかりなのでモンスターたちと一体となって盛り上がる!

## ユニバーサル・モンスター・ライブ・ロックンロール・ショー



## ジョーズ



走るアドレナリン、  
世界を飲み込むヤツが来る。

ユニバーサル・スタジオ・ジャパンでの代表的なアトラクションの一つといえばこれ、JAWS（ジョーズ）でしょう！

大きな魚影にはご注意ください、ヤツがいるかもしれません。平和な港町の楽しいボートツアーが一転。生死を分ける恐怖のツアーへと変わり果てる。フォトサービスもありますので思い出作りには十分であること間違いない！

（身長122cm未満の方は付き添い者が必要になります。）

## ハリウッド・ドリーム・ザ・ライド



空飛ぶ爽快  
コースター

一秒たりとも目が離せない！  
宇宙に飛び立つ準備は  
Are you ready？

普通のジェットコースターでは物足りない！ というそんなあなたにおすすめしたいのは、こちらのアトラクション。独創性あふれる演出でスリルあふれるスピン・コースター。乗客の体重のバランスによって回転の仕方が変わるので、乗る度に新しいスリルを味わうことが可能！ 宇宙空間を舞台に、星々や惑星の間を縦横無尽に駆け回るライドから見える景色は、圧巻の美しさです。太陽の輝きを取り戻す冒険へ、さあ出発しませんか？

（身長102cm以上の方が利用できます。身長102cm以上122cm未満の方には、付き添い者が必要です）

## スペース・ファンタジー・ザ・ライド



# 推し



# NO LIMIT! パレード

2023年3月1日から始まったユニバーサル・スタジオ・ジャパンの新しいパレード。そこでは誰もが主役。全員参加型のダンス・パーティーは自分自身の殻を破って心の底から超熱狂間違いなし！ミニオンや『SING』の仲間たち、エルモやスヌーピー、ハローキティたちがフロートに乗って登場します。注目は、テーマパーク史上初めて同時にパレードへ登場するMarioたちのフロートと“ポケモン”たちのフロート。Marioたちのフロートではレインボーロードの上をMario、ルイージ、キノピオ、クッパ、ヨッシー、ピーチ姫たちが登場し、熱いデッドヒートを繰り広げます。“ポケモン”フロートでは、リザードンがスモークを吐き、ピカチュウがノリノリに踊り、伝説のポケモンであるルギアとホウオウが空を駆け巡ります。日常に鬱憤が溜まっているそのあなた。みんなが主役のパレードに参加して一緒にぶっとびましょう！



## ハローキティ

「可愛い」といえばハローキティ♡カチューシャからドリンクホルダーまで、パークのお供にぴったりなキュートなグッズが盛りだくさん。



## スヌーピー

みんな大好きピーナッツの仲間たち！いつでもあなたの良き友人、スヌーピーはパークであなたを待っています。



### ポケモン

みんな大好きポケモングッズのご紹介！ カチューシャやハット、シャツなどファッションアイテムをはじめとして、バッジやキーチェーンなどの小物アイテムも多数登場。

### ミニオン

ユニバーサル・スタジオ・ジャパンといえばみなさん馴染みのミニオン達、こんなところにもいるのです！ ミニオングッズと一緒に、パレードでミニオン達と戯れるのもまた一興かもしれません。

## GO DANCEパーティー！



### マリオ

2021年に新エリア「スーパー・ニンテンドー・ワールド」ができたことでも話題沸騰のマリオたちのグッズ。キーホルダーはお土産に喜ばれること間違いなしです！ トートバッグはシンプルなデザインだから普段使いにもおすすめ◎

取材・文/吉村咲保、鈴木夏音、高柳信之介

画像提供/ユニバーサル・スタジオ・ジャパン、TM & © 2015 Sesame Workshop、© Nintendo  
Minions and all related elements and indicia TM & © 2023 Universal Studios. All rights reserved., TM & © 2023 Sesame Workshop, © 2023 Peanuts Worldwide LLC, © 2023 SANRIO CO., LTD. APPROVAL NO. EJ3020101, ©2023 Pokémon, ©1995-2023 Nintendo/Creatures Inc./GAME FREAK inc.



乃木館

明治時代の建物がキャンパス内にあるのも学習院ならではの。

## HISTORY

歴史あふれる  
建物の数々



北別館

北別館は明治42年に図書館として建造された建物の一部です。

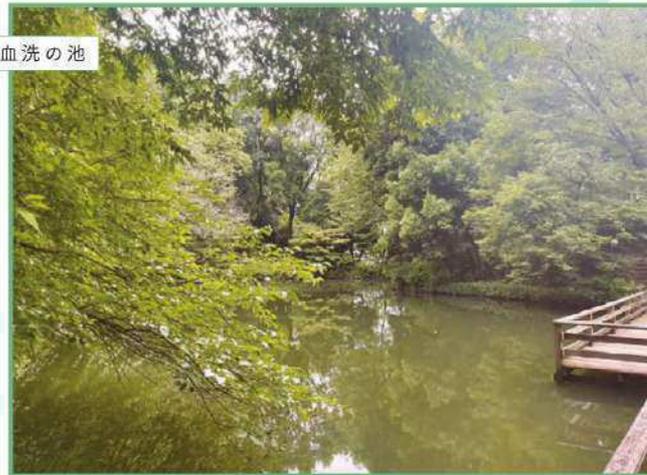
歴史を匂わせる外観ですが、中は近代的な構造になっています！



南1号館

## NATURE

緑豊かな目白の杜



血洗の池

緑豊かな自然林に血洗いの池があります。その由来は江戸時代、赤穂浪士のひとりの堀部安兵衛が仇討ちに使った血まみれの刀を洗ったという話にもとづきますが、実はこれは作り話のようです。ここには鯉が泳いでいて運が良ければカワセミが見えるかも！

# MY FAVORITES OF Gakushuin

在学生から見た目白キャンパスの魅力について、  
4つの面から迫ります！

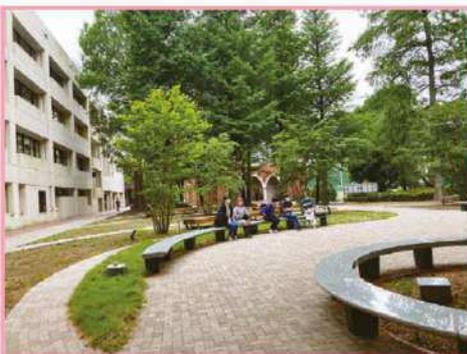
## CIRCLE

ワンキャンパスで深まる絆



大学図書館 グループ学習室

↑新設図書館のグループ学習室は開放感抜群で話し合いも捗ります。



→キャンパス内にはベンチが沢山！おしゃべりやランチに便利です☺

## FOOD

ごはんで元気をチャージ



←学食のカツカレー。多くのメニューがあり、毎日でも飽きません！



東1号館1Fタリーズ

→東1号館1階にオープン。授業の合間に立ち寄ってみては？

# 作文集

女子中・高等科	中・高等科	初等科
.....	.....	.....
69	64	52
75	69	64



## 私の戦友

中野 貴文

Nakano Takafumi

学習院大学文学部教授

私の相棒ということで、今日は妻の話を書きたいと思う。無論、おじさんののろけ話など、塵芥ほどの需要さえあるとも思えない。それでもなお、相棒として妻の名を挙げるのは、文字通り、彼女がともに家事と育児を乗り越えてきた「戦友」だからである。

我が家は、夫婦と三人の子どもからなる五人家族だ。私も妻も西国出身で、実家は今もそこにある。祖父母のヘルプを期待することはできない。時間のない共働き家庭にとって、家事の分業化は喫緊の課題であった。

詳細は省くが、妻の仕事は暗黒なブラックぶりで、精神的にも身体的にも負担のかかる職種だ。例えば、彼女は朝誰よりも早く家を出、誰よりも遅く帰宅する。これは共働き家庭の宿命だが、夫婦のどちらかひとりでも体調を崩すと必然的にもうひとりが完全ワンオペ、家事も育児も崩壊ギリギリに追い込まれる。妻が無理をして体調を崩すよりはと、体力的に余裕のある私が料理・洗濯、あるいは

保育園の送迎等を担当することに落ち着いた。一限や五限のある日を除けば、自分が家にいる時間のほうが圧倒的に長かったからだ。ありがとう、在宅勤務。ありがとう、オンライン会議。

物理的なタスクを主に私が担当する傍ら、妻は別の役割をこなした。彼女は情報収集が得意で、かつ、生活を良くしていこうという向上心にあふれるタイプだ。最新家電の比較検討、子どもの習い事の情報収集、家の模様替えのプランニングなど、妻が担当する範囲は枚挙にいとまない。

また、どうしても妻にしかできないものもある。娘のヘアアレンジと裁縫だ。まず、天パー男性である私にとって、女性の髪を結うことは極めて難易度の高いミッションだった。三つ編みの練習台でメドゥーサにされてしまった長女には、今も申し訳なく思っている。後者は老眼だからだ。針の穴とかマジ見えないんすよ。

このように、夫婦がそれぞれ得意な分野を担当すると同時に、徹

底した情報の共有も行った。ある家事について、どちらかしが理解していないと、どうなるだろう。仮に普段担当している方が風邪をひいてしまふなどすると、「トイレ用洗剤はどこ?」「保育園のシーツ替えはどうやればいいの?」といった事態に陥るだろう。悪くすると、「相手はこの分野に関心がないのでは?」と、疑心暗鬼を生ぜしめかねない。

これを防ぐべく、お互いが担当しているものについて、どんな些細なことも共有を徹底することで、二人でやっているという意識を育むよう努めた。そう、だからこそ、妻は代わりのきかない「相棒」なのである。

この先は子どもたちも加わり、家のことを五人で管理・運営していくという感じになってほしいと思っている。そうやってはじめて、たまたま同じ家に住んでいる人ではなく、一つの共同体をともに運営している「家族」になるのであるまいか! ってなんだか、ゼミ発表のような終わり方だ。



第	輔	雜	発
53	仁	誌	表
回	会	賞	



入選

干し蚯蚓……………諸坂宮果

準入選

そよかぜ……………播磨未智

佳作

THE DAYS AT UG…M3473

●講評 (五十音順)

女子中・高等科講師…石井健博  
 高等科教諭…伊藤禎子  
 文学部教育学科教授…梅野正信



●応募作品一覧

失望…伊丹秦ノ助

干し蚯蚓…諸坂宮果

そよかぜ…播磨未智

線香花火に願いを…湯川 喬

聖別…あ

あなたのやしろ…森山さわぎ

麗しき人魚姫…奈月ハンナ

池袋ラブホ放火事件…日サロパンダちゃん

仁論…チンチャオロース

電子人格…青木美咲

マグカップのアイスコーヒー…すん

THE DAYS AT UG…M3473

往復ビンタ…と龍



## 選評？

最初にお断りしておく、今回の輔仁会雑誌賞では、私は、作品を選んではいない。そのいきさつは、編集委員の方が記されると思うので、そちらを御覧頂きたい。

自分で選択することは大事であるが、ときには天の配剤に任せるのも良い。今回は、編集委員の方が選んだ作品に、私が講評を付けた。例年どおりであれば、多数（と言っても、十〜十数程度だが）の応募作品を全て読むので、読み込みが足りない感もあったが、今年度は、一作品のみで、じっくり読むことができた（その割に、おそまつな選評なのは、単に私の力不足である）。

輔仁会雑誌賞は、学習院に在籍する者であれば、誰でも（児童・

生徒・学生のみならず、教職員でも）応募できる。だが、実際に応募する方は、やはり若い方、男子部生・女子部生・大学生が中心である。そして、輔仁会雑誌の読者も、若い方（と、その保護者の方）が中心ではないかと思う。例年、輔仁会雑誌賞は、三名程度の（必ずしも）若くない教員が選考委員となつて、受賞作を選んでいく。来年度は、この通常のシステムにもどるかもしれないが、今年度のように、若い方（編集委員）が選考に直接関与するのも良いのではないか。例えば、選考委員の一人として、編集委員の学生が参加するのは、どうだろう。新たな（若い）視点が導入されれば、他の選考委員にとつても、良い刺激

となる。編集委員諸賢には、御一考願いたい。

閑話休題。受賞作の「そよかぜ」について、愚見を述べる。

この作品の良さについては、掲載された作品を読んで頂ければ、十分伝わる、と思われる。さらに「あとがき」も付いているので、作者の意図も明らかである。しかし、この作品を読んで、どう感じるか、何を考えるかは、人それぞれだろう。

良い小説（芸術作品）とは何か。確固たる世界観を持ち、読者（鑑賞者）を否応なくそこに引き寄せた作品だろうか。主人公の無名「作家」は、応援する「ダンサー」のパフォーマンスを、そう評価し、憧れる。もちろん、それも良



女子中・高等科講師

石井健博

い。しかし、ごちゃ混ぜの感情を読者にぶつけ、ゆさぶる、「作家」の書く「嵐」のような作品も読んでみたい。完成された作品も良いが、ゼロからイチを生みだそうとする、苦悩を感じられる作品も良い。「そよかぜ」も、そうである。

付けた。詳細が描かれない点も、この作品の魅力である。「作家」や「ダンサー」の作品がどんなものか、読者によつて想像するものは違う。「ダンサー」は何歳だろうか。私は、「作家」より年下ではないかと考えた（「ダンサー」は十七、八年前を「駆け出しの頃」と言っており、四十代の「作家」より年下とも考えられる）。いろいろ想像を楽しめるのも、良い小説である。

## 無自覚な自己分裂の成長途上



高等科教諭

伊藤 禎子

今年の輔仁会誌投稿作品への選評文について、私が担当することになったのは、「干し蚯蚓」である。

中学受験を控えた小学六年生の光一が主人公であり、夏の炎天下の中、アスファルトに寝そべる主人公の光景から始まる。中学受験を控えていること、まるまる太っている点から、裕福で、育ちの良なお坊ちやまの印象を与える。その性格で、クラスで浮いてしまうことになり、夏休みに同級生の男の子と殴り合いの喧嘩をする。その喧嘩に負けてアスファルトに寝そべるところが、まるで「死んだ蚯蚓(干し蚯蚓)」のようである。

この作品では、物語の途中で光一に声をかけるおじいさん(ハセさん)の存在も重要である。しか

し、光一が最終的に受験に成功した後には、このおじいさんの姿はなく、再会を果たすことはない。

この作品は、情景描写が目につかびやすくわかりやすい。また、「小学六年生」という主人公の年齢が、大人を知りつつもまだ子供であるという微妙な時期になっており、物語のキャラクター設定として面白くなっている。

たとえば、「人間の本性は悪だ。」から始まり、「垂れる血を拭って舐めると、屈辱の味がした。」に終わる冒頭部は、読者としてはまだこの主体が「小学六年生」であることを知らないため、大人びた人物を想像してしまう。しかし、その後、「修了式の日に荷物を全部持って帰るといふ計画性の

ないさま」と言うところから、自ら計画性があると自負する子どもの姿を想像させる。同級生たちからの悪口に対して、それが悪いことは「道徳の授業でも習った」と言うところは等身大の小学生らしく、一方、白髭橋のアーチ状のことを「髭というよりも女性の髪を思わせる」と言うところは大人び

ている。六年生とはいえまだ小学生でありながら、進路に悩むことで大人びた思考をも備えている。子どもと大人の錯綜した様子が描かれている。

また、題名にもなっている「蚯蚓」については、「ハセさん」とのやりとりの中で、「どっちでも生きてけない」存在として描かれている。大人っぽくもありなが

ら、子どもらしさの残る、中間的な光一と対照的な存在である。光一は「夕方」が好きと言い、日差しと暗闇の境界を選ぶ。一方、蚯蚓は、生きるためにアスファルトに出て、そこで焼け死ぬ。どちらでもよいというような境界に生きておらず、潔い生き方(死に方)である。

最終的に中学受験に成功した光一の周りには、喜ぶ親と、からかってこない同級生たちがいる。一見平穏な日々であるが、かねてより「干し蚯蚓」に心惹かれていた光一はこれでよいのだろうか。彼の見た夢の内容も相まって、興味深い読後感である。

諦観と希望のモノローグ  
 ～ THE DAYS at UG によせて～



文学部教育学科教授  
 梅野正信

THE DAYS at UG は、時代を残す物語といえるだろう。時々の記憶は、相応の時を経るごとに、小綺麗な物語へと組み替えられてゆく。しかし本作品は、むしろ極私的であることで、安易な変形を許さない感性を刻みこむ。作品を流れるおだやかな諦観、救いと希望を感じとろうとする青年期の心性を通して、我々が身を置くこの時代を伝えている。まずはこのことを、率直に讃えたい。

文学の埒外に身を置くため、社会的背景を敷衍した書き出しになることを、お許しいただくことにする。およそ100年をさかのぼる、「国内」だけで死者39万人を数えた「スペイン風邪」(内務省『流行性感冒』1922)の頃、『輔仁会雑誌』は、病魔に逝った友人を惜しむ追悼と哀悼の文章を掲載している。だが、同時期の学生の思いを伝える一文は、目にする事ができなかった。THE DAYS at UG は、もちろんのこと、追悼の文ではない。うす明かりに記憶されたような、この4年余の情景を、青年期の感性をモノローグに潜ませ、柔らかく切りとってみせる。

「始まったといっているのか、コレ?」  
 2020年の大学入学。遠隔講義の画面に向かう日々。自宅だけが「世界」になってしまった。「世界の一端」さえ閉ざされている。「新たに関係を築こうとするには重い空気」の健康診断は、半年後のことだ。「この世界は、ひどく息苦しい」との独白は、同時代の共感をよび起すことだろう。語り手の亀井渉は、閉塞した世界を諦観しながらも、なお「救い」を求める心性は、閉ざしていない。2021年の秋、見舞いもできないまま亡くなった祖母を見遣る父親の悔恨に触れ、これを推し量る自身に気づくことで、これはこれで一つの希望なのだと思いついた。「この苦しさは誰もが抱えている」、「それを感じることは、ほんの少しだけ救い」なのだ。公園で出会う外丸との会話も、そうである。

2020年9月の残暑に、そして紅葉の11月、1年を経た21年の11月、22年の5月。渉が、ほかならぬ自身の手で、ふたたび「世界」を立ち上げようとする様が、テンポよく描かれている。みずから救いを見出し、世界をかえこじあげ、再構築し、希望にかえてゆく。「ゆるやかな好転の中で、どうにもならない後悔」、そして「船は難破していたけれど、遠くに灯台の灯を見た」、「マスクを外す事への抵抗感はなくなった」、「心から笑う」、「この大学で過ごす時間が愛おしく」というモノローグがつながり、教室で眼をとめた学生への淡い思いへと及んでゆく。

青年期の持つ自明の力なのだろうか? おそらくはそうなのだろう。大学のゆえでなく、まして大学教員のゆえでなく、ほかならぬ大学に向かうその人の感性をもつてして、世界が開かれてゆく。わかりきったことをと、窘めを受けそうだが、それでも、はるかに齢を重ねた評者には、作者の感性とやわらかい文体が、とても眩しく感じられる。

入 選

# 干し蚯蚓

坂田 諸水

人間の本性は悪だ。炎天下のアスファルトに倒れながら、僕はそんなことを思った。眼前には、カマキリの死体に群がるアリたちがいる。カマキリは仰向けで腕を折りたたんだ状態で死んでおり、顔は見えない。もしかしたらアリたちが巣に持って帰ったのかもしれない。殴られた痛みが残響のように体中に広がる。大勢に殴られたのはこれが初めてだ。遠くからあいつらの笑い声が聞こえる。蟬の音も聞こえる。鼻から血が垂れて、一滴、もう一滴、地面に着床した。垂れる血を拭って舐めると、屈辱の味がした。

一学期の修了式の帰り道、アスファルトの上で焼け死んでいるミミズをじっと見つめていた。時刻は正午。澄み渡った空から降る光はじわじわと僕を焦がし、それに耐えかねて僕の身体が涙を流す。その涙も日の光が焼き尽くす。夏は嫌いだ。夏には死の匂いがする。この通学路だけでいくつの死があるだろう。朝のニュースでも熱中症で高齢者が亡くなったと報じていた。夏は持ち前の明るさで平然と人の命を奪っていく。蟬は夏の暑さを嘆いて鳴いているのだろうか。今日は台風一過の快晴で、気温は三十五度を超えている。ミミズはアスファルトに張り付いていて、吐き捨てられたガムみたいだ。血管だけが誰かの体から飛び出して干からびたようにも見えない。いずれにしろ、ずっと見ていたい対象ではないが、死を最近意識するようになった影響かもしれない。なぜかそのミミズに心惹かれていた。

一か月前、祖父が亡くなった。コロナだった。元々糖尿病やがんを患っており、晩年は入退院を繰り返していた。病院のベッドで最後に見た祖父の姿

は、血管が浮き出て骨と皮ばかりになっていた。体の至る所に延命処置のためのチューブが刺されており、見ただけでいたたまれない気持ちを起こさせた。祖父が最終的にチューブを外してもらおうように頼み、祖父は八十五歳でこの世を去った。静かな熱帯夜の静かな死だった。家族全員が、僕を除いてすすり泣いていた。僕はハンカチを目に当てて、泣いたふりをして泣いた。どうしても涙は出てこず、ただせめて泣いているふりをしようと思った。この時、僕自身が一番驚き、一方で非常に冷静だった。僕は思った。「ああ、僕は祖父が死んでも泣けない人間なんだな」と。祖父との思い出は決して少ないというわけではない。むしろ同じ家で暮らしていたので、いろんな思い出がある。家族で銭湯に行ったこともあるし、奥入瀬に家族で旅行に行ったこともある。僕をよく可愛がってくれ、祖父の膝の上に乗って水戸黄門を見るのが、僕の毎日の楽しみだった。しかし、同じ家で十二年間暮らしても、僕は祖父のために泣くことはできなかった。太陽を見上げる。太陽が僕をあざ笑っているような気がした。みんなが笑っている。太陽も笑っている。

「おい豚！ なにやっつんだあ」

声のする方をちらりと見る。あいつらだ。全員手に観葉植物と膨れた防災頭巾を持っている。修了式の日、荷物を全部持って帰るといふ計画性のないさまが、そのまま彼らという人間を象徴しているように思った。

「こんなに暑いと焼豚になるんじゃないか？」

「ははははは」

ただでさえ蟬の音で不快なのに、こいつらの声まで

聞こえてきて、怒りを通り越して疲れてきた。

「僕は人間だ。お前たちこそ、集団でないとも何もできない人間じゃないか。お前たちこそ豚だ」

「豚がなんか言ってる！ ぶひぶひぶひ！」

「ははははは」

蝉の音も僕を笑い始めた。こいつらとはもう話す気が起きない。今日でしばらくこいつらと話さなくていいと思うと気が楽になってきた。あいつらの一人が荷物を前に出して言う。

「じゃんけんに負けたらこれ持てよ。豚にはいい運動になるだろ？」

「ははははは」

「何が君の荷物を持たないといけないんだよ。計画的に持ち帰らないからだろ。自分で持って帰れよ」

「せっかくこつちが運動させてやろうっていうのに。ひでーやつだなあ。ヒデー豚だ。ヒデー豚！」

「うるさい！」

手に持っていたミミズの死体を投げつける。あいつらは驚いて、うち一人は後ろに倒れた。ちょうど倒れたやつの上のミミズが乗った。白い制服とは対照的な赤黒い体は、一層グロテスクに見えた。

「うわ！ きたねえ。流石豚だ。きたない」

「とって！ 早くとって！ 虫嫌い、虫嫌い、虫嫌い！」

「やだよ、自分で取れよ」

あいつらが叫んでる隙に、僕は走って逃げた。日陰の多い路地の方へ向かう。後ろからあいつらの怒鳴り声が聞こえるが、無視して走る。あいつらも両手

の荷物をぶんど振り回しながら追ってくる。普通に走ったらあいつらの方が早いだろうが、荷物が邪魔でうまく走れないみたいだ。交差点が見えてきた。幸い行き交う車はまばらだ。赤信号を無視して全速力で交差点を渡る。「いけないんだー」という声が後ろから聞こえてきた。なんとも言え。今回の勝因は夏休み前の計画的な荷物整理のおかげだ。大声で「ざまーみる」と叫んで、走った。太陽はもう笑っていないかった。

あいつらが僕に絡みだしたのは今年の一学期からだ。小さい小学校でクラスも三つしかないのに、前から話したことはあったが、クラスで僕だけが私立の中学校に行くこと知ってから、僕の容姿を馬鹿にするようなことを言い始めた。始めのうちはこつちも容認してたが、一度怒ってひどいことを言ってしまった。それ以降、豚とか相撲取りとか、品のないことを言うようになった。癪に障るが、どうせもう合わない種類の人間だからと、関係を修復するのは諦めている。だが、あいつらの言うように、自分はちよつと太りすぎている気もする。少し走っただけでも体力が限界だ。お腹の肉を少しつまむ。テレビやアニメに出てくる小学生はもつとスリムだし、デブのキャラクターが出てきても、横柄な奴が三枚目のギャグ要員で、かっこよくはない。自分の肉体は、不必要なものばかりが付着していて、非常に醜いもののように感じた。太っているのは僕に責任があるだけに、一層自己嫌悪に襲われる。醜い体を隠すために大柄な服を着ているが、その結果より体の醜さが意識される。容姿を馬鹿にするなどは道徳の授業でも習ったことだ。僕を豚だというのはあ

いつらが悪い。しかしそれに歯向かおうとして家庭環境であいつらを攻撃することも、間違っていることだ。それは分かっている。あいつらの相手をしていって一番不愉快なのは、あいつらの言動だけでなく、あいつらを見下す僕自身の選民思想だ。今回みたいな採め事の後は、いつもこうしたことを考える。仲直りがしたいわけじゃない。ただ、正しいことがしたい。それにしても疲れた。こんな暑い日に走るなんて、本当はまっぴらごめん。家に帰る前にどこか涼めるところに行きたい。僕はお腹をへこませながら、隅田川の方を目指した。

白髭橋は隅田川にかかる白色の橋で、西岸は荒川区と台東区の境にあり、東岸は墨田区に面している。巨大なアーチ状の橋で、白くて緩やかな曲線は、髭というよりも女性の髪を思わせる。橋の欄干からは、隅田川と入道雲と、スカイツリーが見える。高層マンションを除けば、どこまでも青と白の世界が広がっている。ふいに涼しい風が吹いて、僕の髪を揺らす。さっきまでべたついていた肌を風がやさしく撫でて、少しばかり熱をどこか遠くへ運んでくれたようだ。大きなナメクジのように見える入道雲がゆっくりと動いている。夏の風だけは、いつも爽やかだ。僕の家は墨田区にあるが、区の境目にあり、近くに小学校がないため、隣の台東区の小学校に通っている。そのため、通学するときはいつもこの白髭橋を通らなければならない。気分がいい時は桜橋や吾妻橋の方から帰る時もあるが、夏は暑いのが苦手なのでなるべく早く帰ることにしている。首都高速六号向島線の高架下には隅田川からの心地よい風が吹

いている。設置されたベンチにどっかりと座る。あの肉をつまむ。ぶくぶくとしている。これだけ汗をかいているのに、一向に脂肪は減っていない。

アイヌみたいに溶けてくれればいいのに、と毎日思う。運動しようにも、朝から晩まで勉強しなければならぬので、時間も体力もないのが現状だ。去年の夏から塾に通い始めて、週に四日は夕方から授業があり、それ以外の日も、予習や復習に費やさないといけない。第一志望の中学に合格できれば人生は

安泰だと父は言うが、裏を返せば、落ちたらその保証はないということだ。夏期講習が明日から始まるし、今は運動より勉強をしなきゃいけない。テラスの方を見下ろすと、日焼けした年配の男性が上裸になって走っている。走っているといっても、スピード的には早歩きに近い。どうしてあんなことをしているのか、僕には疑問だった。こんな暑い日に外でランニングなんて自殺行為だし、あそこまで肌を焼く意味もよく分からない。きつと楽しくてやっているんだろが、世の中から見ればやっぱり変な人だろう。苦労しているに違いない。勝手においしいさんの人生に同情する。やせ細った体に鞭打って、真夏のテラスを走り抜ける姿は、マツチ棒のように細く、同情心を掻き立てるものがあった。

ふと横を見ると、初老の男性が缶ビールを片手にこちらに歩いてくる。体は小さくて太っており、夏だというのにポロポロの上着を着ており、全体的にくすんだ灰色の装いだ。顔は赤ら顔で、既に酔っ払っているようだ。たぶんホームレスだろう。はつきりと聞こえないが、小声でぶつぶつ何か言っている。白髪は肩まで伸びており、服もこげ茶色に変色

していて不潔な印象を抱いた。ホームレスは僕の隣にどかっと座り、「あちいな」と呟いて、缶ビールを飲んだ。

「ブンちゃんも暑い中よくやるわ」

テラスの方を見下ろしながら言う。きつと知り合いなんだろう。ポケットから煙草を取り出して、震える手で火をつける。僕は煙草の匂いが苦手なので、ランドセルを持って帰ろうとすると、ホームレスはこちらに気付いたようで、

「ああ、わりいな坊主。火消すからよ」

と言って申し訳なさそうにベンチに煙草をこすりつけて火を消した。

「お構いなく」

お辞儀して答える。

「こればかりは癖でな。坊主は吸うなよ。体に悪いかからな」

おじさんは笑いながら言う。

「お気遣いいただいてありがとうございます」

「お気遣いってか。ははは。最近のやつはみんな丁寧だな」

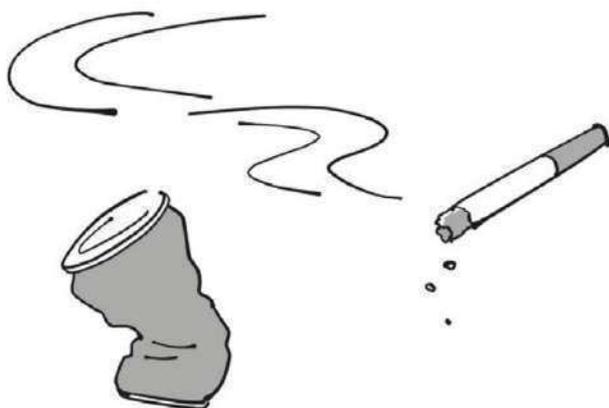
快活におじさんは笑う。するとさっきまで走っていたおじさんが階段を上がってこちらへ向かってきた。おじさんは階段を上がってこちらへ向かってきた。

「よう、ハセさん。昼間から酒かい」

「ブンちゃんこそ、暑いのによく走るね」

ブンちゃんと呼ばれたおじさんは白髪頭で、下腹だけポッコリ出ているが、それを除けば長身のやせ型で、タオルを首からかけている。あばら骨が浮き出ており、近くで見ると色の黒さが際立った。

「そっちの子は知り合いかい？」



「いや、今会った子だ」

ブンちゃんは笑って、

「なんだ、孫でも連れてきたのかと思ったよ」と言った。

「孫なんか会ったこともねえよ。あいつとももう二十年以上会ってねえんだから。別にもう会う気もねえしな」

缶ビールを飲みながらハセさんが笑いながら答える。

「あんたもヒロコちゃんに色々苦労させたからねえ。まあ、娘や孫がいるだけ幸せでもんだよ。俺は独り身が気楽でいいけど、家族が生きてるってだけで、こっちも生きてる甲斐があるってもんさ。もちろん、しがらみやいさかいの方が多い時だってあるがね」

タオルで身体の汗を拭きながらブンちゃんが言う。

「いまだに女ナンパしてるスケベ爺がいうじゃねえか。おい坊主。こいつが何でブンって呼ばれてるか知ってるか。名前がブンじゃないんだよ。菅原文太に似てるからブンって呼んでくれて言うんだよ。」

全然似てねえだろ？ それに日焼けした男がモテると思ってるってんだぜ。笑っちゃまうよな」

「似てんだろ？ なあ坊主。菅原文太知ってるだろ？ 目元なんか似てるだろ」

聞いたことのない名前だが、なんとなくうなずいておく。

「それに別に日焼けしたっていいじゃねえかよ。実際モテてんだから。やっぱりこの歳になると最後は女だよ。お・ん・な。女がいねえとたつもんもまたたねえからよ」

ブンちゃんがこつちを向いて、にやりと笑う。一瞬見えた黄色い歯に鳥肌が立った。僕はいたたまれな

くなつて顔を背けた。少しだが、悪意を感じた。

「ここ、どうぞ」

ランドセルを背負って、ベンチをブンちゃんに譲る。僕はなんとなく居心地が悪くなって早く帰ろうと思つた。もう充分休めたし、気まずさも覚えてきた。

「わりいな」と言つて、ブンちゃんはゆつたり座つた。後ろを振り返ると、二人が一緒にベンチに座つて煙草を吸っていた。煙草の白い煙が風に流されて空気に溶けていくのを見た僕は、なんだか奇妙な満足感を抱いて家路についた。

それから数日後、うだるような暑い八月のある日、塾を終えた僕は、東京メトロの浅草駅を出た後、駐輪場に行き、ふらふらと上野のあたりをサイクリングした。不忍池のスワンポートを眺めたあと、上野公園の噴水を見に行った。行き交う人々を観察する。みんな風景に溶け込んでいて、社会が上手に進んでいる感覚を覚える。同時に、僕だけが傍観者で、世界から弾かれているような気分にもなった。正面に見える国立博物館が、ライトアップされて、どことなく不気味だった。時刻はすでに夜の九時を回っていた。両親には自習してから帰るとメールしたが、そろそろ帰らないといけない時間だ。僕は家のある墨田区の方へ急いだ。

人混みの多い雷門を抜けると、紫色のスカイツリーと、アサヒビールの特徴的なビルが見えてくる。みんなは「うんこタワー」と呼んでいるそれは、火をイメージして作られたらしい。僕はうんこというより、孫悟空の乗っている筋斗雲のように見える。あれに乗って飛んでいけたら楽しいと思う一方で、

手摺がないからすぐ落ちそうという現実的な問題が思い浮かんでしまつて少し空しくなつた。浴衣姿のカップルたちを尻目に、自転車走らせろ。墨田区側のテラスを走り抜け、十分もしないうちに目的地の桜橋に着いていた。桜橋はライトアップされ、雅色に光るスカイツリーとよく調和していた。話し込んでいる二人の酔っ払いの姿がいるほかは、誰もいない。

夜の隅田川は黒く、光に照らされた部分が大きな蛇の鱗を思わせ、巨大な生命体の胎動のように感じた。昼間とは違って涼しく、どこか寂し気な雰囲気を感じ出している。絶えることのない川の流れは、不安を一掃掻き立てた。Xの形をしたこの奇妙な橋が昔から好きだった。数日前に行われた隅田川花火大会では、ここから花火を見ようと楽しみにしていたが、付近が花火の打ち上げ場所になるために入ることができず、他の観光客と一緒に、少し離れた南千住の土手から花火を見た。家は隅田川の近くだが、窓が花火とは反対方向にあるため、外へ行かなければ花火が見えない。出不精な父と母は、コロナ前からあまり花火を見ようとほしなかった。僕だけは花火を毎年楽しみにしていて、コロナによる規制が緩和された今年は間近で見ようと思つていただけに、通行規制で出鼻をくじかれた気分だった。

家に帰ると、両親がテレビを見ていた。もうニュースの時間だ。テレビでは環境活動家たちがデモをしている様子が映し出されている。政治家は何も動こうとしないから、私たちが動くしかないんです、と活動家がインタビュアーに答えている。「おかえり、勉強も大変だが、無理しないようにな。

模試も近いんだし」

「ありがたい。いい成績取れるように頑張るよ」

「こうちゃんお帰り。晩御飯できてるよ」

「ありがたい。いつもありがとね」

両親との会話も、どことなくぎこちない。祖父の死で泣けなかったことに気付いてから、自分は自分が正しい行動をできているかどうか常に不安になってしまった。両親が自分に求める良い子を演じないと、自分が自分で無くなるような気になっていた。別に勉強だって好きでやっているわけじゃない。いい成績を取ると親が喜ぶ。それだけだ。その方が楽だし、実際勉強することは正しいことだろう。いずれは何かを選択するときに来るのだろう。だが今は、自分の人生の傍観者にさえなれば、物事はスムーズに進んでいく。いい中学へ行けばいい高校へ行けて、いい大学へ行けて、選択肢が増える。それはそうなんだろう。だけど、どこか空虚だ。正しいが、どこか間違っている。ありふれた悲劇だ。だがありふれた悲劇が、もっとも苦痛であるような気がする。次のニュースに切り替わる。隣の区の再開発のニュースで、飲み屋街を壊して、新しい複合施設を作るそうだ。完成は三年後で、テレビには下町に暮らす住人たちが、飲み屋街がなくなることを嘆く様子が映し出された。

「子どものころからここで暮らしましたからね。そりゃ名残惜しいですよ。この飲み屋にはいっぱい思い出がありますからね。仲間と騒いで、ママに怒られたり、名前も知らないやつと一晩中カラオケしたりね。うん、そうですね、やっぱり寂しくなるなあって感じがしますね」

年配の男性が涙ぐみながら答える。

「へー三年後か。まだまだ先ねえ」

「近しいカフェとかできると助かるけどな。ブランドばっかじゃ退屈だし」

二人は新しくできる施設の方に夢中のような。僕はごちそうさまと言って、リビングを後にする。

もし自分が死ぬときに、走馬灯が流れるなら映画館で見たい。自分の幼少期からの映像を、大きな映画館でぼつんと一人眺めてみたいと前から思っていた。その日は珍しく夢を見た。僕は映画館にいた。父とよく行く映画館だ。スクリーンにはきのこ雲と泣き叫ぶ人の映像が映し出された。文字も映し出されたが、英語ではない外国の文字で読めない。次にビーチで遊ぶ家族の映像が映し出された。父親は砂の中に埋められており、男の子と女の子が砂場でお城を作っている。母親はぼーっと空を見つめている。再び映像が切り替わった。今度はアニメーションだった。人が大きな花瓶に追いかけられている。花瓶には手と足が生えており、人間を捕まえようと悪戦苦闘している。家の中で走り回っているようで、大きさを考えると人間は小人のようだ。階段のステップを滑る小人を追いかける花瓶。最後は曲がり角で待ち構えていた小人にハンマーで割られてしまう。腹を抱えて笑う小人。徐々に他の小人が集まってきて、花瓶を粉々に砕いて去っていった。一分程度、花瓶の破片だけの映像が流れる。すると映像が切り替わり、数字の3が大きく画面に映し出された。2、1と変わり、STARTの文字が出た瞬間、映画館はまばゆい光に包まれた。

次の日、塾が休みだったので、僕は自転車に乗って台東区立図書館へ向かった。近くにも図書館はあるが、ここが一番広くて、蔵書数も多い。夏期講習にはもう行ってない。前から苦手だったし、理科の塾講師が嫌な奴で、前から行きたくなくなっていた。行けるところに行けばいいやと、楽観的な気持ちになつてた。夏休みの図書館はクーラーがよく効いていて、意外と大人の方が多い。いつもは本を借りて家で読んでいたが、最近は図書館内で読み切ってしまうことのほうが多い。無料で快適な場所の本を読める場所というのは、意外と少ない。図書館では、前から読み進めていた、宮沢賢治の全集を読んだ。一から順にはなく、ランダムに巻を選んで、途中まで読んで棚に戻すのが習慣になつている。気に入った作品があればメモをして、家に帰って青空文庫で読み返す。いい本は長い時間かけて読みたい。いい本だけをゆつくりと一人で読む時間があるだけで、楽しい生活が送れるんじゃないかと思うが、勉強もしなくちゃいけない。ふと将来、自分は大きく道を踏み外してしまうのではないかと気がしてきた。しかし道を踏み外した先にも道があるのだ。賢治の歩んだ道は、どんな道だったろう。夏という季節は、いろんなことを僕に考えさせる。

帰りに小学校のあたりの公園を通ると、あいつらがいいた。ユニフォームを着ていて、どうやら野球の帰りみたいだ。自転車を脇に停めて、対峙する。あいつらの一人がゲラゲラ笑いながら話しかけてきた。「豚じゃん、何か用か。それとも野球したかったか？ ポール役だったら入れてやってもいいぜ」

「もうやめようぜ、こんなこと。お互いストレスが

たまるだけだ。別に僕のことをどう思おうといいけど、そう突っかかってこられるとこっちゃだ。いい気がしないのは分かるよね。確かに僕は太ってるし、前に君たちの家が貧乏だってバカにしたことも謝る。別に仲直りしなくたっていい。ただ、もうそんなことは止めよう。僕も君たちにはもう関わらない。六年生なんだし、大人になろうよ」

僕なりに真摯に言ったつもりだった。しかし、あいつらは何も構わず、馬鹿にしたような笑いを浮かべるだけだ。

「悪いんだけどさあ。豚の言葉わかんないんだよな。え。そういう昨日、ミミズ投げつけてきたよね。立派なきぶつそんな罪とめいよきそん罪だから。人間だったら刑務所だけど、お前は豚だからこれで済ましてやるよ」

「よっ！ 名ピッチャー！」

「俺にもやらして！」

何人かがボールを投げつけてくる。軟式とはいえ、ボールは確かな重みをもって僕の体に直撃してくる。こちらも反撃しなければ。当たったボールを投げ返す。が、コントロールがうまくいかず、当たらない。「おい、こいつ投げ返してきたぞ。反撃しろ！」

を見て、すばやく振り返ってあいつらの方へ突進した。あいつらの一人にぶつかり、アスファルトの上に倒れこむ。

「おいどけ、豚、どけよ」

突進した理由はそいつを転がすためじゃない。本当の目的は、地面に落ちたバットの方だ。僕は落ちていたバットを右手に取って上に掲げる。

「おい、やめろ。洒落になんねえって。分かった。謝る、謝るから」

勢いよくバットを振り下ろす。鉄とアスファルトがぶつかる音が炎天下にこだました。そこにいた全員の動きが数秒止まった。バットはそいつの頭のちょうど真横にぶつかった。そいつは恐怖で顔を歪ませ、その上失禁してしまったようだ。ズボンがおしっこでジワリと濡れる。

「お前のせいだ、お前のせいで恥かいた。くそが。死ぬ」

一瞬のことで頭が追いつかなかった。いつのまにかそいつが金属バットをこちらに向かって振り下ろしてきた。僕は何とか直撃は避けたが、肩に先端が当たった。

「おい！ 豚を押さえろ！ これはめいよきそん罪だ。罰をくらわす」

さっきまで笑っていた連中が、今度は手のひらを返して僕を捕まえようとする。逃げようとしたがすぐに追いつかれ。地面に押さえつけられた。両手と両足を押さえつけられ、身動きが取れない。

「もういいだろ。お互い嫌な思いしたんだし、これで終わりにしようぜ」

僕は言う。しかし耳を傾ける気はないようだ。

「一人十発こいつを殴れ、まず俺からだ」

そいつの拳が僕の腹にめりこむ。痛み慣れる間もなく、二発目、三発目が打たれる。たまらず嗚咽する。僕はそいつをきつとにらみつけて、顔に向かって唾を吐いた。つばは見事命中し、激高したそいつの血管が切れた音がした。

「何度でも言うぞ。一人じゃ何もできないお前たちの方が豚野郎だ」

そこから先は一方的なリンチだった。なすすべもなく僕はやられ、敗北という二文字を殴られることに実感していった。

人間の本性は悪だ。炎天下のアスファルトに倒れながら、僕はそんなことを思った。目の前で、カマキリの死体にアリが群がっている。殴られた痛みが

残響のように体中に広がる。アスファルトが僕を焦がそうとしている。人間の本性は悪だ。だが今日、僕は悪に勝った。負けたが、勝ったのだ。痛みに耐え、何とか起き上がってベンチまで歩く。

「派手にやられたなあ。坊主」

という声の後ろから聞こえてきた。振り返ると、以前会ったホームレスのおじさんが立っていた。確か、ハセさんとかいっていた。

「止めようとしたんだけどよ、お前が止めてほしくなさそうだったから黙って見てたんだよ。にしても坊主、いいところのお坊ちゃんかと思ったら、意外と肝っ玉すわってるじゃねえか、ええ？」

「べつに、僕は度胸はないです。だけど、正しいことがしたかったから」

おじさんは缶ビールを飲みながら言う。

「大人になると、それが案外難しいんだよ」

ハセさんは隣に座ると、持っていた大きめのバッグから絆創膏と消毒液を取り出した。

「さっきコンビニで買ってきたんだ。早く消毒しねえと菌が入ってくるからな」

傷口に消毒液が染みる。奥歯を強く噛んで痛みに耐える。ハセさんはティッシュで消毒液をふいて、絆創膏を貼ってくれた。

「すいません、ありがとうございます。その、お金とか」

「気にすんな。若いやつのためだったら、これくらい世話ねえよ」

「でもお金とか、その、生活とか大変じゃないんですか」

おずおずと僕は聞く。

「まあな、でもこれくらいならわけねえよ。年金ももらったばかりだしな。あ、お前もしかして俺のこのホームレスだと思ってるのか？」

「違うんですか？」

僕は驚いて目を丸くした。てっきりホームレスとばかり思っていた。

「まあ、似たようなもんだけどな。俺は今、山谷の方で暮らしてんだ。そりやお世辞にもいい暮らししてねえよ。だけどダチはいるし、酒だって毎日飲む。医者からは止めるようさん言われてんだけどな」

ハセさんは笑った。親や教師以外で、大人とこまで話すのは初めてのことだった。

「ハセさんって、いつもこの公園に来てるんですか？」

「よく俺の名前なんか覚えてるな。そうだよ、長谷川一郎ってんだ。坊主は？」

「橋本光一です。光に漢数字の「一」で光一です」

「いい名前だな。そうだな、最近暑いからあんまり来ねえな。来ても夕方だな」

頭を掻きながら言う。

「じゃあ、たまに僕もこの公園に来るので、またお喋りしてくれませんか」

「おお、いいとも。俺は一日中暇なんだ。いつでも話相手になるよ」

知らない人間にはついてはいけなさと教わったが、この人の言葉には、人を信頼させる不思議な温かさがあつた。普通に生活していたらまず合わない種類の人の思いがけない優しさに心打たれたというところもある。空を見ると、橙色と紺色が綺麗な

グラデーションを作っていた。黄昏時の空を見るのが、一日の中で一番好きな時間だ。いつもは邪魔に思える電線も、この空を引き立てる名脇役になる。ハセさんと別れて、水彩画のような空を見ながら、いつもよりスピードを出してペダルを漕いだ。両親と祖母には自転車に乗って転んだとだけ伝えた。心配していたが、深くは追及してこなかった。その日の風呂は、いつもより熱いような気がした。

その後、僕は夏休みの間、度々ハセさんのいる公園へ遊びに行った。二人で予定を合わせて、公園のベンチで落ち合う。ハセさんはスマホを持っておらず、しかも遅刻魔なので、僕の方はよく待たされた。ハセさんには祖父のことやあいつらのこと、受験のこと、クラスの好きな子の話など、親に話せないことも、自然と相談できた。逆にハセさんはあまり自分のことは話さない。きつと言いたくないことが多いんだらう。特に家族のことはあまり教えてくれない。よく酔って、俺が悪かったんだよ、とだけ呟く。それと関係があるかは分からないが、ハセさんが袖をまくった時に、腕から少しだけ刺青が見えた。ハセさんはヤクザなんだろうか。流石に本人には聞けなかった。だが少なくとも僕には優しくしてくれる。塾が休みの日はよく釣りに隅田川へ出かけた。滅多に釣れないが、ただ話すだけでも退屈なので、いい暇つぶしになっている。釣りをするのはたいい橋の下だ。今年の夏は暑すぎて、夕方でも日差しが強い。僕は橋の下で暮らしている人に配慮して、うるさくしない程度にお喋りする。

「ハセさん。ミミズなんてどうするの。まさか食べるの？」

「馬鹿。俺じゃない。魚が食うんだ」

おじさんはそういうとバックからミミズを一匹取り出して、手際よく釣り針に刺した。透明のバックの中には数十匹のミミズが蠢いていて、見た瞬間鳥肌が立った。正直生きたミミズはあまり触りたくはない。

「早く取んな」

ミミズが蠢くバックを僕の方に差し出す。僕は、自分で取ってくと誤魔化して、橋の下から日向へ飛び出した。夏の光に目が眩んだ。正直触るのはためらわれた。映画で見た地球外生命体のようだ。カブトムシやクワガタと違って、角も足もなく、ただひたすらグロテスクだ。下を向きながら虫を探していると、アスファルトの上でミミズが干からびて死んでいた。生きてウニヨウニョと動くやつより、死んでいる個体の方がまだ抵抗感は少ない。ブヨブヨした赤茶色の物体に触れる。意外と堅い。ふと顔を上げると、ぶくぶくと肥った入道雲が僕を見下ろしていた。ミミズの水分を全て吸い取ったみたいだ。風に流されて揺蕩う巨大な白い物体と、どこまでも続く青空に、少し憂鬱な気分させられる。小学生の頃、入道雲に食べられるんじゃないかと不安で、よく泣いていたことを思い出した。よくみると、この道だけで数匹のミミズが死んでいる。彼らはなぜ安住の地である土や草むらを抜け出して、アスファルトの上で死ぬのだろうか。

橋の下に戻ると、おじさんは煙草を吸いながら釣りをしていた。

「おじさん、これ」

「ああ、なんだお前、死んだやつばかりじゃないか」

「生き返らない？」

「どうだろうな、水に浸しときゃ生き返るやつもあるが、こいつらはダメだな」

「餌にならない？」

「ないよりはマシだ。生きてるやつが嫌ならそれでいい。ほらお前も釣り針につけろ」

ミミズを釣り針につけて、おじさんの真似をして川に垂らす。橋の下は暗く、両側のキラキラ光る水面と対照的だった。時折吹く風が涼しく、少しひんやりしている。十分ほど経ったが、二人とも一向に釣れない。たまにおじさんの糸が引っかかるが、ミミズだけ食われて魚がかかることはない。

「これ面白い？」

「ほんの十分そこらじゃ釣りの良さはわかんねえよ。黙って糸を垂らしてればいい。じきに分かる」

おじさんは水面を見つめながら言う。水は濁り、生き物がいるのかも判別できない。いくら川とはいえ、ここに魚がいるのかということがそもそも信じられない。

「ハセさん、人間って死んだらどうなるのかな」

釣り糸を垂らしてただけで暇なので、話しかける。

「前にも言ったろ、三途の川を渡って、冥土に行くだけだよ」

「冥土ってどんなところ？ 地獄みたいなのところ？」

「知らねえ。行ったことねえからな。だけど俺は人間それぞれ行くべきタイミングってのがあると思う

ぞ。お前のじいさんや、俺の親父やお袋は、時期が来たから死んだんだ。悲しいけどそういうもんならだろ」

「ふうん」

おじさんは返事をしない。ただ手を少し振って、水面を見つめている。

「お前は早く冥土に行きたいのか？」

「よく分かんない。最近もしかしたら僕たちがいるここが地獄なんじゃないかなって思うんだ。冥土がひどいところなのかは分かんないけど、最近読んだ本で、天国も地獄もなくて、この世界しかないって書いてあったんだ。おじさんはどう思う？」

ハセさんは頭を掻きながら

「俺にそんな難しいこと聞くなよ。たぶん俺よりお前の方が本読んでるぜ。図書館行って読んでこいよ」

と答える。僕はさらに続けて質問する。

「ハセさんの意見が聞きたいんだよ」

ハセさんは悩みながら、右手を顎に着けて、《考える人》のようなポーズをとる。うーん、うーんと呻っている。

「そうだなあ。俺はあると思うけどな、死後の世界でもお前の言う通り、天国とか地獄とかはないのかもな。あれは人間が正しく生きるためのたとえ話って感じがするな。それよりもっと、静かで、真っ白な世界なんじゃねえかな。死後の世界なんて考えもしねえが、俺は少なくとも生まれ変わりは信じてるな。俺が死んでもまた違う世界に生まれ変わって、違う人生を歩むんだろうな。うん、そんな気がする」

生まれ変わりについては、その本の中で書いてあった気がするが、すぐに思い出せない。僕も《考える人》のポーズをとる。二人とも釣竿を置いて、考え事をする。

「話は変わるんだけど、ミミズってなんでアスファルトの上で死んでるの?」

「それなら知ってるぞ。ミミズはな、皮膚呼吸だから大雨が降ると土の中でおぼれ死にそうになるから一旦アスファルトの上に避難するんだ。だけど雨が上がって日が差してくるだろ。土は水浸しだし、他に行くところも無くなっちゃう。そうなる今度は逆に皮膚が乾燥して、最後は日に焼かれて死んじゃまうんだよ」

ハセさんは鼻高々に解説して見せる。さっきまで《考える人》だったが、今度は意気揚々としていて、活動家ようだった。

「なんだか可哀想だね、どっちでも生きてけないなんて」

「可哀想だな。だからせめてこうやって釣りの餌にして叩いてんのさ」

それは嘘だろうと思ったが、このミミズの生態は、僕やハセさんの将来を暗示しているような気がして、頭の片隅にずっと存在していた。僕もいつか、あんなふうにならなからびて死んでいくのだからかと思うと、少し怖くなった。そんなことを考えていると、ふとハセさんが消え入りそうな声で呟いた。

「俺も、ミミズみたいなもんだ。どっちでも上手くいかねえ。世の中、苦労ばかりさ。お天道様が眩しすぎていけねえや」

「どういこと?」

ハセさんの方を向いて聞く。

「夜の方がいいってこともある。ずっと朝だと眩しいし暑いだろ。だけど今のやつらは夜も朝にしちまう。夕方もなくしちまう。そりゃ朝の方が安全だし、何かと便利だけどな、全部綺麗にしちまうと生きられないやつもいるんだよな。この川だつて、多少汚いから生き物が住むんだよ。光一。お前は朝と夜どっちが好きだ?」

「僕は、夕方かな。朝と夜の真ん中の境目が、一番空が綺麗なんだ」

そう答えるとハセさんはニヤツと笑った。

「そうかそうか。夕方か。そういう道もあったのかな。じゃあ濡れたり干からびたりすんなよ」

「僕はミミズじゃないよ。でも、分かった」

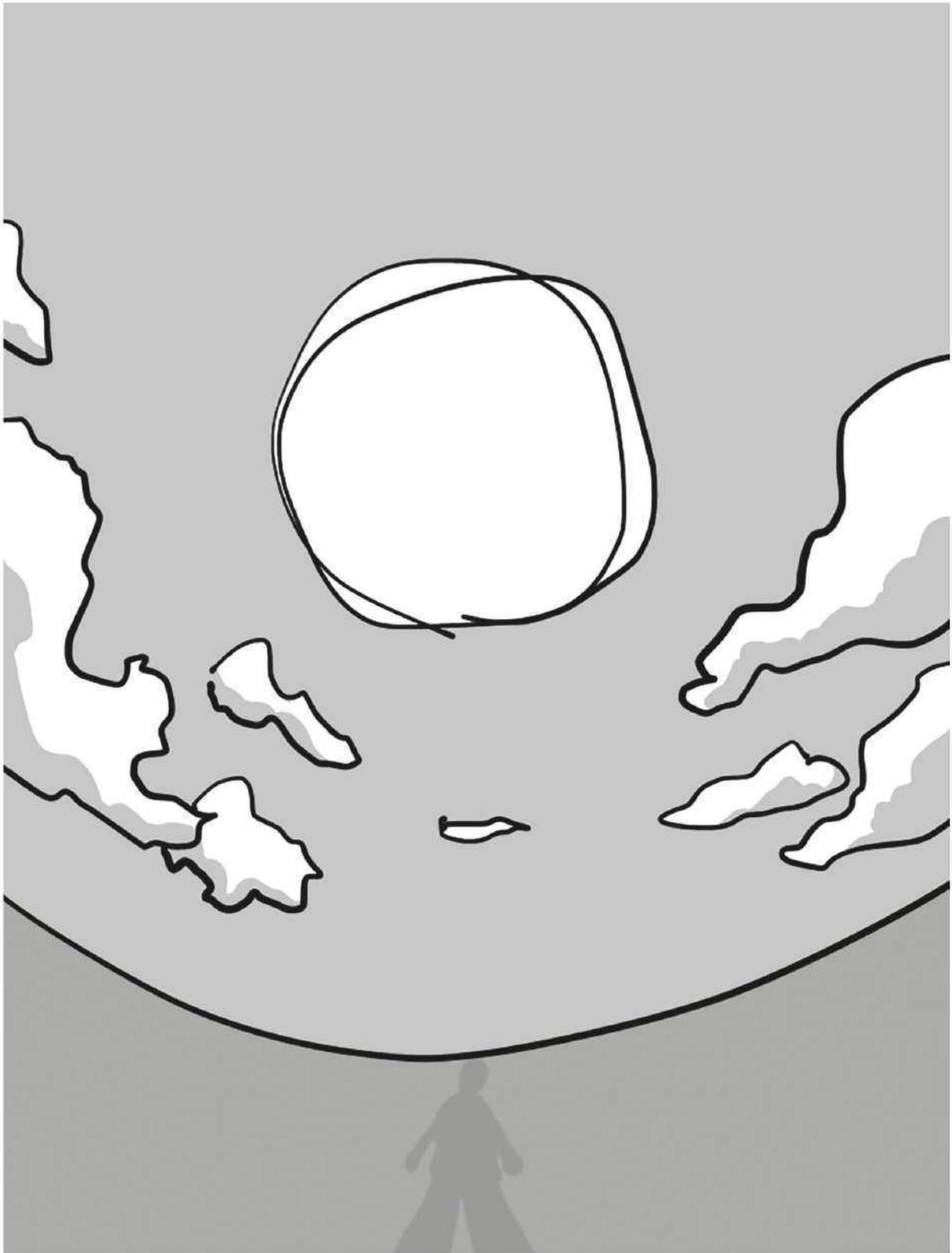
ハセさんは立ち上がって、橋の外へ行くこうとする。どこ行くの、と聞くと、小便、とだけ答えた。

釣りをしてるといふようなことを考える。社会問題だったり、自分の将来だったり、魚のことだったり。今日はずっとミミズのことを考えている。特にアスファルトの上で死んだ干しミミズのことを考えていた。悲壮感の漂った姿だけでなく、さっきのハセさんの話を聞いて、その不器用な生き方が、いや、不器用にならざるを得ない性質が、同情を超えた、共感にも近いものを僕の中に呼び起こした。ふと、自分が涙を流していることに気が付いた。初めての経験で僕自身動揺した。何で泣いているんだらう。祖父の死で泣けない人間が、ミミズで泣くというのは、どう考えても変な話だ。目にゴミが入ったわけでもない。ただ胸のあたりがジンと熱くなり、その熱がどんどん上の方に昇ってきて、目頭が熱くなる。

外の空気は充分熱いはずなのに、自分の内側からくる熱気は、それを上回るものがあった。涙を拭いて、竿を持つ。

「眩しすぎるよなあ」

半年後、僕は第一志望の中学に合格した。祖母も両親もとても喜んでくれた。あいつらは、以前のよう僕をからかってこなくなった。二学期以降も口をきくことはなく、修学旅行でも運動会でも、お互い無視をしていた。卒業式の日、あいつらのうちの一人が、じゃあな、とだけ言ってきた。僕の方も、じゃあな、とだけ返した。ハセさんは、夏休み以降、姿を見せなくなった。連絡手段もなく、探し回っても結局見つからなかった。テラスを走っていたブンちゃんに行方を聞いたが、知らないとのことだった。ハセさんと仲の良かった人たちに話を聞いたが、娘のいる地方都市に行つたとか、密漁をしに北海道へ行つたとか、半グレに殺されたとか、とにかく行方は分からずじまいだった。きつともう会うことはないのでだろうと直感した。ハセさんが朝の光に消えたのか、夜の暗闇に消えたのかは分からない。どこかで溺れ死んでいるのかもしれないし、干からびているのかもしれない。人間の性は悪かもしれない。善かもしれない。どっちつかずの気持ちを抱えながら、いつもより大きい夕焼けを、僕はまっすぐ見つめていた。



第	53	回
輔	仁	会
雑	誌	賞
発	表	

## 準入選

# そよかぜ

## 播磨 未智

Delete..

腰痛になりにくいと巷で噂のゲーミングチェアに座ってパソコンとにらめっこ。一体どれくらいの間が経ったのだろうか。原稿締め切りまで二週間と余裕があるという程ではないが、時間は残されている。話の続きが浮かばず、一度執筆の手を止めて休憩することにした。世間では注目を集めていないが、コアな本好きに何となく名前は知られているくらい作家になってきているつもりだ。数名のファンがついているらしいが、会ったことがあるのは一人しかいない。マネージャーの為本である。

「あなたが作品を書く姿は、華麗なる演舞。そう見えるのです。文章にそれが表れている。」

初めてついたファンにしては癖の強い言葉だったなと思う。華麗なる演舞なんて私自身にも分かったことではない。一体どういう意味だろう。私には密かにファンとして応援させていたでいるダンサーがいる。海外でショーを開いたり、有名歌手のバックダンサーを務めたりするほどの超売れっ子だが、自身のダンスについて聞かれると、ほとんど詳細を明かさない。決して彼女にサービスピ精神がないのではなく、不親切な訳でもない。彼女はダンスのこだわりや踊るときの心構えについて聞かれると必ずこう答えるのだ。

「それを言ってしまったら、あの表情と動きはできなくなってしまう。」

私はその言葉の意味を未だにしっかりと理解できていないが、為本に小説を書く姿を「演舞」と言われ、自分の気持ちについて考える機会が増えた時から、ただ漠然と彼女の言っていることが分かるよう

な気がした。そこに何の根拠もないが。

私が書く文章は、読者の脳内で好き勝手演舞するらしい。目的なく歩んできた作家人生、ただ私は密かに書きたいものを好きなように書いてきたつもりだった。でもこれまで書いてきた文章は編集・出版などの作業にとどまらず、たくさんの人の目に触れ、そして読者の心の中で演劇を開演してきた。「華麗なる演舞」と言われたあの日、その言葉の真意をつかむことはできなかったが、私は自分の知らないところで嵐が訪れていたのだと悟った。有名作家が表彰されるのをテレビで何度も見た。かたや良くてノミネート止まりの自分。密かな情熱が私の文章にあらわれていたのだ。いつの間にか称号や名誉を欲して、自分の書きたいものではなく、選ばれるためのものを書いてきた。好きなものへの情熱は空回りして嵐になった。そして嵐は読者や編集者を巻き込み、独りよがりな芝居を繰り広げた。演舞ではない、大根役者の芝居である。マネージャーもいて、いつも協力してくれる編集者もいて、こんなにも恵まれた環境にいるにも関わらず私は何一つ成し遂げられていない。世間に選んでもらうために書いたのだから、それなりに結果は残せるだろうと心のどこかで思っていた。結果は言わずとも分かるだろう。多少、名が知れたくらいで実質無名なのだ。そんな肩書きが私にはよく似合う。無名とは属性だろうか。本当は分かっている。世間に「無名」というカテゴリーの作家などいない。そもそも知られていないのだから。自分が傷つかないように、何かに属して群れでいただけのことだ。幼い頃から周囲の人間には「おとなしくて良い子」と言われて生きてきた。その言葉

は誉め言葉だっと思っておきたい。そう思わないとやってられない。それしか私には取り柄がないのだ。それが本来の自分ではない、偽りの私だったとしても。幼い頃から芝居は始まっていたのだと、今思い返せばすぐに分かる。そう、こんなにも簡単なことなのに。若かった私には気づけなかったのだ。「良い子」でいれば、逆らわずに何かに従って生きてさえいれば、誰にとっても敵にはならない。それが私にとって何より幸せなことだと思っていた。昔から多くを語らない性格が災いして友人という友人はできず、図書室を頻繁に利用する人だけ顔見知りになる程度だった。そのくせ、ネガティブな性格が人の視線を気にさせる悪魔を呼び寄せた。一人になるのは嫌いだ。それなのに他人の目が自分に向けられるのも嫌った。「見てほしい、それなのに見てほしくない」その心の迷いが文章に出てしまっているのだらう。もう今書いている小説すら、書き上げられる自信がない。

締め切りまであと一週間だ。久しぶりに例のダンサーが日本で公演をするというので、劇場に足を運んだ。ここ最近はずが良く、チケットが当たった。この運を作家としての自分が引き当てられたら良いのに、などと思ってしまう自分が恐ろしい。後ろの隅の方で鑑賞していたところまではいつも通りだったが、ダンサーのひと言が状況を一変させた。

「たまにはフリートークでもしましょうか。あ、いつも見に来てくださっている方ですね。後ろから二列目端の黒い帽子の方。」

刹那、多くの目が一齐に私に向けられた。好奇の目、

羨望の眼差し、怪訝な顔……。様々な表情が覆い被さってくる。ああ、恐ろしい。ああ、あのダンサーには気づかれていたのか。何か返事をしなくては。

「あ、はい……」

気の利いた愛想の良い返事もできず、自己嫌悪に陥る。もはや、良い人でさえないではないか。

「私を知ってくださいませんか？」

「十七、八年前に雑誌の取材記事を読んだ。「ゼロからイチを生み出す」というタイトルの記事で、ダンスと向き合う姿勢と心構えのお話に感動しました……。」

「なんと、そんなに前から見てくださっていたんですか。ありがとうございます。まだ私が駆け出しの頃の記事ですから、かなり初期ですね。その時の雑誌を見てくださっていたとは。」

「職業柄、雑誌をよく読んでいたので。」

有名ダンサーに認知されていたという事実が、気づかぬうちに私の気持ちを高ぶらせたのであろう。職業柄だなんて、私は何を言っているんだ。そう思ったときにはもう遅かった。

「へえ、ご職業は編集者さん何かですか。」

興味津々な彼女に問われる。

「あ、まあそんなところですよ……。」

いいえ、実は作家です。そう言える勇気が私にはなかった。そのあとは何を話したのか覚えていない。気づいたら自室にいて、パソコンの電源もつけずにただゲーミングチェアに座っていた。しかし、「職業柄」と発したあの瞬間までのやり取りが永遠に頭の中で繰り返し返されていた。彼女にとって、ダンサーとは職業なのだろうか。各個人の解釈は多少あれど、

演目中の彼女は観客にとって一人のキャラクターになる。彼女はたとえ演舞しても、演目が終わればありのままの彼女に戻ることができるのだ。対して私の小説はどうか。確立しないキャラクターが複数存在し、読者を一つの作品世界ではなくバラバラの場所に突き飛ばしているではないか。彼女には彼女の世界観があるが、私には読者を引き寄せる世界観がない。欲張りにも、望んだ理想の形を全て一つの作品に集約しようとした。それが作品世界を汚していたのか。書き直そう。今からでも間に合うはずだ。締め切り前日、ようやく作品を書き終えた。つい先日まで書いていたものから内容もキャラクターも大幅に変更した。でも最大の変更点は私の名前だ。私は「無名」になった。何、初めから無名だったのだろうか？そう思うだろうが、違う。ペンネームを「無名」にしたのだ。本名で何作も出版してきた。今作が作家としての新たな作品になることを確信して、今の名前についた不名誉なイメージが払拭され、一人の作家として再生することを祈って私は無名になった。

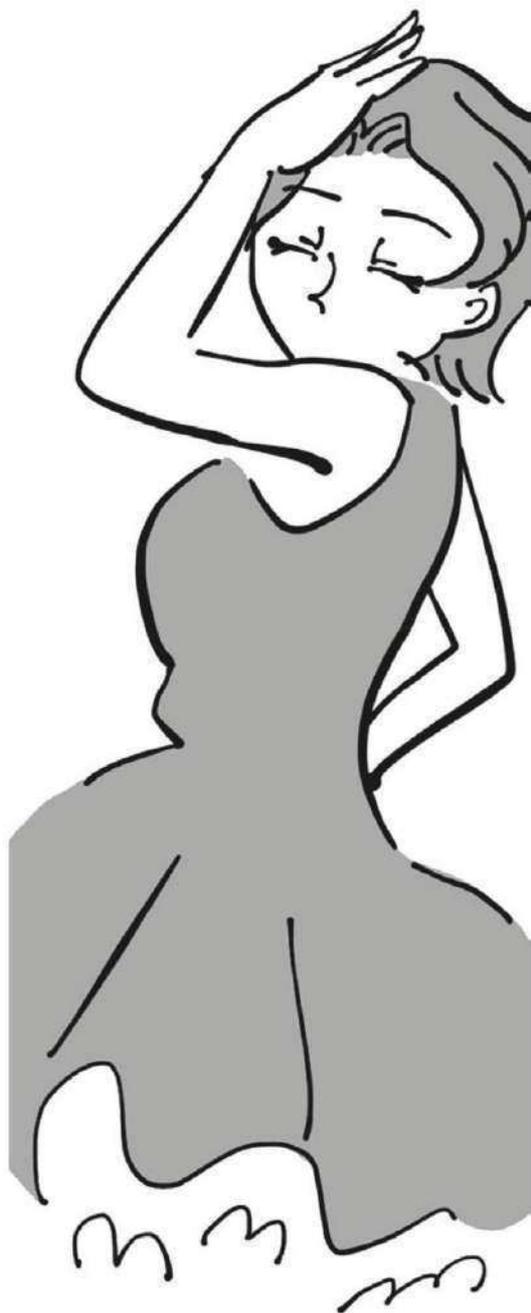
「先生、以前出していた作品がノミネートされました！」

為本が心底嬉しそうに報告してきたが、私は思っていたよりも冷静だった。ただひと言、

「そうか。」

と答えたただけだったような気がする。喜びよりも安心が勝っていたのだと思う。

「今回の賞候補者にはインタビュ어도行う予定とのこと。念のため確認ですが、雑誌のインタビュー



「は受けていただけますか？」

「ああ。受けるよ。」

「承知いたしました。依頼者に承諾のメールを送信しておきますね。事前に質問書が送られてくる予定ですので、届いたら確認をお願いします。」

「分かった。ありがとうございます。」

本名の時にも受けたことがなかったインタビューが、まさか無名になって初めての仕事になるとは思っていなかった。これも変化の片鱗なのだろうか。数日後には質問書が送られてきて、インタビュー当日を

あつという間に迎えた。質問書には比較的当たり障りないような質問が羅列されていた。

「無名さんが作品を書くときに念頭に置いていることはありますか？」

：「一つだけインタビュー当日まで回答をまとめられなかった質問。」

「この質問はちょっと難しいですね。まとまった答えではないかもしれませんが、私は感情に左右されやすいタイプだと自分で思っています。それが良い方向というよりは悪い方向にはたらくことの方

が多いんですね。具体的に述べてしまうと今後の作品に影響するかもしれないし、感情を表にしたことで表現しにくくなることもあると思うので、詳しい回答は差し控えさせてください。ただ文章と向き合う時、本当に様々な感情が生まれるのは事実です。それにはできるだけ振り回されないようにしています。現実でも同じというか。様々な視線に触れるし、良いことも悪いことも色々な思いに取りつかれるというか。そういう意味ではブレない軸、あるいは芯のようなものが自分の中にあるのかもしれないで

す。」

良いことを言ったように聞こえるかもしれないが、何となく語ったことが本心ではないような気がしていた。私は自分の中に軸を持っているのではなく、既に感情の波に支配されていて、むしろその感情たちの中心<sup>（？）</sup>にいる。台風の目のように。感情がごちゃ混ぜになった作品を出版し、読者を巻き込んできた。これではまるで、自分が世界の中心にいるようになってきているが、そうではないと最近思うようになってきた。二時間ほど自分について語ったはずのインタビュアーの記事が、実際の雑誌では右端に三〇〇字でまとめられ、他業種の人の記事と共に一ページでまとめられていた。伝えたかったことの全ては、そこに書かれていない。人は思うほど他人から注目なんてされていなくて、それでも人の目を気にして、だからこそ何かに属して自分の身を守ろうとする。自分のことに精一杯だからこそ、その様々な目を誰かに向きたいと思ってしまう。私は無名になって、このことに気づいた。私が本名のまま活動しようが無名になるのが、世間の大半はそのことを知らないし気にしていない。作家としての私の視野はあまりにも狭かった。もし、私が今回無名として大賞を受賞できていたら、思うことは全く違ったのかもしれないが。

自分の身の丈に合ったことばかりで何一つ抜けたところもなかった、言葉通り平凡な学生時代か、何か一つでもズバ抜けてやろうと足掻いた結果、中途半端になったこれまでの社会人生活か。きつと私にとっては何れも完全な正解・成功ではない。では私は何になりたいというのだろうか。

あれからしばらく考えた。何になりたかったのか。私は、風になりたかったのかもしれない。降り始めの雨には気づかない人もいるだろうが、風は吹き始めれば、それがたとえそよかぜであったとしても万人の頬を等しく撫で、その存在を示すだろう。読者の中で好き勝手に暴れる嵐など、お呼びではないのだ。これも私の価値観でしかないが。万人の頬を等しく撫でるそよかぜは、自分勝手に動けるのだろうか。結局私は選ばれただけなのか、評価されただけなのか。またこんなことを考えていたら一日経ってしまった。迷いの渦に飲み込まれ、たった数行しか進まなかった原稿をぼんやりと眺める。無名としての二作目：何だか納得がいかない。作家と名乗るにしても、もはや他の作家に申し訳ない。続きの執筆はまた明日といたところか。そう言ってみても同じことを繰り返すのだろうか。

Delete: 負のループに陥った私に書けるものなど一つも一文字もない。こうして自分語りをするために、小説を書く合間に記す日記の方がよっぽど私らしい演舞だ。今書いているデータなど、全て消してしまおうか。いっその日記を出した方が、注目を集められるのかも知れない。ああ、また誰かに見てもらいたがっている。何の成長もない私は空しい作家だ。この日記を拾って読んでくれたあなたに（もしいるのなら）、無名二作目を預けてみようか。そんなことまで考えてしまう。言葉だけは、用紙とペンだけは、手放さないようにしないと。日記というのを理由に、好き勝手自分語りをしてしまったし、印象に残った会話に関してはそのまま書いてしまっ

た。読みにくかったかもしれない。文章を書く者として失格だ。私は次作に手をつける前に、自分を見つけた方が良さのかもしれない。自分を見失った状態で作品に手をつけたら、また嵐を生み出してしまう。途方もない旅になりそうだが、しばらく自分の内面を探しに行こうと思う。二作目はそれからしよう。未来ある作家たちへ敬意を込めて。

Epoc:

近所にある市役所前の掲示板の隅に一枚のポスターが貼られていた。

「探しています 行方不明当時の特徴 四十代男性 身長一七三センチ 水色のシャツに黒地のネクタイ 黒色のズボン……」

届け出を出してから半年が経とうとしている。彼はどこへ行ってしまったのだろうか。彼の順風満帆とは決して言えないキャリアを間近で見ていた人間として、最近考えることがある。世の中にとって、成功だけが全てなのか。失敗や落胆は悪なのか、何ももたらさないゼロなのか。私は世の中から見たら彼の知人で、小説家のマネージャーではなかった。彼が小説家ではなく、中年男性と言われたように。彼の日記を拾ったが、そのまま書斎の本棚にしまった。あの記録を彼の遺作にしてしまったら、これまで彼が積み重ねてきたものを崩してしまおうような気がする。言葉が表現するのはあくまで事実の一部でしかない。このことは決して間違いではない。言葉がごく一部しか私たちに語らないこと、それは良い意味ではたらくこともあるし、悪い意味で作用する

こともある。小説家というのは本当に難しいものだと思う。言葉の心を読むというべきか、文章の語り聴くというべきか。これだけ彼の近くにいなながら、私が彼の内面に気づけなかったように、言葉は時に同じ世界に生きる人間を別々の時間軸に連れて行くのかもしれない。人間は言葉で何かを紡ぐ度に枝分かれしているとも言えるのだろうか。だとしたら、小説家である彼は…。

彼はこの世のどこかにいるはずだ。彼を探すのを諦めるということは、彼のこれまでの作品を殺すということだ。この日記の中を生きる彼自身の記録も含めて。彼が書き上げた作品たちは、彼的にはイチこそ生み出せていないのかもしれないが、その積み重ねは決してゼロではない。作品は彼のもとから離れて世界へと歩みを進めているとしても、その原点は大木の幹である彼に間違いなくつながっている。私が彼の作品に出会い、マネージャーになれたように。今日も私は彼を探しに行く。

「無名先生、二作目を書く時が来ましたよ。」  
彼があの日記のはじめに記した言葉の意味を、私はやっと理解できたのかもしれない。

#### Diary

また一人、生まれた。手元に用紙とペンさえあれば、私は様々な形になって生まれてくるらしい。小説、(一人芝居)演劇の脚本、モノクロ画、時には建物の構想図。私の内面や人格はあらゆる場面で現れる。それが独り歩きしていくのを、私はそっと見守っている。そんな人生である。いつか独り歩きしている私のどれか一つでもいいから、この世の誰かの心に

出会えたら良いのに。

#### 【あとがき】

今回の小説では、主人公からすると「社会的に有名」であるダンサーの歩みと、主人公自身の歩みが重なりつつあるということを暗示し、「ゼロからイチを生み出す」というテーマで書いた。主人公のペンネームを「無名」にしたのも、ダンサーの現在を「有名」(イチ)としたためである。文章は全体を通して主人公が書いた日記という設定であり、終盤からマネージャーの為本の視点に変わっている。状況説明的な文が多いのは、日記を主軸としているためである。主人公は日記を書いている段階では気づいていないが、自身が憧れて応援しているダンサーと同じようにインタビュアーを受け、言い方は違えど表現のこだわりについてダンサーとかなり似たような回答をしている。日記を読んだ為本はその事実に基づき、主人公が自分探しの旅の中で自身の内面を再発見して作家として戻ってきてくれることを信じている。主人公の作家としての歩みは、為本が言うように確実にイチへと近づいている。人生において様々な経験や思いが溢れかえり、今やっていることが将来的には何も意味をなさないのではないかと苦悩することが誰でもあると思う。一見すると「成功と失敗」「可か不可」など、結果は二つしかないように思えるかもしれないが、取り組んだことはゼロにはならないし積み重ねていけば新しいイチを生み出すことができる。そのイチは自分の新たな一面を知ることかもしれないし、社会を変える何かを生み出すことかもしれない。この作品がゼロからイチを

生み出すこと、そして自分の人生について考えるきっかけになってくれたら嬉しい。



第	輔	雜	發
53	仁	誌	表
回	会	賞	

## 佳作

THE DAYS at UG  
M3473

容易く消え去った卒業式に、見通しの立たない入  
学式。2000年もとうとう20年代に突入した2  
020年。華々しくスタートを切るはずだった亀海  
歩の大学生活は、コロナ禍という未曾有の事態に挨  
拶をされながら難破船もかくやといった風に始まっ  
た。

いや、始まったと言っているのか、コレ？

中学時代から憧れていた念願の個人用ノートパソ  
コンの画面をにらむ。オンデマンド授業に遠隔講義  
数カ月前までは想像もつかなかった授業形態にもす  
っかりなれてしまった。ずっと家で使うならデスク  
トップパソコンで十分だ。家を出る経験もないまま  
日々寿命を削られていくパソコンには憐れみを覚え  
る。無機物に憐れみを覚えるのは、きつと自分の現  
状を客観視したくないからだ。

大学に行くこともなく家に籠りきり。個人主義が  
主流とはいえ、同じ学科の人間の顔さえ知らないま  
ま終わりを迎えた前期。代わりに、ニュースでは連  
日コロナに関連した報道が取り上げられ、人の良さ  
そうなおじさんや危機感を体現している知事の映像  
が流れ込む。以前は他県の知事なんてほとんど知ら  
なかつたのに、急に顔見知りになった気分だ。

家の外はすっかり夏模様。人の代わりにセミが街  
を賑わわせている。街から人が消える、そんな嘘み  
たいな現実がここに広がっている。数年前に指パツ  
チンで人類が半分消えた映画を観た時の衝撃に似て  
いる。人類は今も健在だけれど、歩にとつての世界  
人口は同居する家族と画面の向こうの人々だけだ。  
いや、直接関わっているわけでもないし、生きてい

ると実感できるのは同居家族くらいだ。

直接会話がなくなったって、今までは学校に通うだけ  
で世界の一端を感じられた。通学途中の電車の中の  
人々だとか、学校の生徒たちや先生。バイトは校則  
で禁止されていたから、部活に明け暮れて。家と学  
校の往復、そんな狭い世界で生きてきた。大学生に  
なればそんな世界も広がるのだろうと思っていた。  
今は、家だけが歩にとつての世界だ。

「夏休みだからといって行動を変えないように、  
ね」

テレビから流れる言葉を繰り返す。アナウンサー  
に知事に有識者。口を揃えて唱えられるその言葉は  
数週間で耳にたこができるほど聞いた。

何度も言われなくてもわかっている。わかってい  
なくても、思い知らされる。出歩くにはマスクが欠  
かせず、忘れようものなら入店さえままならない。  
そもそも買物一つとつたって、不要不急という言葉  
葉に振り回される。それが休みの季節を迎えたから  
と変わるものか。

「受験が終わったら会いに行くって言ったのにな」  
大学入試は無事に終わり、羽を伸ばせると喜んで  
矢先に世界は変わってしまった。友人たちと計画し  
ていた卒業旅行も流れた。ロックダウンという形に  
こそならなかったものの、受験で一年以上見送って  
いた両親の実家への帰省は、結局叶っていない。

「健康診断のお知らせ？」

12年間繰り返してきたはずの行事がやけに懐か  
しく聞こえる。実行されない架空のスケジュールと  
成り果てた昨年度発表の年間行事予定では、春先に

予定されていたはずだ。入学式もしていないのに今更なんで、という思いと、ようやく大学に行けると  
いう思いが混じり合う。楽しみと、不安と、期待と、  
緊張と。ぐにやぐにやと形を描かないままの感情の  
マープリングは、歩自身にも本心を悟らせなかった。  
あるいは、すべてが本音なのかもしれない。

かくして、5ヶ月遅れで足を踏み入れることとな  
ったキャンパスは、隠しきれない緊張を孕みつつ、  
微かに賑やかさを取り戻していた。

一緒に健康診断を受ける人たちの何人かは同じ学  
科だった。それでも会話をするほど親しくもなく、  
新たに関係を築こうとするには重い空気だった。盛  
り上がることもなく淡々と健康診断は進み、歩は  
久々に目にした己の体重の変化に戦った。生活リズ  
ムを健全な形に直し、三食きちんと食べた方がよさ  
そうだった。大学の健康診断の結果は親に確認してら  
う必要がないので気が楽だ。今まで通りだったなら、  
心配性の母親に嘆かれ、する必要のないおかわりを  
推奨されたに違いなかった。

せっかく外出したことだし、と歩は大学からの帰  
り道、直帰することなく近所をぶらぶらと歩いた。  
子供の頃は毎日のように訪れていた公園を何気なく  
覗く。特に遊具がある場所でもないので大きな変化  
はなかった。平日の昼間だからか、それともこんな  
ご時世だからか、人の姿はほとんどない。

ここに人はいない。歩が何をしようと、それを咎  
める人はいないだろう。残暑の中、律儀にまどって  
いるマスクだって、本当は外したって構わないはず  
だ。それでも何かが咎めるようで、その一歩を踏み  
出せずにいる。暑いし、面倒くさいし、いつまでも

変わらない現状に嫌気がさしている。半年間ずっと  
そうだ。この世界は、ひどく息苦しい。

「いやあ。いい天気だ」

ふと、伸びやかな声が歩の耳を突いた。他に人が  
居たことに驚いた歩は思わず周囲を見渡した。直ぐ  
に、数メートル離れたベンチに腰をかけた人物と目  
が合う。声が届いたことは予想外だったのか、相手  
も少し驚いた様子で歩を見返していた。数秒の沈黙  
の後、目を細め口許を緩めた表情が浮かべられた。  
笑顔だ。他人の笑顔を見るのは久しぶりだ。マスク  
をしていないとか、いい天気というには暑すぎると  
か、色々な考えが浮かぶ。

「……」

どうすればいいのだろう。一拍ほどの間も開けな  
いまま、結局歩も微妙な笑みを返した。もっとも、  
あの人とは違ってマスクをしている歩の笑みが、相  
手に笑みとして認識されたかは確かでない。ふくよ  
かで人の良さそうな笑みを浮かべているけれど、一  
人の時間を邪魔されて内心怒っていたらどうしよう  
いや、この出会いは偶然なのだから気にする必要も  
ないはずだ。どうせもう会うこともないだろう。

大学1年目の初登院。憧れがぎゅつと詰まったワ  
ンキャンパスの記憶は、いつの間にか公園での出会  
いに塗り替えられていた。

遅れ馳せながら健康診断が実施されたものの、2  
学期の授業も遠隔祭りの状況は変わらなかった。人  
数が少ない学科や実験を行う学科はちらほらと対面  
授業を行っているらしい。ネット上を行き来する噂  
の信憑性がどれだけだろう。それがうちの大学の話

なのか、それとも他所の大学の話なのか、それもよ  
くわからなかった。ただ、歩にとっては家に押し込  
められたまま1年が過ぎ去っていくことだけ  
が確かな現実だった。

「せんせー、もう休んでもいい？」

いや、変化はあった。それが大学という場所では  
なかったというだけで。健康診断の後、何となく始  
めた個別指導塾のアルバイト。歩といくつも変わら  
ない生徒に「先生」と呼ばれる奇妙さにはまだ慣れ  
ない。せっかく教職をとったから、家に居てばかり  
で気が滅入ったから、そんな理由で始めた仕事。人  
生初のアルバイトは週に3回、1日2コマ。塾業界  
の相場としてはやや低めの給料も、月数千円でやり  
くりしていた頃から思えば大金だ。

「もう少し頑張ってみようか」

時間もお金も余している。時間は確実に進み、  
歩も新しいことを始めているはずなのに、不安が拭  
えない。遠隔とはいえ授業を受け、課題だって欠か  
さずに提出しているのに大学生という実感はわか  
ないままだ。

もっと頑張ればいい？ でも、何を？

受験勉強をしていけばよかったあの頃とは違う。  
何になりたいのか、何をしたいのか。家に閉じ込め  
られたままあっけなく過ぎ去ろうとしている1年目。  
存外短いらしい大学生活で、歩は何らかの結論を出  
せるだろうか。

「……難破船じゃ進路は決められないから」

「えー、なに？ 先生、俺のこと難破船だと思っ  
てるの？」

「違う違う、先生の話」

「大人なのにな？」

「大人……確かに。大人、なのかな」

「お酒飲める？」

「あ、それはまだ。お酒は20歳からだから」

「じゃあ、まだガキだね」

「はいはい。さらにガキ極まっている君に、この問題は難しすぎるかな」

「解けるし！ 10分ちようだい」

ガキだなんて言葉が悪い。もう少し丁寧に話さなければクレームが入ってしまう。返された本人は気に留めていないようで、細かい文字が並ぶ現代文の問題集に注意が戻ってきていた。歩たちの受験と1年ずれて始まった共通テストはまだ読めない部分が多い。知らないことを教える恐ろしさは、冬の指先がかじかむように薄く、慢性的に歩につきままとっていた。

大人という言葉が転がす。お酒を飲む、煙草を吸う。自分の身体に責任を持つ。それが大人の条件だろうか。生活に責任を持つことも入るだろう。いや、もしかすると。この子の将来の一端に責任を持っている時点で、歩はもう大人なのかもしれない。

「勉強するところって一口に言っても、やっぱり塾と学校は違うでしょ？」

「そう、ですね」

感覚的に理解して頷きつつ、具体的にどういふことなのか考え始めた歩の返事は鈍い。

「学校は勉強だけじゃなくて、手広くケアしてあげる必要がある。塾は違う。教える側に免許は要らないし、求められたとこだけ上手に教えられればいい」

「上手に」

「そう。保護者は数ある塾の中からうちを選んで、なんなら先生のことも選んで、それでお金を払って信じてね。だからそれに応える必要があるんだ」

塾長は歩に説明しながら資料を広げる。最後の追い込み、冬期講習の文字が大きく紙面に踊る。歩は夏期講習が終わってからこの塾で働き始めた。個別指導塾に通った経験もないので、講習の説明は新鮮だった。講師と生徒の予定の擦り合わせ、講師側からの授業吸う提案と授業プラン、生徒保護者による授業数の最終決定、それに合わせた最終プランの作成。

「やること多いですね」

「授業外の準備になるから、働いた時間の申請が必要になります」

「なるほど」

「大変だと思うけど頑張ってください。勉強については自分が100サポートするんだって気持ちで」

「勉強については、100」

「うん。塾はそこだけでいいから。そこ踏ん張って」

「はい」

果たして100サポートできるほど、歩は卓越した技術を持っているだろうか。結局は本人の努力次第、塾の講師はきつかけにすぎない。そう考えないとプレッシャーに押し潰されそう。免許が要らないとはいえ、正社員が塾長のみ、講師は全て学生バイトの環境は最高とは言いがたい。

大人になるって、怖いな。

この恐ろしさを隠しながら、あと数週間もしないうちに保護者と面談をする必要があると思うと、少し憂鬱だった。

いつの間にか、昼間の風も暖かさを忘れていた。太陽が輝く午後3時。歩は数か月ぶりに近所の公園を訪れていた。あの日は残暑が厳しかったが、今はベンチに腰を下ろしてじっとしていると寒いくらいだ。なにか温かい飲み物でも買おうか。自販機の中身も入れ替わって、夏の寒色尽くしから様相を変え、暖色が増えている。財布の中にたまった10円玉を緩慢な動きで飲み込ませていく。他に人影を見ない公園は、いつも以上にゆっくりとした時間が流れている。

「あつ」

手のひらに伝わる缶の温度は、温かいを通り越して火傷しそうに熱かった。しばらくはカイロ代わりに使うしかないだろう。身体を芯から暖める方法を手に入れているのに、直ぐには使えないようだ。

「はあ」

息を漏らしながらマスクを外した。北風が頬を撫でる。外でマスクを完全に外すのは随分久しぶりのように思えた。食事は家でしていたし、飲み物を飲むときはほんの一瞬だけマスクを外し、人目につかぬよう手早く戻していた。缶のタブを上げる前からマスクを外すなんていつ以来だろうか。そもそも蓋を閉じられない缶を飲む機会さえ減っていた。冷たい風が痛みをもって歩を迎え入れる。その痛みさえ、心地よい気がした。

顔を下ろし、身体を包む冷気と手のひらから伝わる

る熱を堪能する。服を選ぶために毎日確認していた天気予報。数字では理解していても、身体で感じる機会の少ない1年だった。ふらりと訪れた公園で、ベンチに腰を下ろしてぼんやりして。そうしてようやく季節が巡っていることを実感する。春を彩る桜、夏の空に映える人道雲、秋の少しずつ色の失われていく世界に舞い込む紅葉。これから本格的に深まる冬にはどんな景色が見られるだろうか。この公園にも雪が積もる日があるかもしれない。

「温かい……」

傾けた缶から喉を伝い身体の奥まで滑り落ちる。芯に届く熱に、心が溶かされる。そう感じることによって、歩は己の心が固まっていたことに気がついた。

当たり前が奪われて、閉じ籠ることを求められて。人と距離を置くことを説かれて。人と関わるのが好きだったわけじゃない。外に出ることが好きだったわけでもない。でもそのどれも奪われて、ようやく価値を感じることができた。一番ではないとしても、意識していないくらい当然のことだとしても、奪われたくないものがあるのだ。

「んー。ひとごち、ひとごち」

緩い声だ。覚えのある状況に、歩はいつかのベンチに視線を送った。やはりと言うべきか、その人物はあの日と同じベンチに腰を下ろしていた。季節に合った着込んだ格好で、寒色系の服をまとっている。せいも、夏に見かけたときよりも心なしか小さく思えた。手にした薄紅色のコップがその中で目立っている。コップからは湯気が上がっているようだった。傍らに同じ薄紅色の筒が見えるので、コップ付きの

水筒なのだろう。歩がそれを使っていたのは幼稚園の頃までだったので、勝手に懐かしく思った。

塾の冬期講習に追われながら2021年が始まった。正月の少しばかりの休みを堪能して、また塾の校舎へ向かう。小学生から高校生までが通塾している校舎には、新年早々ピリピリした空気が流れている。今年が受験でない生徒も周りの緊張を感じ息を潜めている。ちょっとした懐かしさと、あつという間に1年が経ってしまったことに対する驚きを感じながらの仕事はじめ。いつの間にか恐ろしさにも鈍くなった。それが成長なのか退化なのか判断できないまま、慌ただしく冬は過ぎ去っていった。

「亀海先生は、学校の先生になりたいの？」

3月。春期講習から受け持つようになった小学生に訊ねられた。問題集の進みはあまり順調ではなかったが、集中は完全に切れているようだった。前の時間も授業があったらしいし、仕方がないのかもしれない。中学受験は学校の勉強とは異なる部分が多く、負担も大きい。国語がとて苦手というわけでもなさそうなので、気分転換に付き合うことにした。

「選択肢の一つではあるけどね。それしか考えてないわけじゃないよ」

たぶん、という言葉は胸の奥にしまっておく。

「じゃあ塾の先生？」

「え？ いや、塾の先生はバイトだよ」

集団指導をする塾ならばともかく、個別指導塾は基本的にアルバイトで講師の枠を埋めている。正社員は塾長のみの校舎も多いらしいと何となく耳にしていた。

「先生以外の仕事って例えば？」

「えー、そうだな。IT系とか、銀行とか、出版とか？」

「へー」

「そういう君は？」

「わたしは……なんだろう。楽しい仕事ができたらいいなって思うけど」

「先生もそう思う」

4月からは大学2年生だ。来年には3年生。そうなれば真面目に就職活動について考えなければならぬ。1年目があつという間だったように、2年目も瞬きの間に過ぎてしまったら、歩はどうやって就職活動に向き合えばいいのだろうか。学生時代に力を入れた活動として誇れるようなものは今のところ何もない。そもそも、1年目は力を入れるどころか何かに取り組み始めることさえできなかった。今からでも参加できる部活やサークルを探した方がいいのだろうか。部活は厳しいと聞くと、2年生から入れるサークルを帰ったら探そう。ポーカーフェイスで決意しながら、歩は問題集の次のページを開いた。

2020年開催予定だったオリンピックを、歩は日本が招致に成功した小学生の頃から楽しみにしていた。いつもは画面の向こう側で繰り広げられている光景が、目の前で見られるようになるのだ。選手以外にも多くの人が日本を訪れるだろう。きつと開催期間中はお祭り騒ぎになるはずだ。その中に混じって少しでも世界の空気を感ぜられたら楽しいだろう。そんなことを思っていた。

だからこそ、コロナによって世界が変わってしま

った昨年、オリンピックが取り止めになったことには肩を落とした。危険は当然承知していた。それでも苦しいときだからこそ、何か気晴らしがほしかったのだ。自分勝手だと思う。でも歩は、自分が足を止めている最中にも何かを成そうと努力している人の姿を見たかった。オリンピックという舞台で輝く選手たちの姿から勇気をもらいたいと思っていた。

賛成と反対、様々な意見が日々飛び交う中、無事に開催に漕ぎ着けたオリンピックに、少しだけ未来への希望をもてたのは、そんな昨年の思いがあったからだろう。歩はそれほど運動が得意ではないし、普段からスポーツを観戦するタイプでもない。夏期講習の合間に時間を作ってテレビ中継を見ながら、少しづつルールを把握していくレベルだ。それでも楽しかった。今までで一番心が踊るオリンピックだったことは間違いない。

スポーツというのは、すごい。何かを成して、あるいは成そうとして、その背中を見せることには大きな価値がある。

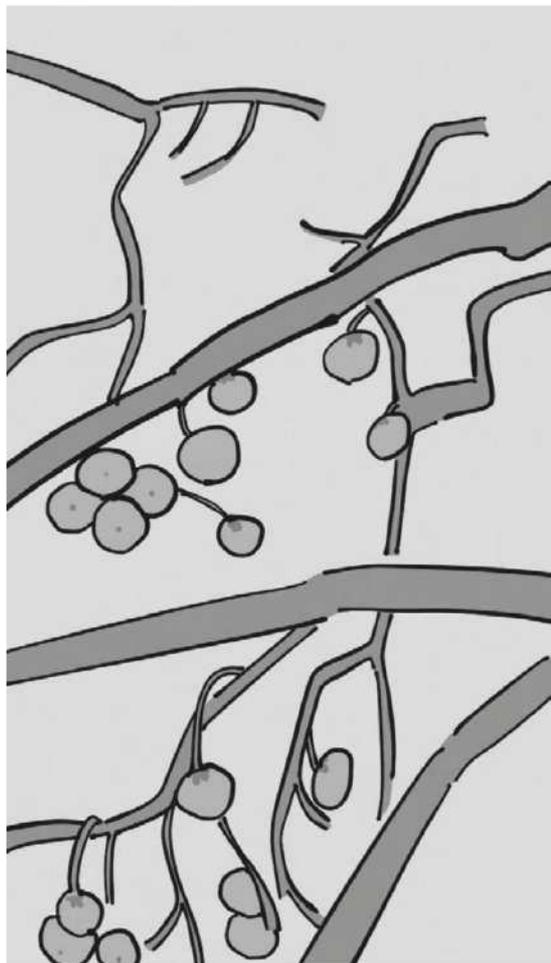
ほんやりと感じていたことが、ようやく言葉としてまとまった。心を動かされたから感動するのだ。感動させることによって、観ている人を変えていく。それは偉大なことだ。歩は今さらオリンピックを指せはしない。スポーツ選手にさえなれないだろう。それでも憧れた。まだまだ船は難破してはいたけれど、遠くに灯台の灯を見た。人を変えたい、誰かの心を動かしたい。とても曖昧な、それでも方向としては確かな、生きていく上で目指したいものを見つけたのだ。

『この教壇に立ちながら、私は時折考えます。私が

……』

ふと、いつか言われた言葉が思い出された。あの時、確かに歩の心は動かされた。突拍子もないことを言う人だと思った。それでも歩が日文科に進み、教職に興味を持ったのは確実にあの先生の影響だった。

オリンピックとパラリンピックが無事に開催され、緩やかながら対面授業が歩の所属学科でも始まった。そうして、全てが前向きに進んでいくと感じていた2021年の秋のこと。再び会うことが叶わないまま、歩は父方の祖母を亡くした。受験が終わったら会いに行く、コロナが終息したら会いに行く。そんな約束ばかり並べて、何一つ行動に移せないまま。どうにもならないことが起きてしまったのだ。



仕事を休んだ父と共に訪れた祖母の家。幼い頃から何度も通った場所なのに、秋に来るのは初めてだと、見慣れない景色の中でふと思いついた。冬も間近に迫った11月の景色は、葉を落とした樹木や鈍い彩りの枯れ葉のカーペットによってくすんで見えた。その中で、柿の木と銀杏だけが異様に明るい色彩を放っている。週に1度訪れる大学でも目にする澄んだ黄色の銀杏の葉。スーパードしか見たことのない柿は、花のように木々を彩っていた。春とも夏とも、冬とも違う景色。よく知っているはずの場所の全く知らない色合い。この見知らぬ景色の中で、祖母は最後の時間を過ごしていたのだ。

「もっと早く、来られればよかったのに」  
「仕方ない。今は身内でも移動にいい顔されないか

らな。県内でさえそうらしい。東京から出てくるなんて、こういうことでもなきや無理だっただろう」

難しい顔をして父は言った。都会より病院の少ない地方は、その危機感もあつてか、帰省により厳しい目が向けられる。今回の葬儀についても、事前にコロナの抗体検査を行うことを求められた。わかっている。祖母に再び会うことが叶わなかったのは、歩が行動しなかったからではない。行動することを許容される空気になかったからだ。少しずつ世界が回り始めても、どうにもならないことが沢山残っている。今までにはない不自由さを抱えながら生きていくしかないのだ。マスクの着用も、帰省の制限も、お見舞いの遠慮だつて。いつ晴れるとも知れない雨空の下、いつか見た青空を隙に乗せて堪え忍ぶことが求められている。

「でも、もつとちゃんと会いたかった」

「父さんもだよ」

歩にとっての祖母は、父にとっては母である。短く返された言葉に、歩はそれを思い出した。苦しいのは、悔しいのは歩だけではない。この苦しさは誰もが抱えている。それを感じることは、ほんの少しだけ救いであるような気がした。

緩やかに好転し始めた世界の中で、どうにもならない後悔を抱えたまま日々は過ぎていく。大学では、いよいよ来年からは対面授業の割合が増えるという話が流れ始めた。春休みを前に大学3年目が間近に迫っていることを感じた。

食堂の2階にあるコンビニでスープを買ってお湯を注ぐ。オーブンキャンパスの時は人がひしめき合

っていた食堂の利用者はまだまだ少ない。パーティーションで仕切られた世界に腰を下ろす。他の人からの影響を受けないための工夫だ。精神的にも大切なものであると理解していたが、歩は圧を感じずにいられなかった。昨年末に公園でおしるこを傾けたのが懐かしい。今年は春休みに2度訪れたきり、学年が変わってからは行くこともなかった。授業の数がそれなりに多かったのもあるし、2年生から参加し始めたサークルでそれなりに忙しくしていた。

主にオンラインでの交流と個人作業が求められる文化系のサークルだが、締め切りを設定されていたり、作品に対する合評を求められたり、それなりに活動量が多かった。少し前からは代替わりして2年生が会長を務めている。歩は特に役職を持たないまま、何らなら役職決めにさえ参加しないままだった。この1年努力してきたとはいえ、やはり1年目からサークルに参加している人間の方が先輩からの覚えがめでたく、同学年からも支持を得やすいようだ。いつの間にか決まっていた役職に驚いたものの、後悔はしていなかった。1年目に乗り遅れてしまったのは事実だ。腐っても仕方ないので、コツコツ作品を作っている。特に外部からの評価が得られるわけでもない身内向けの作品。誇れるほどのものではないけれど、棚を埋めていく冊子を眺めるのは悪い気がしなかった。

「あれ、亀海さん」

「あ、鶴山くん」

「鶴ちゃんていいですよ。ね、亀さん」

「鶴亀ね」

サークルの後輩である鶴山は真冬にもかかわらず、

涼しい顔をしてカップアイスを食べている。小さくて高いタイプではなく、それなりの大ききで安めのバニラアイス。青いパッケージが見えるだけで冷たい。アイスと荷物を手に、歩の隣の席に腰を下ろす。隣り合って座ることがないようにと貼られている注意書は目に入っていないようだ。

「対面で会うのは歓迎会以来じゃないですか？ 元気でした？」

「まあ、コロナにはならなかったよ」

「何よりですね。亀さんは今日授業ですか？」

「うん。鶴山……鶴ちゃんも？」

「俺は探検です！ 授業がなくても大学に来て、色々な設備を使いたくつてですね。亀さん設備費って知ってます？ 籠ってばつただとたぶん損ですよ、あれ」

「なるほど」

熱弁しながら鶴山はバクバクとアイスを口に運ぶ。かなりペースが早いなあ、と感心して見ていると、身体が追い付かなかったのか目を瞑って頭に手を当て始めた。

「キーンってします……」

「だろうね」

「わかっているけどやっちゃうんですよ。わかりません？」

「あんまりやらないかな」

「亀さんもやった方が絶対楽しいですよ！ 春休み長いですから、ぜひやってください」

「うん、気が向いたらね」

「うわ、亀さん、それ絶対やらないやつ」

笑いながらまたアイスを掻き込んで、うーと唸る。

アホらしい。歩一人なら絶対やらないだろう。歩の家の人々も、そういうことを楽しむタイプではない。そうやってしまうことはあっても狙ってやりはしない。けれど、鶴山の様子を見てるとそういう行動も悪くないと思えた。

「じゃあ、また冬の交流会で！」

「はいはい」

元氣よく去っていく姿に手を振る。サークルの交流会はひっそりと対面で行われるようになってきていた。次の日程はいつだったろうか。冬期講習の予定と被っていないといい。帰ったら確認しなければならぬ。

ああ、楽しいな。

大したことはない交流だ。時間にして20分にも満たない。それでも心が弾んでいる。普段の自分とは違うことがしたくなる。このくだらなさをずっと欲していたように思えた。

2022年は夏に過ぎ去ったばかりのオリンピックを再び携えながら現れた。夏と冬という違いはあるけれど、オリンピックという名を関した平和の祭典であることに変わりはない。国際的なお祭りの雰囲気は、この1年がよりよいものになることを示しているように感じられた。今年こそ、コロナの影響から抜け出せるかもしれない。もっと別のことに目を向けて、大学生活を送れるかもしれない。そんな期待を抱きながら呑気にテレビで観戦していた。

それは何事もなく過ぎていくはずだった休息期間。オリンピックからパラリンピックへ。盛り上がった空気を引き継いで続くはずだった平和の祭典は、ロ

シアによるウクライナ侵攻によって陰りを見せることになった。

「この教壇に立ちながら、私は時折考えます。私が皆さんのことを戦場に送ることになる日を。そんな日が来たらどうしようかと」

それは先生の最後の授業。高校2年生の3学期。定年を迎えた先生が歩たちに語ったことだった。

「それでも私は教師を続けているのか。そうならないうようにするには、どうすべきなのかということ」

何ということ話すのだと思った。平和主義を掲げる日本で、軍隊さえ持たないこの国で心配すべきことではないと。この国がいつか滅びるとして、それはきつと戦争のせいではなく、もっと別の要因によるものだろうと。

「私は戦争を経験しないまま退職を迎えられたことを嬉しく思います。皆さんの人生においても、そうであってほしいと願います」

当たり前だ。そう思った。でも同時に、それだけの覚悟をもって教壇に立っている先生がいるのだということに感動した。教員というのは、子どもに関わる仕事なのだ。未来に関わっていく仕事なのだと感じたのだ。

あの時の先生の言葉が浮かぶ。戦争はもっと遠くの存在だと思っていた。滅多なことがなければ起こらないと信じていた。平和の祭典が持つ抑止力を、子どもがサンタクロースの存在を思うよりずっと強く、信じていたのだ。コロナウイルスによって世界を壊されたのは2年前。青天の霹靂だった。あり得ないと思った。まだ立ち直ってさえいなかったけれど

ど、それ以上のことは起こらないだろうと思っていた。絶対などないのだと思ひ知らされた。

そうして、戦争という脅威が身近に迫って消えないうまま大学3年目の春を迎えた。

「ん？ あれ？ あ、亀さん！」

「宇佐見さん、どうも」

久しぶり、と言いながら近づいてきたのは中学と高校時代の同級生だった。中学は一度も同じクラスにならなかつたが、高校3年間はクラスが一緒だった。宇佐見の「う」と亀海の「か」で出席番号もそれなりに近い。かといって特別親しいということはなく、同じ大学に進学したことは知らなかつた。もつとも、例年通り卒業式ができていたなら、情報交換を通して互いの進学先を知る機会もあつたかもしれない。

「私、教育学科なんだよね。国語の免許を履修してて。今年からお邪魔します」

「なるほど」

さすがに違う学科だったようで、歩は納得の声を漏らした。遠隔講義や昨年の対面授業で一度も名前や顔を見かけなかつたのは気のせいではなかつたらしい。

「来年の実習も一緒かな？ よろしくね」

「うん、よろしく」

この講義の受講者は25名前後。その中で5人ほどが宇佐見と同じ教育学科の人間らしかった。まあ、実習が一緒になるだろう宇佐見以外とは関わることもないだろう。今年は対面授業が多い。大教室での授業はまだまだ遠隔が多いようだが、少しずつそれ

も変わっていくだろう。変化の多い1年になりそうだ。歩にとつても、大学にとつても、そして世界にとつても。

桜の季節は終わってしまった5月。光と植物が生み出す美しい黄緑色を見上げながら歩はほんやりしていた。公園を漂う空気は、心地よい暖かさの中に、僅かに熱気を潜ませている。今年の夏も暑くなる予感がした。

「危ないですよ」

「え？」

「その木、毛虫が発生しているんです」

落ちていた香りが鼻を掠める。お寺で嗅ぎそうな香りだ。何だったのだろうか、と思いつながら声の主を見る。いつの間にか近くに立っていたその人は、近くのベンチに座っている姿をよく見かける人だった。

「えっと、ありがとうございます」

礼を言いながら、見上げていた木から離れる。この公園は木が多い。どこのベンチなら安全なのだろうかと迷っていると、その人は歩を誘導していつもの場所から離れたベンチへと案内した。このベンチの近くにも木が生え、木陰を作っている。大丈夫だろうかと木を見上げながらベンチに腰かける。

「隣、いいですか？」

「え、はい。どうぞ」

「ありがとうございます。急に声をかけられてビックリしたでしょう」

「はい、まあ。でも助かりました。気づいてなくて」

「意外と気づかない方も多いですよ。でも、ほら

アレ」

見えますか、と問われる。指差された方向を見てみると、地面に黒い粒のようなものが転がっているようだ。一つ一つは小さいが、数が多いので言われてみると目立っていることがわかる。

「桜の葉っぱが好きな毛虫です。大量発生して、たまに木から落ちてきたり、よく見ると地面を這っていたりするんです」

「わあ。……あの、駆除と違って」

「ああ。あんな見た目でも毒性はないらしいんです。だから、本当は触れ合っても大丈夫。ただ、途中で気づいて叫ぶ人とかもいるのでご忠告を」

「ありがたいです」

歩は間違いなく、毒性の有無に関係なく毛虫に気づいた時点で叫んでいただろう。気遣ってもらえて幸運である。

「あ、名前を伺ってもいいですか？ 私は外丸寛と言います。外の丸のでトマル、寛容の寛でユタカです」

「亀海歩です。海亀をひっくり返して、歩は歩くで」

「亀海歩ですか。一步一步しっかり積み重ねていく感じのいいお名前ですね」

「外丸さんも、止まってこそわかる豊かさみたいなものが滲んでいて」

「止まってこそわかる豊かさ、ですか」

少し驚いたような表情を浮かべながら、外丸は繰り返す。いつものベンチの辺りに視線を投げ何事か考える姿は、祖母が池の蛙を愛でる表情に似ていた。

「そういう誉められ方をしたのは初めてです」

それから少し、二人で他愛のない話をした。害のない毛虫を駆除しない理由だとか、毛虫が多い季節はいつだとか、毛虫を見つけるための痕跡だとか。家に帰ってから、今日は人生で一番毛虫について話していた目だということに気がついた。それから、外丸から漂っていた香りはいきよきのものであると知った。どこで嗅いだ香りか思い出せないまま家中にある芳香剤を試し倒していたところで見つけた。父の故郷を訪れた際に買ったものだった。外丸から感じる謎の安心感は、人柄とそれとどこか懐かしい香りのせいなのかもしれない。

就職の授業は半期のものが多い。1学期は同じ授業を取っていた宇佐見とも、2学期は顔を会わせなくなるだろう。学科の違いから取る授業に若干の学年差が出ているらしいということは、履修表を確認するうちに気がついた。

「亀さんはさ、教員になるつもりあるの？ それとも一般就職？」

「まだ悩み中だけど」

「まだ悩みに中だけ？」

「教員採用試験は受ける？」

「うーん」

昨年SNSで話題になった「教師のバトン」を思い出すと、簡単には領けなかった。教育学科ということでは、宇佐見は教員に対してそれなりに本気なのだろう。小学校か、それとも中学か、はたまた高校か。どこもそれなりに魅力があって、同時に大変さもあるはずだ。

「受けないかな」

「そっか。まあ、興味出たら教えてよ。一緒に勉強

て」

「そっか。まあ、興味出たら教えてよ。一緒に勉強

しよ」

「一緒に勉強できるの教職教養くらいだけだね」

何気なく返すと、宇佐見は驚愕の表情を浮かべ、そして破顔した。

「なんだ、亀さんちゃんと調べたんだ」

できるだけ素っ気なく終わらせようとしたのに失敗した。自治体ごとに違うテスト内容を知っていたら真面目に検討していたことが丸分りだ。

「調べただけだよ」

本当だった。教員に興味はあった。今までの人生において歩に影響を与えてきた人の多くは教員で、誰かの心を動かすことのできる仕事として身近なものだった。それでもその綺麗事だけでは済ませられないものがある。目指したいものと同じくらい、損なえないものも大切にすべきだと歩は思っていた。そのバランスを取る未来を今のままの学校現場では描けない。

「すごい言われようだからね。亀さんの気持ちもわかる。私もどっちに行くか怪しいところあるから、情報共有していこう」

「そうだね」

それでも宇佐見は教員の道を進むだろうと、歩は何となく感じ取れた。宇佐見は高校時代も目指すものに重きを置いて行動していた。綺麗で眩しくて、敵わないと思っていた。宇佐見に共感して同じ行動を取ることも、宇佐見は宇佐見と割りきって付き合っていくこともできず、歩は親しい付き合いを避けた。一瞬とはいえ、ここで再び道が変わったのは不思議なことのように思えた。

夏の日差しにうんざりしながら夏期講習に勤んでいた歩に、その写真は唐突に送られてきた。だだっ広い道に人影はなく、色の薄い青空がこぼれた広く画面を占める。そんなどこかの風景に鶴山が写り込んでピースをしている。別の写真では、7時20分を指した時計の前でポーズをとっている。

「これ、夜なんですよー」

追加で送られてきたメッセージを読む。何が、と書いて写真を見返すと、明るさが日本の夜7時とはかなり違うことに気がついた。鶴山はこの感動を伝えたらしい。

「よかったね」

「Canada」

メッセージと共にコーヒーショップか何かの写真が追加される。聞き馴染みのない店名だが、カナダでは有名な店なのだろう。そういえば夏の交流会で会った際に、カナダに研修旅行に行くと言っていた。段々と状況が落ちてきているとはいえ、大学主催の研修が外国で行われるという話に驚いた記憶がある。始まるかどうか参加者の健康と社会情勢次第と言っていたが、どうやら無事のスタートを切ったらしい。

「最高の夏って感じかな」

大学入学前は歩もこういう類いの研修に憧れていた。短期研修という形で海外に赴き、言葉や文化を学べる機会があるのは素晴らしいことだ。英語やドイツ語、フランス語を専門として学んでいなくても参加できるため、全く違う学科所属の鶴山も意気揚々と申し込みをしていた。鶴山の誘いに乗ればよかった。塾の講習を理由に断ったが、間違いなくこ

の夏、この研修でしか得られないものはあるだろう。それはここで恐怖を抱えながらする授業より心を豊かにするはずだ。それでも、一步を踏み出せなかったのは自分自身と生徒を天秤にかけてしまったからだ。

「夏はあちらのベンチの方がいいですよ」

「外丸さん」

セミの声が降る公園で、塩気のある飲料水を片手に俯いていた歩にすっかり馴染みになった声がかげられた。外丸は相変わらず、薄紅色の水筒を手にしている。定位置になったベンチから腰を上げ、外丸が示すベンチへ移動する。木陰具合は同程度だ。それでも毛虫の件があったので外丸の忠告は素直に聞くようにしていた。外丸もまた、少し距離を置いて同じベンチに腰を下ろす。ふわりと香るのはけやきだ。

「あそこはですね、セミの通り道なんです」

「セミ」

「やたらとあその上を通る。通るだけならまだしも、たまに落とし物もしていく」

「うわあ」

心底引いた声漏れる。そんな歩の様子を見て外丸は笑った。つられて歩も緩く笑む。笑ったときに頬を擦れる感触がなく、歩はマスクをしていないことに気がついた。先程ペットボトルの水を飲んだ際に外したままになっていた。公園でマスクをしている姿を見たことのない外丸は、特に気にした様子もない。慌ててつけようかとポケットに突っ込んだ手を、じりじりと戻した。

「夏のマスクはしんどいですよ」

「いや、外丸さんは季節問わずここではしてないじゃないですか」

「ここではです。私もまだ求められる範囲ではマスクをしています。これは、細やかな抵抗みたいなもので。人目ばかり気にしていると疲れる。そう思いませんか？」

歩は頷いた。マスクだけじゃない。この数年で嫌というほど感じた「社会」という空気は人の行動を制限する。誰もが一員であり、誰もが主導権を握れない何か。

「……塾講師が講習を放り出して夏休みしたらダメですよね」

「アルバイトですか？」

「はい。個別指導塾の」

「それは難しい問題ですね。アルバイトは本来、正社員のように働く必要はありません。自分がやりた範囲で働けばいい。その穴を埋められる存在が別に求められる」

「理論はそうかもしれないですけど。でも、その埋められる存在が都合よくいるものですか？ どこも人手不足じゃないですか」

「そうなんです。でも出勤は義務じゃない。これは善意の搾取なんですよ」

「善意の搾取」

「色々な体験ができるはずの大学生をバイトで捕まえておいて、搾り取れるところまで働かせる。搾り取っておいて、採用するときになってもっと多くの経験ができたはずだと理想を押し付ける。それは正しい社会の在り方ではない。そう、私は思います」

「……」

「亀海さん、もしあなたがバイトと生活の折り合いがつかないと感じているなら、辞めてしまうのも手です。今の状況で苦しさを後悔を抱えながら大学時代を終わらせて、社会に出てから辛い思いをするのはあなたなのだから。もちろん、これはあくまで個人の考え方ですけど」

「……少し、考えてみます」

頑張らなくてもいいのか。逃げ出して、自分がやりたいことに挑戦できる働き方を考えてもいいのかわる向きな考えである気がして、歩は口に出すことができなかった。自分の興味に一直線の鶴山にも、志を掲げて従う宇佐見にも相談できなかった。歩と外丸はほぼ他人だ。公園で会えることが多いらしいということ以外、互いのことをよく知らない。それで、いや、それくらいの関係がいいのかもしれない。

夜空を見る機会は多くても、朝焼けの空を見る機会は少ない。もしかすると、この空の移り変わりを目にすることがないまま生涯を終える人もいるのかもしれない。冷たく、強制的に目を覚まさせる朝の空気。建物の隙間から昇る太陽が、人気のない街を少しずつ暖めていく。色を取り戻していく世界の中を歩は足早に進む。

2023年1月。塾で担当する生徒を極限まで絞りながら、歩は早朝のカフェでバイトをしていた。残った生徒の引き継ぎも今月中には終わり、2月には塾でのアルバイトを辞める予定だった。考えて考え抜いて、予想より少し時間がかかった。外丸と話したあの夏の日、歩は勢いに任せて塾を辞めようと

思っていた。あまりに急だったためか、塾長と担当生徒に混乱をもたらし、相応しい説明が必要となった。塾長とは何度か個人面談をした。担当生徒が多すぎるのか、授業のコマ数を減らしたいのか、色々と言われたが辞めたいという意味は変わらなかった。何度か口にするうち、自分でももうこの職場で働いていられないのだと気がついた。週3回の出勤を2回に、そして1回に減らして。遅すぎるかもしれないが、2年も残っていない大学生活を積極的に楽しむうと思つた。

朝型ではない歩が早朝にバイトを入れるのは簡単ではない。それでも、朝起きさえすれば昼や夜の時間を自由にできる。その時間に構内を歩き回ったり、誰かと会ったり、一人で過ごしたり。大きなことをするわけではない。行き損ねた短期研修に代わるものはそうそうないだろう。このまま緩やかに時間が過ぎていくだけかもしれない。そんな未来予測をしながらも、歩は不思議と落ち着いた心地だった。

「おはようございます」

店は朝7時に開く。出勤前の勤め人が開店1時間の顧客のほとんどを占める。慌ただしくモーニングセットを注文して、ホットコーヒーを片手に腹を満たしていく。店全体が慌ただしい空気に包まれているのに、どこか穏やかな一時を感じさせる雰囲気もある。朝に来る顧客は常連ばかりで、だからこそ一体感のようなものもあるのかもしれない。こんな世界があることも、歩は知らなかった。

「おはようございます、亀さん！」

「おはようございます、って鶴ちゃん？」

「この期間限定のドリンク、アイスのLサイズでお

「願います」

「店内ご利用ですか？」

「テイクアウトで！」

「かしこまりました」

真冬に冷えきった飲み物や食べ物やアイスするところは相変わらずだ。今日の担当は会計のみなので、ドリンク作りと提供は他の店員に任せて次の客を待つ。鶴山は電子決済で手早く会計を済ませると、軽くて振ってから受け取りの列に進んでいった。アルバイト先を変えろという話はしたが、顔を見せに来るのは予想外だった。大学の最寄り駅でもないのに朝からご苦労なことだ。いや、行動範囲の広い人間なので偶然ということもあり得る。

次の客は海外からの観光客、それも団体のようで複数の飲み物がサイズもホットとアイスも入り交じった状態で注文されては訂正される。働き始めて3ヶ月の歩はギリギリのところまで注文を打ち込んでいた。アルバイトを始めた頃に比べると、観光客の数もだいぶ増えてきていた。ラッシュ時に来る不規則な注文はまだまだ難問だ。

歩がバイトをあがる午前10時半には出入りも少なくなり、シンプルな注文より凝った注文が入るようになる。といっても、この日歩が処理した注文の中で期間限定ドリンクをアイスのLで頼んだのは鶴山だけだった。

「お疲れさまでした」

賭いのドリンクをもらってから店を出る。最近ホットばかり頼んでいたのに、鶴山につられてアイスを頼んでしまったため指先がかじかむ。アホらしい。でも、面白くて笑みがこぼれた。

2023年4月。大学生生活も最後の1年になった。

大教室での授業も行われるようになり、新歓も賑やかさを取り戻している。食堂のパーテーションも取り除かれ、昼食の時間帯は学生による椅子取りゲームが開催されていた。2限の授業後に3限が入っていると昼食をどこで入手し、食べるのが死活問題になるだろう。食堂の2階に入っているコンビニが昼食の時間帯に混むことは昨年の経験から知っていた。全面的に対面授業が解禁された今年は、あれを越える混雑が予想される。幸い、特に単位を落とすこともないまま4年生になった歩が取るべき授業は少ない。教育実習のない2学期に教養系をいくつか追加したが、1学期は逆に授業を減らしていた。

歩が大学に足を運ぶのは、今年度からオープンした図書館に興味があるからだ。今までの大学図書館は、どちらかというと暗がりひっそり建っていた。新大学図書館は、デザインも新しく、日向で光をよく集めている。1階にカフェを併設しているのも利用者を増やす工夫としてうまい。

そういえば中央教育棟にあるサンドイッチ店はいつまで休業しているのだろう。歩はあそこのサンドイッチを食べることを密かに楽しみにしていた。今年の春にも変化が見られないということは、在学中にその願いが叶うことはないのかもしれない。

ともかく、図書館である。鶴山の言っていた通り設備費を払っている分、こういう施設を活用しない手はない。丁度というのか、今年は卒業論文を書く必要もあるので世話になることだろう。そんなことを考えながら上へ上へと足を向ける。気軽に雑誌を

読める2階のコーナーに、独特な椅子の置かれた自習室。さらに上の階には、グループで使える部屋や個人で使える部屋もあるらしい。実習後にも利用しようと計画を立てながら歩き回るのは新築の家を見て回るのに似ていた。

就職活動という4文字から歩は目を背けたい気持ちで一杯だった。数少ない1学期の授業を受けながら、歩の思考のいくらかは現実的な問題に割かれていた。

あの人も、将来について考えるのだろうか。

歩は失礼にならない程度に、同じ大教室で授業を受けている方へ目を向けた。いや、社会の目などそれほど気にしなくて構わない歩と、常に動向を気にされている人とは比べてはいけない。同じ年でも背負っているものは全く違うのだ。授業を受けている姿は他の学生と変わらないのに、それを知らない人も多いのだろう。

つまり、どう生きるべきか？ 何を目指していくべきか。

大学に入学してから頭の中をゆったり回っていたその問いは、今や時速20キロを越えていた。夏まで前進がなければ、制限速度を越えてしまうかもしれない。そうしたら焦りで冷静な判断力など失われてしまうだろう。焦ったら終わりだ。わかっているのに、春先から平常心とはいかなかった。卒業論文、就職活動、単位の獲得。2020年のとるところとした始まりから、ゆっくりと時の流れた2021年と2022年。平和の祭典と、祖母の死と、ウクライナ侵攻。行きたかった短期研修と塾アルバイトの終

わり。朝バイトの始まり。どれも重大な問題ながら、今年抱える課題と比べると深刻さが異なる。未来に直結している1年の重みに呻きながら、歩は中学での実習に向かった。

教育実習は大変ながら、嫌なものではなかった。

教員に憧れていた部分もあるし、学校という場が嫌いではないのだろう。生徒として通っていた頃とは違う形で関わりながら、そこにやりがいも楽しさも見いだせた。適性がないわけではないだろう。だが、歩は塾から逃げ出した。アルバイトだから逃げ出せた。きちんと働き始めたら、1年は離れられない職場だ。採用試験に出願はした。でも、やはりダメかもしれない。

約1ヶ月ぶりに戻った大学は、変わりなく多くの人が行き交っていた。皆明るい表情をしていて、大学生生活に希望を持っている。キャンパスに占める4年生の割合は、きっとそれほど高くない。だから余計にそう見えるのだろうか。

「あと何週間もないけど、どうしようかな」

教員採用試験は7月上旬の休日。すでに6月は中旬を過ぎた。教育実習期間中はとても手が回らなかつたものの、実習前も実習後も、覚悟が決まらなまま試験対策をしていた。過去問の正答率は微妙なところだ。完璧には至らず、目安はやや越えている。2次試験に関しては問題しかない。自信をもって伝えられる言葉が浮かばなかった。何も教員採用試験に限ったことではなく、民間就職でもそうだ。ふらふらと悩んでいる気持ちが透けて、足りない言葉ばかりがあふれ出る。

「魅力、か」

大学構内の適当なベンチに腰を下ろす。ほとんど使ったことのない北1号館の前。ぐるりと円を描くようなベンチの端。

「足元、見た方がいいですよ」

「え？ っつて、うわ。毛虫！」

「ちょうどこの上の木で大発生していて。あ、苦手なら見上げない方が……亀海さん？」

「外丸さんこそ、どうして」

クールビズらしくノーネクタイ、ノージャケットの半袖Yシャツ。公園でも見かける薄紅色の水筒。それに重たそうな鞆。口が閉まりきらないのか、何かの資料が飛び出している。そこそこよく見かける大学の先生スタイルだ。

「あれ、亀さんと外丸先生。珍しい組み合わせですね」

北1号館から降りてきた宇佐見は手を振りながら距離を詰める。歩の隣で外丸がそんな宇佐見に会釈を返していた。

「宇佐見さん。こんにちは、実習は順調でしたか？」

「はい。その亀海さんと一緒にした」

「次は小学校……の前に採用試験ですね。対策は大丈夫ですか」

「そこそこ。これから大詰めです」

「なるほど。頑張ってください」

「はい。あ、次の授業の前にお昼買わないと。外丸先生、失礼しますね」

軽いテンポで言葉を交わし、宇佐見は慌ただしく去って行った。見送った外丸は、歩に視線を戻す。

「話したいこともあるでしょうけど、場所を変えましょうか。ここは、あれなので」

ちらりと視線を落とせば、豊かな毛を生やした黒いものが動いている。これに気づかないまま去って行けた宇佐見は幸運だ。

「……ははは」

並んで歩きながら、歩の口からは自然と笑いが漏れた。不愉快ではない、ただこの偶然が心底面白かった。

「どうしました？」

「いえ。ただ……つくづくこの大学に振り回された4年間だったな、と」

「いけませんね。大学は場に過ぎないのだから、振り回されるのでなく利用し尽くさない」と

「そうですね。自分でも気づかないうちに、たくさん利用していたと思います」

「そうですね。それはいいですね。そういえば図書館が新しくなりました。これがなかなかいいんですよ」

心なしか、外丸のテンションがいつもより高いように思う。歩も、ここ最近で一番テンションが上がっていた。

こんな偶然があるだろうか？ 嘘みたいだけれど、ここにある。

心から笑う。頬を擦っていたマスクを外すことへの抵抗はなくなった。今はまだ均衡を保っている割合も、そのうちノーマスクに傾くだろう。季節は巡り、夏を迎えた。あと半年と少し。この大学で過ごす日々が愛おしく思える確信があった。



## 応募規定

### 【募集対象】

学習院在籍中の全生徒・学生・職員

### 【ジャンル】

小説（未発表作品に限ります）

### 【書式】

文字数2万字以内、縦書き。  
必ずページ番号をふってください。作中の人名や表現などについて、難しい、あるいは特殊な読み方をする漢字がある場合は、ルビ（ふりがな）をふってください。作品の冒頭に題名、終わりには「了」と記してください。

### 【応募方法】

作品はメールでのみ受け付けています。Microsoft Word で作成した作品データを、下記のメールアドレスまでお送りください。メールの本文には、題名・氏名・使用する場合はペンネーム・学科学年（または所属部）・携帯電話番号を明記してください。

### 【アドレス】

hojinkaiaward54@gmail.com

### 【締め切り】

2024年9月4日（水）

### 【発表】

輔仁会雑誌上で発表いたします。

### 【賞金】

入選 5万円  
準入選 3万円  
佳作 1万円

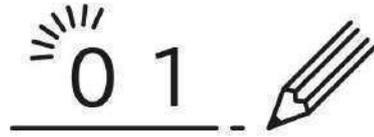
### 【その他】

応募に不備がある場合、選考されないことがあります。持ち込みや黎明会館のポストに直接入れられた作品は受理いたしません。

# 第54回 輔仁会 雑誌 作品募集 賞

# ゲームひろば

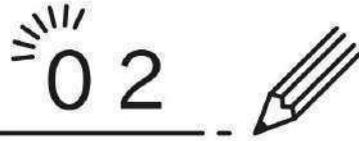
取材・文／菊地慶治郎、高橋慶圭、田中亜実、山本佳奈、橋本和樹、石川真衣



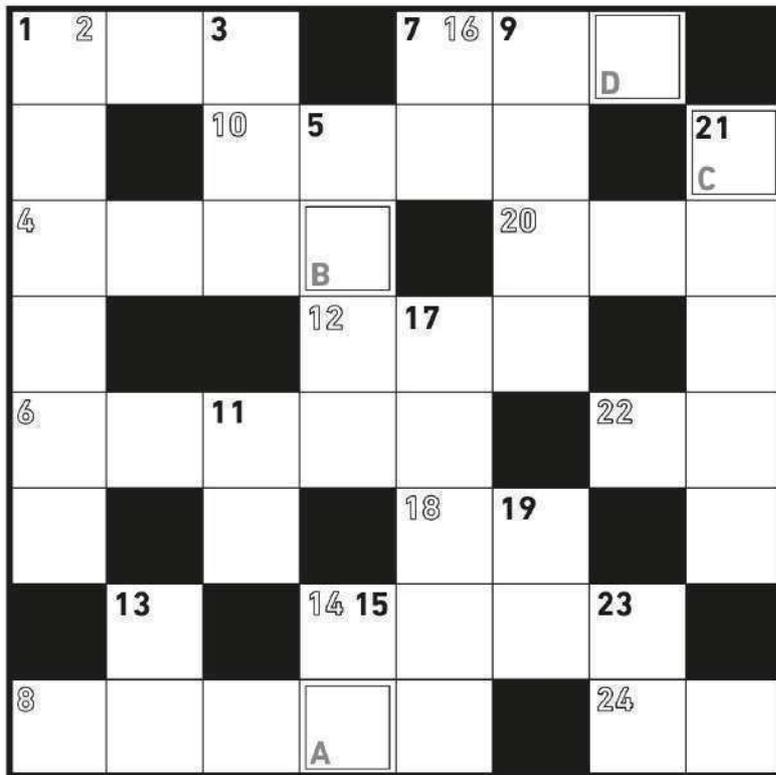
## 数独

- ①縦横の空いているマス目に1～9の数字を入れていく。  
この時、同じ列に同じ数を重複して入れてはいけない。
- ②3×3のマス目のそれぞれのブロックの空いているマス目に1～9の数を入れていく。  
この時、それぞれのブロック内で同じ数を重複して入れてはいけない。
- ③①、②の条件を共にクリアしつつ、空いているマス目を数字で埋めることができたならクリア！

	1			6		9	2	
2		4	8		5			7
5	6	7	2			3		
	4		5	8		6		9
3		8	9		6		7	
9				4	1			2
	8	1		5			9	
		9	1					4
7	2				3	8	1	



# クロスワード



※注意①  
同じ言葉を2回以上用いてはいけない。

※注意②  
小さい文字（ッ、ャ等）は大きい文字として扱う。

## 答え

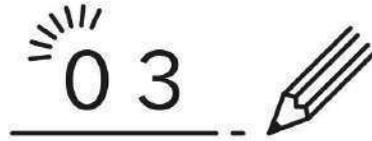
A	B	C	D
---	---	---	---

### 〈タテのカギ〉

- 1 アメリカ先住民
- 3 「乗る」の英語
- 5 厚生労働省の前身、○○省
- 7 マーベルコミックのスーパーヒーロー、「マイティ・○○」
- 9 聞いたことをすぐ忘れてしまうこと
- 11 平和の象徴
- 13 「○模様」「上の○」
- 15 中島みゆきの名曲
- 17 韓国の伝統的な煮込み料理
- 19 金属でできた容器
- 21 手塚治虫などの漫画家が住んでいたアパート
- 23 はなやかでないこと

### 〈ヨコのカギ〉

- 2 サケ・マスの卵で人気の寿司ネタ
- 4 「○○バイク」「○○自転車」
- 6 ロサンゼルス・エンゼルスの本拠地
- 8 三笥薫選手が所属するサッカーチーム「○○○○○・アンド・ホーヴ・アルピオン」
- 10 等しいこと
- 12 「アラビアン・ナイト」の「開けゴマ」が由来「○○○ストリート」
- 14 ある分野において正統から外れ、特異な存在として注目される人
- 16 もとになる材料や原料のこと
- 18 手術による治療が専門
- 20 海に突出した陸地の先端部
- 22 スペイン・旧スペイン植民地諸国で使われる通貨
- 24 徳川光圀がモデル「○○黄門」



# お絵かきロジック

縦と横に書かれている数字数をヒントにマス塗りつぶしてください。  
最終的に文字が浮かび上がります。

## ルール

- (1) タテ・ヨコ各列、数字の数だけマスを連続して黒く塗る。
- (2) 数字が2つ以上ある列は、それぞれの数字の数だけ連続してマスを塗り、その間を1マス以上あける。
- (3) 数字の並び順は、その列に並ぶ黒マスの順番

									1		1							
					1					1		1						
					1		1			1		1						
					1	8	1	0	2	8	1	8	1	0	7	1	1	4
		1	1	1														
		3	5	1														
	1	2	1	1														
		1	4	1														
3	1	1	1	1														
	1	4	1	1														
2	1	1	1	1														
		1	4	4														

# 解答

## 01 数独

8	1	3	7	6	4	9	2	5
2	9	4	8	3	5	1	6	7
5	6	7	2	1	9	3	4	8
1	4	2	5	8	7	6	3	9
3	5	8	9	2	6	4	7	1
9	7	6	3	4	1	5	8	2
4	8	1	6	5	2	7	9	3
6	3	9	1	7	8	2	5	4
7	2	5	4	9	3	8	1	6

## 02 クロスワード

A. トウトイ (尊い)

イ	ク	ラ		ソ	ザ	イ	
ン		イ	コ	ー	ル		ト
デ	ン	ド	ウ		ミ	サ	キ
イ			セ	サ	ミ		ワ
ア	ナ	ハ	イ	ム		ペ	ソ
ン		ト		ゲ	カ		ウ
	ソ		イ	タ	ン	ジ	
ブ	ラ	イ	ト	ン		ミ	ト

## 03 お絵かきロジック

A. 推し

						1	1										
				1			1	1									
				1	1			1	1								
				1	8	1	0	2	8	1	8	1	0	7	1	1	4
		1	1	1	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
		3	5	1			×				×			×	×	×	×
		1	2	1	1	×	×	×		×	×	×		×	×	×	×
			1	4	1	×	×	×	×		×			×	×	×	×
3	1	1	1	1			×	×		×	×	×		×	×		
		1	4	1	1	×	×	×	×		×			×	×		
2	1	1	1	1			×	×	×	×		×	×	×	×		
		1	4	4	×	×	×	×			×						



## 「ぼくの相棒」とは誰のことなのか？

押場 靖志

Oshiba Yasuji

学習院大学イタリア語講師

こんにちは、押場といいます。イタリア語を教えています。「ぼくの相棒」というテーマをいただきました。それについて考えてみます。

「相棒」とは不思議な「棒」です。そもそも駕籠やもっこを運ぶ棒ですが、ふたりで前後から担ぐときの相方を「相棒」と呼んでいた。転じて、共になにかをする「仲間」の意味になったようです。

イタリア語ではふつう「コンパニニョ」(compagno)と訳します。分解すれば「共に」(con-)「パン」(pane)をわかっ相手。ここに「棒」はありません。イタリア語では「パン」なのです。例を挙げましょう。「同窓生」(compagno di scuola)、「戦友」(compagno d'armi)、共産主義の党員がお互い呼ぶときの「同志」(compagno)など、食を共にした「仲間」、それが「コンパニニョ」です。けれども、「相棒」を仕事を分担し合う仲間と考えれば、思いだされるのはむしろ「コムーネ」

(comune) かもしれません。これは「共通の」という意味の形容詞ですが、名詞では「地方自治体」、中世では「都市国家」、さらに剣闘士の時代まで遡れば、ラテン語の「コンムーヌス」に至ります。

この形容詞「コンムーヌス」(communis)は、「共に」(con-)「義務」(munus)を分かち持つという意味ですが、興味深いのは「ムーヌス」(munus)。これは兵役や納税などの「義務」であり、神々や死者への「捧げ物」のこと。だから「剣闘士の戦い」もまた、神に命を捧げる「見せ物」であり、同時に人々への「贈与」だったというのです。

閑話休題。「相棒」には、隣接する表現に「片棒を担ぐ」があります。なんらかの企てを「相棒」と共にすることですが、あまり良い意味では使われません。策謀や犯罪などの協力者、つまり「共犯者」になることです。

その「共犯者」のイタリア語は「コンプリチエ」(complice)です。

遡ればラテン語の動詞(Completio)に至り、分解すれば「共に」(con-)「巻き込む」(plecto)となります。よく聞く「コンプレックス」という言葉も、実はその過去分詞の「巻き込まれた」(complex)から来ています。

だとすれば、イタリア語の「共犯者」(complice)は、ややこしい状況に巻き込まれながらも「片棒を担い」でくれる「相棒」なのかもしれません。

さてこのあたりで、「ぼくの相棒」が誰なのか考えてみましょう。一緒に駕籠やもっこをかつぎ、パンを共にし、なにがしかの義務を分かち持ち、なにがしかの捧げ物を共にしながら、入り組んだ状況のなか、時には共犯者として協力してくれるような、いわば「人生の相棒」(compagno della vita) …

あ、わかった。でも恥ずかしいから内緒です。

# 学習院さくらアカデミー

学生の皆さんのキャリアアップ・スキルアップに！

学習院さくらアカデミーでは、学生の皆さんのスキルアップ、自己啓発を応援する様々な講座を年間を通して開講しています。目標の実現に向けて、また自分の可能性を広げるためにも、さくらアカデミーの講座を積極的に活用してください。講座例としては、社会人としての基礎を身につける「秘書検定講座」、金融業界志望者向けの「FP（ファイナンシャルプランナー）技能検定試験対策講座」、WordやExcelなどのマイクロソフトオフィスのスキルを証明できる「MOS資格取得対策講座※」、就職や昇進に有利に働くといわれる「TOEIC」等の英語講座等、多彩なラインアップをご用意しています。

※ Wordは本学在学学生、無料。



学習院さくらアカデミー

TEL : 03(5992)1040

URL : <http://g-sakura-academy.jp/>

## 編集部員募集のご案内

学習院輔仁会雑誌編集委員会では一緒に雑誌を編集をしてくれる仲間を募集しています。伝統ある「学習院輔仁会雑誌」にあなたの作ったページを残してみませんか。

詳細は下記までお問い合わせください。

MAIL : [hojinmagazin@gmail.com](mailto:hojinmagazin@gmail.com)

Twitter : 学習院輔仁会雑誌編集委員会 (@hojinmagazine)

Instagram : [instagram.com/hojinmagazine](https://www.instagram.com/hojinmagazine)



学習院輔仁会雑誌編集委員会

初等科女子・女子部  
制服指定店

ヨシザワ

中央区日本橋 3-4-15  
八重洲通ビル 9F  
TEL 03(3271)4996

味自慢 江戸風味 あられ-おかき!

東燈せんべい

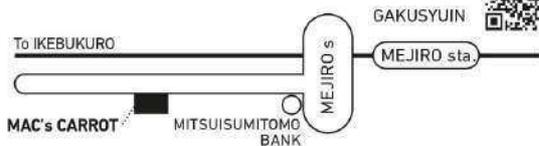
贈答用各種箱詰承取  
一地方発送も承り封一



味の店 豊島区目白 3-5-15 駅直下  
TEL (03) 3953-2595

THE FIRST & LAST  
MAC's CARROT

11:00~23:00  
Reservation Call 03-3565-3668 0080-5670-6295  
e-mail macs.carrot1973@gmail.com  
[https://www.google.co.jp/amp/s/s.tablog.com/tokyo/A1305/A130502/13012444/top\\_amp/](https://www.google.co.jp/amp/s/s.tablog.com/tokyo/A1305/A130502/13012444/top_amp/)  
KOUN BUILDING 3-16-16 MEJIRO TOSHIMA-KU TOKYO



まさご眼科  
DR. MASAGO'S EYE CLINIC



●新宿区四谷1-3  
高増屋ビル4F  
TEL:3350-3681

受付時間  
平日/AM9:30~12:20  
PM2:30~5:20  
水、土/AM9:30~11:50

広告掲載社一覧

松屋	1
学習院蓼々会	1
学習院さくらアカデミー	119
味乃店	120
まさご眼科	120
ヨシザワ	120
MAC's CARROT	120
一般社団法人 学習院桜友会	表IV

ご協力ありがとうございました。

広告募集のご案内

伝統ある「学習院輔仁会雑誌」に  
広告を出してみませんか。  
詳細は [hojin.koukoku@gmail.com](mailto:hojin.koukoku@gmail.com) まで  
お気軽にお問い合わせください。

学習院輔仁会雑誌編集委員会

桜友会は卒業生約14万人の

学習院同窓会です！



# 学習院桜友會

## 支部

全国支部 49支部  
北海道から沖縄まで展開  
(東京はエリア別に7支部)

海外支部 31支部

## 学校・学部同窓会 8部会

法学部同窓会  
経済学部同窓会  
文学部同窓会  
理学部同窓会  
草上会  
中等科・高等科桜友会  
初等科桜友会  
幼稚園桜友会

## 団体

職域桜友会 174団体  
企業別・業種別に展開

輔仁会OB・OG会  
131 団体  
部活・サークル別に展開

HPも是非ご覧ください

<https://www.gakushuin-ouyukai.jp/>



一般社団法人 学習院桜友会

〈事務局〉 〒171-8588 豊島区目白1-5-1 学習院創立百周年記念会館2F